

## 王権の伸張と同君連合の成立

—— 中世スコットランドの窓から(2) ——

### Expansions in Sovereign Power and Personal Union

—— Out of Windows in the medieval Scotland (2) ——

久保田 義 弘

---

#### 要旨と目次

本稿では、1328年にエディンバラ・ノーザンプトン条約で完全に独立した後のスコットランドを概観する。ロバート1世の死後に幼くして王位を継承したデイヴィッド2世の治世下で、土地をロバート1世に奪われた貴族ならびに傀儡政権エドワード・ベイリヤルとイングランド王エドワード3世の連合にその王位ならびにスコットランドの領土がその脅威に晒された。第1章では、スコットランドの第2次独立戦争を前半戦（デイヴィッド2世のフランス亡命）、そのデイヴィッド2世が亡命中に摂政が王制とスコットランド地域を防衛した中盤戦、そして、エドワード3世の直接統治宣言の恐怖に晒されたその後半戦の順で概説し、ステュアート王朝の成立と摂政政治と貴族層の台頭までを概観する。第2章では、ジェームズ1世による摂政から王権の奪還のための闘い、ジェームズ2世の王権侵害者に対する国王の闘争、脆弱な国王ジェームズ3世がスコットランドの不平貴族の抵抗に合い、スコットランドの王権が挑戦を受けたが、彼の後を継いだジェームズ4世が王権を伸張させ、近代的な国王としてスコットランド王国を統治した。彼の死後、スコットランドの王位を継承したジェームズ5世は、イングランドの脅威とフランスとの同盟の狭間の中で苦闘し、30歳で逝去する。生後6日のメアリーが女王に就いたが、摂政政治が執られ、5歳の時にフランスに渡り、フランソワ2世と結婚し、スコットランド女王であり、フランス王妃になった。フランソワ2世の死後、13年振りに、スコットランドに帰国したメアリー女王はジョン・ノックスなどに指揮される宗教改革に対応することとなった。メアリー女王を廃してジェームズ6世が王位を継承した。再び摂政政治になった。イングランド女王エリザベス1世が逝去した後、ジェームズ6世がイングランド王ジェームズ1世を兼務し、同君連合が誕生した。本稿では、同君連合王国の誕生直後のジェームズ1世と議会の対立を概観する。

本稿の構成は、第1章 第2次スコットランド独立戦争とエドワード3世の直接統治宣言、第2章 王権の伸張：ジェームズ1からジェームズ5世、第3章 宗教改革とメアリー女王、

#### 第4章 同君連合王国の誕生とジェイムズ1世と議会の対立，である。

（キーワード：スコットランド独立戦争，スコットランド王権の伸張，スコットランド人のアイデンティティ，スコットランドの宗教性，同君連合，グレートブリテン，分権化運動）

### はじめに：伝統的文化遺産と地域再生戦略

グローバル化と市場経済の統合，伝統的文化遺産およびその再評価・復興の運動，スコットランド人のアイデンティティ形成とその維持，およびその分権化運動と地域社会再生運動などを総合的にとり扱うのがわれわれのスコットランド研究の目的である。スコットランドで採られている地域再生戦略は，「コミュニティ・ビジネス論」あるいは「社会的企業論」を基盤にもつ地域経済の再生であり，「グレートブリテン」からの分離・独立運動を目指したスコットランド地域の再生である。この地域再生は，ナショナルリズム，あるいは，リージョナルリズム（地域主義）の様相を帯びてはいるが，スコットランド議会もその分離・独立運動を繰り広げている。

われわれの研究の最終的な目的は，スコットランドのハイランド・アイランド地域の再生の事例研究から地域再生の一般的な理論を組み立てることにある。スコットランドのハイランド・アイランド地域を研究対象に選んだのには，次の2点の理由からである。第1に，スコットランドが「グレートブリテン」の周辺地域であること，第2に，スコットランドがグローバル化の時代にスコットランド人としてのアイデンティティを形成し，グレートブリテンからの分権化・独立運動を繰り広げている地域であることによる。スコットランド人のアイデンティティとは何であり，それがどのように歴史的に形成されたのか，スコットランドの分離・独立運動にそのアイデンティティがどのように繋がっているかを明らかにし，その分離・独立運動の動きが，スコットランドの地域再生と無関係ではないことを明らかにし，かつ，その地域再生の運動自体を明らかにすることを本研究では試みる<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup>われわれは、『スコットランド研究(1)——スコットランドの歴史と文化と政治的視点から，地域再生戦略，その国民性ならびに分離・独立運動の考察』において，中世スコットランド（9世紀から13世紀）では国王が即位するときに腰掛けた運命の石（スコーンの石）がスコットランド人の心の拠り所であり，イングランドとの違いを誇示するものであったことを示唆した。その石がエドワード1世（在位1272-1307年）によってウエストミンスター・アヴィーに持ち去られたことがスコットランド人（中世）に独立の気概を与え，実際にウィリアム・ウォレス，ロバート・ドゥ・ブルース（ロバート1世）によって独立運動は繰り広げられ，1328年のヨーク協定において，スコットランドはイングランドの統治支配から独立した。また，その後のスコットランド国王も運命の石が持ち去られたスコーンで即位した。これは，運命の石がスコットランド人の心の支えであったことの証であると解釈している。この石が，スコットランド人のアイデンティティになっていると思われる。1996年，メジャー首相によって運命の石がスコットランドに戻された時のスコットランド国民の心の高まり，イングランドからの分離・独立を得たかのような高まりであった

われわれのスコットランド研究は、3つの柱で構成されている。その第1の柱は、グローバル化の下で、「コミュニティ・ビジネス論」あるいは「社会企業論」の地域再生に果たす役割を探求する。これは、地域の経済的・社会的課題を地域の視点に立つ「コミュニティ・ビジネス論」である。この理論によると、収益性の低い地域には私的所有資本の企業は参入しないので、その地域の雇用水準は低く、その地域の人口は他の地域に移動し、その地域の生産ならびにコミュニティも崩壊する。その地域を再生するためには、その地域に居住する人とその地域の共同資本（共有の土地や固定施設等）を活用する事業体が、その地域に起こされるかあるいはその地域に参入し、地域の経済的社会的課題とその解決策を「コミュニティ・ビジネス論」あるいは「社会企業論」の観点から提唱する。グローバル化は、経済活動の地域統合を進める一方で、そのコミュニティの人・もの・カネなどの資源が周辺の中小都市や大都市へと流出させ、その地域経済の再生・立ち直りを遅らせる。別稿にて、「コミュニティ・ビジネス論」あるいは「社会企業論」のビジネス・モデルによる地域再生戦略を試みる<sup>2</sup>。その第2の柱は、現在スコットランドで進行中の分離・独立運動の原動力である。これとスコットランドの平和政策や軍事政策との関係を研究する。

その第3の柱は、歴史概観を通して、スコットランド人の国民性やその宗教性を理解することである。そのために、われわれは、スコットランドの歴史とその文化遺産に目を向ける。その伝統的文化の復興とその価値の再評価を通して、スコットランド人であるというアイデンティティが確信され、その分権・独立運動ならびに地域社会再生の運動に原動力を与える、と確信している。そのアイデンティティと地域再生とその分権化・独立運動が、現在のグローバル化の下でどのように結晶化し、すなわち伝統的文化遺産、地域社会再生の理念・思想、ならびにその分権・独立運動がどのように関連しているのかを探求する。本稿は、この方向での研究である。

本稿では、1330年から1625年までのスコットランド王国に焦点を当てその歴史を概観する。14世紀のスコットランドのイングランドからの完全独立後に再び展開されたスコットランドの第2次独立戦争からステュアート王家の成立までと、15世紀から16世紀中旬までのスコッ

---

と推測される。

<sup>2</sup> 地域再生とは、その地域の人口の減少を止め、その人口を増加させる活動である。そのために雇用機会を創出する生産主体（企業）の活動に再生のエネルギーを求めるビジネス・モデル、すなわち地域コミュニティに密着した零細・小企業の起業実践にした「コミュニティ・ビジネス論」や「社会企業論」では、起業手法、法制度、小企業の企業形態が研究対象であったが、この地域再生運動を分離・独立運動に関連づける研究は少ない。地域社会再生運動と分権化・独立運動を関連づける研究では、伝統的文化遺産の再評価とその復興運動に基礎をおく必要があり、スコットランド人のアイデンティティ動員運動の研究と地域再生の関連性を明らかにする必要がある。というのは、スコットランド人の伝統的文化遺産が、スコットランドの地域再生戦略とその分権・独立運動の基礎をなしていると解釈できるからである。

トランドの「王権の拡張とその伸張」, メアリー女王の時代を経て, 1603年の「王君連合」成立時期までの歴史を概観し, スコットランド人によって培われてきた国民性や宗教性を探り, 現代のスコットランドの地域再生の原動力(スコットランド人であるというアイデンティティ)の深層を探る。

## 第1章 第2次スコットランド独立戦争とエドワード3世の直接統治宣言

### 第1節 ロバート1世からデイヴィッド2世へ: エドワード3世の影

ロバート1世<sup>3</sup> (Robert I) (在位 1306年-1329年) の1328年にスコットランドは完全に独立を成し遂げた。その年のエディンバラ・ノーザンプトン条約にて第1次スコットランド独立戦争は終結し, スコットランドに平和が訪れたかと思われたが, しかし, その独立は再びイングランドの侵攻によって脅かされる事態になった。彼の後継者は, 息子のデイヴィッド2世<sup>4</sup> (David II) (在位 1329年-1332年, 1346年-1371年) で, 1329年に5歳で王位に就き, 7歳で戴冠した。即位と戴冠に2年の差があった。これは, ロバート1世の心臓を聖地に運ぶ途上で戦死したジェイムズ・ダグラス (James Douglas) (1284年生?-1330年没) の死に暗示されるように, 多難を予感させるデイヴィッド2世の船出であった。

デイヴィッド2世が即位したとき, すでにスコットランドは完全に独立を達成していたが, その独立は, 1307年のイングランド王エドワード1世 (Edward I) (在位 1272年-1307年)

<sup>3</sup> ロバート1世 (ロバート・ドゥ・ブルース) (Robert I, Robert de Bruce, 7<sup>th</sup> Lord of Annandale) (国王在位 1306年-1329年) は, 1306年にダムフリース (Dumfries) のグレイフライアーズ教会 (Greyfriars Church) の中央祭壇の前でパッドノッホ卿ジョン・カミン (John Comyn, Lord of Badenoch) (1306年没) を何故殺したのかについての詳細は不明である。ただ, 考えられる大きな要因は, 両者によるスコットランド王位をめぐる争いであった。ジョン・カミン (彼は Red Comyn と渾名された) は, スコットランド王ドナルド3世 (Donald III) (在位 1093年-1097年) の末裔であり, ロバート・ブルースは, スコットランド王デイヴィッド1世 (David I) (在位 1124年-1153年) の4人の孫の中のハンティングトン伯デイヴィッド (David, 8<sup>th</sup> Earl of Huntingdon) (1144年生-1219年没) の子イサベラ (Isabella) (1199年生-1251年没) が第4代アナンディル卿ロバート・ブルース (Robert Bruce, 4<sup>th</sup> Lord of Annandale)

(1211年生?-1233年没?)と結婚したことによって, スコットランド王家に繋がっていた。ロバート1世は, 1314年のバノックバーンの戦い (Battle of Bannockburn) に勝利し, スコットランドの独立を確実にしたが, それは, 1307年にエドワード1世が病没したことに, 大きく依存していたと思われる。この独立戦争は, 他面において, スコットランドの内紛 (内乱) の面もあった。メスヴァンの戦い (Battle of Methven) (1306年), ロウドンの戦い (Battle of Loudoun) (1307年), インヴェルリリーの戦い (Battle of Inverurie) (1308年), ブランダーパスの戦い (Battle of the Pass of Brander) (1308年) の内戦を通じて, カミンとその関係者の領土・勢力は縮小し, ブルースの力は拡大した。

<sup>4</sup> デイヴィッド王は, 1328年, エドワード2世の娘ジョアン (Joan Plantagenet) (生没不詳) と結婚した。その結婚の仕掛け人は, エドワード2世の王妃イザベル (フランスの端麗王フィリップ4世 (在位 1285年-1314年) の娘) と彼女の寵臣ロジャー・ドゥ・モーティマー (Roger de Mortimer, 1<sup>st</sup> Earl of March) (1287年生?-1330年没) であった。それは, イングランドによるスコットランドとの和解を目論んだ政略結婚であった。

の病死と愚王エドワード2世(Edward II)(在位1307年-1327年)の失政という偶然に多くを依存して達成されたのではないかと思われるほどに奇跡的であった。実際、スコットランドのデイヴィッド2世と彼の摂政による政権(王権)は、決して、安定してはいなかった。エドワード2世の後を継いでエドワード3世(Edward III)(在位1327年-1377年)が王位に就くと、その王の領土拡張政策は、スコットランド王だけではなく、スコットランド王国にとっても驚異であったと思われる。

エドワード3世は、賢王であったが、野心家でもあった。また、彼の母親は、フランスの端麗王フィリップ4世(Philippe IV)(在位1285年-1314年)の娘イザベラ(Isabella of France)(1295年生-1358年没)であった。それ故に、彼は、フランス王位の継承権<sup>5</sup>に強い関心を持ち、フランスにおける領土の拡張を狙っていた。フランスがアキテーヌ領ガスコーニュ(Gascone)<sup>6</sup>の没収を宣言し、ガスコーニュに進軍したことを機に、彼は、フランスに宣戦布告し、イングランドとフランスの間での「百年戦争」<sup>7</sup>(1337年-1450年ごろ)に突入した。百年戦争開始

<sup>5</sup> エドワード3世の母であるエドワード2世の王妃イザベラは、フランスの端麗王フィリップ4世(在位1285年-1314年)の娘であったので、エドワード3世には王位継承権があった。その後、その子ルイ10世(Louis XI)(在位1314-1316)、その孫ジャン1世(Jean I)(在位1316)、その子フィリップ5世(Phillipe V)(在位1316-1322)、その子シャルル4世(Chareles IV)(在位1322-1328)までカペー王朝が続いた。シャルル4世の死によってカペー王朝は途絶えた。このとき、フランス王フィリップ6世(Phillipe VI)(在位1328年-1350年)は、それまでのカペー王朝に代わって、ヴァロア王家を開くが、イザベラの兄シャルル4世を叔父にもっていたイングランド王エドワード3世は王位継承に異を唱えた。エドワード3世は、フランスのヴァロア王朝とは姻戚関係がなく、フランス王位継承権はなくなった。しかし、イングランド王とフランス王とのいがみ合いは、一層エスカレートすることとなった。

<sup>6</sup> イングランド王エドワード3世はガスコーニュ公の地位にあった。よって、イングランド王は、フランス王即位に際して臣従礼をしなければならなかった。ガスコーニュは、現在のオート＝ピレネ県、ランド県、ジュール県を含んでいる。

<sup>7</sup> フランス王位継承の訴えがイングランド王エドワード3世によって1337年に初めて示された。エドワード3世は、自分こそはフランス王であり、その権利は母イザベラから伝えられる、と述べた。しかし、この要求は、国家目的と言うよりも、エドワードの個人的な目的であった。

エドワード3世の百年戦争について概観してみよう。エドワード3世軍は、1346年にノルマンディー(Normandie)に上陸し、ポンティユー伯領クレシー(Crécy)の陸戦でフランス軍に大勝した。イングランド軍は、3部隊に分かれて戦った。皇太子ブラック・プリンス(Black Prince エドワード黒太子)の異名をもつエドワードは、ウォリック伯トマス・ドゥ・ボーチャンプ(Thomas de Beauchamp, 11<sup>th</sup> Earl of Warwick)(1313年生?-1369年没)とオックスフォード伯ジョン・ドゥ・ヴェール(John de Vere, 7<sup>th</sup> Earl of Oxford)(1312年生-1360年没)と共に800人の騎兵、2,000人の弓兵、1,000人の歩兵からなる部隊を指揮した。残りの2部隊は、ノーサンプトン伯ウィリアム・ドゥ・ボーハン(William de Bohun, 1<sup>st</sup> Earl of Northampton)(1312年生-1360年没)とアランデル伯リチャード・フィアラン(Richard FitzAlan, 10<sup>th</sup> Earl of Arundel)(1306年生-1376年没)の指揮下の部隊と王の指揮下にある部隊であった。また皇太子ブラック・プリンス・エドワードは、ポワティエの戦い(Battle of Poitiers 1356年)で善良王ジャン2世(Jean II)(在位1350年-1364年)を捕虜にする大勝をあげた。王太子シャルル、後のシャルル5世(Chales V)(在位1360年-1378年)との間で1360年にプレティニョ(Brétiny)・カレー条約を結び、英仏の和議が成立し、エドワード3世は、フランスの王位継承権を放棄する代わりに、アキ

後、イングランド王の侵略対象は、スコットランド王国からフランス王国に変わった。しかし、イングランドのフランスとの戦争は、その宿敵スコットランドとの紛争から派生したものであった。

## 第2節 傀儡政権エドワード・ベイリヤルとエドワード2世：第2次スコットランド独立戦争の勃発

スコットランドと古い同盟 (Auld Alliance) を結んでいたフランスからの脅威を小さくし、スコットランドの力を押さえ、スコットランドを味方につけておくことに関心を持っていたエドワード3世は、デイヴィッド2世<sup>8</sup>がロバート1世を継ぎ戴冠すると、スコットランドのファイフに上陸し、ロバート1世によって土地の相続権が剥奪<sup>9</sup>され、フォース湾 (Firth of Forth) の北側のファイフ (Fife) 地域一帯に屯していた貴族と共謀し、スコットランド軍を敗退<sup>10</sup>させた。ジョン・ベイリヤル (John Balliol) (在位 1292 年-1296 年) の長男エドワード・ベイリヤル (Edward Balliol) (在位 1332 年 8 月-1332 年 12 月, 1333 年-1346 年) を王位に就けることを約束していたエドワード3世は、彼に協力したスコットランドの貴族と共にスクーンに向かい、そこでエドワード・ベイリヤルの戴冠式を挙行した。このことは、イングランド王エドワード1世 (Edward I) (在位 1272 年-1307 年) の支配の脅威を脱して、スコットランドの完全な独立を達成したスコットランドの第1次独立戦争と同じように、エドワード3世の直接統治の脅威を回避する戦いがスコットランドの第2次スコットランド独立戦争 (The Second War of Scottish Independence 1332 年-1357 年) であった。この戦争は、実際にはスコットランド内での内紛 (内戦) の様相を呈していた。イングランド王の傀儡政権エドワード・ベイリヤルとそれを容認しなかったデイヴィッド2世を支える貴族と

---

テヌー (Aquitaine), カレー (Calais), ポンティア (Poonthieu), ギズネ (Quynne) などの主権を獲得した。1375年にブリュージュ (Bruges) における休戦条約を機に、エドワード3世の英仏戦争は終わった。この戦争の終結後に、イングランドとフランスの国境線が確定した。これ以後、両国の国民意識が確立された。

<sup>8</sup> デイヴィッド2世が王位を継承したのが1329年であったが、その戴冠式は1331年11月であった。

<sup>9</sup> イングランドでは、イザベラとモーティマー (Roger de Mortimer, 4<sup>th</sup> Earl of March) (1374年生-1399年没)の失脚後、国外追放から帰国した有力者はスコットランドの諸領地への請求権を持ち、自分達の指導者をジョン・ベイリヤルの息子エドワードに見いだしていた。

<sup>10</sup> デイヴィッド2世が5歳で国王に即位した時、彼の最初の摂政は、第1次スコットランド独立戦争に貢献し、かつロバート1世 (Robert I) (在位 1306 年-1329 年) の従兄弟 (あるいは甥) であったマリ伯トマス・ランダルフ (Thomas Randolph, Earl of Moray) (1332 年没) であった。彼は、ファイフに向かう途中、マッセルバラ (Musselburgh) で病気のために急死した。彼の病死後、貴族によって摂政役に選ばれたのは、ロバート1世の甥のマー伯ドナルド・マー (Donald Mar, Earl of Mar) (1302 年生?-1332 年没) であったが、彼は、摂政に就いてから9日後、1332 年 8 月、ダブリン・ムア (Dupplin Moor) の戦いで戦死し、デイヴィッド2世軍は敗退した。

の戦いであった。第2次スコットランド独立戦争は、1296年から1328年までの30年間に亘ってイングランドとの間で戦った第1次スコットランド独立戦争の延長上にある、と理解される。

第2次スコットランド独立戦争を概観する。その前半戦を最初に概説しよう。ダップリン・ムーアの戦い (Battle of Dupplin Moor) (1332年7月) では、摂政のマー伯が戦死し、スコットランド軍 (デイヴィッド派) は敗北し、その年、ベイリヤルが国王に即位した。アナンの戦い (Battle of Annan) (1332年12月) では、アーチボルド・ダグラスがエドワード・ベイリヤルを破ってベイリヤル軍をイングランドに敗走させたが、その後直ぐに、再び、エドワード・ベイリヤル軍がスコットランドに攻め入ったドーノックの戦い (Battle of Dornock) (1333年3月) では、指揮官のウィリアム・ダグラスが捕らわれ、デイヴィッド派は敗北した。また、ベリクの町の北のハリダン・ヒルの戦い (Battle of Halidon Hill) (1333年7月) でダグラス軍は敗北し、1333年に摂政のアーチボルド・ダグラスが戦死した。この敗戦でベイリヤルの勝利が決定的であった、と思われる。エドワード・ベイリヤルが支配権を握った。

よって、生命の危険を感じたデイヴィッド2世は、フランスに亡命した。ジョン・ダンドルフ (John Randdolph, 3<sup>rd</sup> Earl of Moray) (1300年生?-1346年没) が摂政に就き、ベイリヤル軍と戦った。ベイリヤル軍の他にエドワード3世も直接的にスコットランド領内に侵攻し、エディンバラの南のバラムーアで、マリ伯ランダルフとウィリアム・ダグラスとがイングランドのガイ (Guy, Count of Namur) (1312年生-1336年没) と戦った。これがバラムーアの戦い (Battle of Boroughmuir) (1335年7月) である。この戦いで、デイヴィッド派は勝利したが、摂政マリ伯は、捕らえられ、イングランドに、5年間、監禁された。次に、摂政役にサー・アンドリュー・マリー (Sir Andrew Murry) を選ぶが、スコットランド中央および南部はベイリヤルならびにエドワード3世に支配され、スコットランドは国家的に危機的な状態にあった。摂政のアンドリュー・マリーは、エドワード3世の政策を遂行していたアサル伯デイヴィッド (David III, Titular Earl of Atholl) (1309年生?-1335年没) と戦った。これは、カルブリーンの戦い (Battle of Culblean) (1335年11月) として知られている。この勝利は、デイヴィッド派にとってのみならず、スコットランドにとっても意味のある勝利であった。この勝利でスコットランドの支配権がベイリヤル派からデイヴィッド派に移動しはじめた。ここまでの一連の戦いは、第2次スコットランド独立戦争の前半戦であった。

その後は、第2次スコットランド独立戦争の中盤戦である。エドワード3世の直接の臣下がスコットランドに送られた。エドワード3世は、フランス軍がスコットランドから南下し、イングランドに攻め入る可能性を潰すために、スコットランドを侵攻した。1338年のダンバーの戦い (Battle of Dunbar) におけるアグネス・ランドルフ (マーチ伯パトリックの婦人)

の活躍によってソールズベリー伯 (Earl of Salisbury) (William Montacute, 1<sup>st</sup> Earl of Salisbury) (1301年生-1344年没)を撤退させた。スコットランドのデイヴィッド派の力が強くなり、デイヴィッド2世は、亡命先のフランスからスコットランドに帰国したが、1346年のネヴィルズ・クロスの戦い (Naivil's Cross) によって、スコットランドのデイヴィッド派は大きな敗北を喫した。国王はイングランドに捕らえられ、ロンドン塔に監禁された。

ネヴィルズ・クロスの戦いの後がこの戦争の後半戦である。その戦いに敗れると、スコットランドは、イングランドの直接統治の支配に晒された。傀儡王エドワード・ベイリヤルは、エドワード3世に臣従を誓い、ベリク (Berwick) の町ならびにその周辺をイングランドに提供し、スコットランドのローランドの殆どの地域をエドワード3世に割譲した。スコットランドの南部から中部にかけてイングランド軍が駐留<sup>11</sup>し、そこにはイングランドの商人と聖職者であふれてきた。エドワード・ベイリヤルの政策に不満を持つ貴族が彼に剣を向けた。このイングランド王の占領を阻止する戦いが第2次スコットランド独立戦争の後半戦であった、と理解される。

### 第3節 デイヴィッド2世のフランス亡命と第2次スコットランド戦争の展開

デイヴィッド2世が5歳で国王に即位した時、彼の最初の摂政<sup>12</sup>は、第1次スコットランド独立戦争で活躍したロバート1世の甥<sup>13</sup>のマリ伯トマス・ランドルフ (Thomas Randolph, Earl of Moray) (1332年没)であった。彼は、ロバート1世によって公民権を剥奪されたエドワード・ベイリヤルとヘンリー・ボーモント<sup>14</sup> (Henry de Beaumont, 4<sup>th</sup> Earl of Buchan) (1340

<sup>11</sup> スコットランドには強固な城塞のネットワークが無いので、常備軍を駐留させる必要があった。しかし、それには高額な費用が必要であった。例えば、1333年5月から7月までの3ヵ月で2万5,000ポンドの軍事費が必要であった。

<sup>12</sup> トマス・ランドルフの他に、Sir James of Durrisdeer と聖アンドリュースのアーチディーコン (Archdeacon: 首席助祭) であったウィリアム・リンゼイ (William Linsey, Archeacon of St Andrews) (生没不詳) も共同して摂政役を担った。

<sup>13</sup> ロバート1世の母親であったカリク (Carrick) 地方のマジョリー (Marjorie of Carrick) の娘がトマス・ランドルフと結婚したので、従兄弟であると言う説もある。しかし、ロバート1世の父親が2度結婚しており、その2度目の妻エリーナー (Eleanor) (1331年没) との間に生まれた娘がトマス・ランドルフと結婚していたので、このことからトマス・ランドルフは、ロバート1世の甥であると言える。ここでは後者の見解を採る。

<sup>14</sup> ボーモントは、1297年、エドワード1世と共にフランドルでフランスのフィリップ4世との戦いに参戦し、翌年、エドワード1世と共に、スターリング橋の戦い (Battle of Stirling Bridge) での敗北を取り返すために、イングランドに戻り、ウィリアム・ウォレスを打ち負かすフォークの戦い (1298年) に参戦した。また、パノックバーンの戦い (Battle of Bannockburn) では、エドワード2世側に立って戦ったが、敗北した。その後、1328年のエディンバラ・ノーザンプトン協定によって、彼のバハン伯はロバート1世によって剥奪された。彼は、1310年にジョン・カミンの後継者であったアリス・カミン (Alice Comyn) と結婚していた。これによってバハン伯を与えられていた。

年没) がヨークシャーの港からファイフのキングホーン (Kinghorn) に向かってきたことを知り、それを迎え撃つためにエディンバラからファイフに向かったが、その途中のマッセルバラ (Musselburgh) で病気のために急死した。彼の病没後、貴族達によって摂政役にロバート1世の甥<sup>15</sup>のマー伯ドナルド・マー (Donald II/Domhnall II, Earl of Mar) (1302年生? -1332年没) が選ばれた。しかし、彼は、摂政に就いてから9日後に、1332年8月のダップリン・ムーアの戦い (Battle of Dupplin Moor) でパトリック・ダンバー (Patrick V, 9<sup>th</sup> Earl of Dunbar) (1285年生? -1369年没) と共にヘンリー・ドゥ・ボーモント旗下の軍に敗北し、マー伯は戦死した<sup>16</sup>。その戦いに勝利したエドワード・ベイリヤルは、ベリクなどのボーダーの地域に侵入し、パースの北東に位置するスコーンで国王として戴冠した。

マー伯没後、その摂政役はサー・アンドリュウ・マリー (Sir Andrew Murray あるいは Sir Andrew Moray) (1297年生? -1338年没) に渡され、彼の後、その役を引き継いだ愛国者サー・アーチボルド・ダグラス (Archibald Douglas) (1293年生? -1333年没) は、弱腰なエドワード・ベイリヤルに戦いの矛先を向けた。アナンの戦い (Battle of Annan) (1332年12月) でベイリヤル等をイングランドに追い出すことに成功した。しかし、エドワード3世の支援を得ていたベイリヤルとその支持者は、スコットランドに攻め入り、掠奪することを目指した。1333年3月のドーノックの戦い<sup>17</sup> (Battle of Dornock) では、ロツホメイバン城で軍を指揮していたサー・ウィリアム・ダグラス (Sir William Douglas) (1300年生? -1353年没) は、戦利品を搭載したイングランド軍を捕らえるために追撃したが、逆に、彼は、捕らえられ牢獄に入れられ、監禁された。デイヴィッド2世側の敗北であった。また、1333年7月に

<sup>15</sup> 彼の父、マー伯ガルトナイト (Gartnait, Earl of Mar) (生没不詳)、は、ロバート1世とは義理の兄弟であり、さらに彼はロバート1世の姉クリスチャン・ブルース (Christian Bruce) (1273年生? -1356年没) と結婚していたので、摂政マー伯ドナルドIIはロバート1世の甥であった。

<sup>16</sup> マー伯の他に死亡した人には、ロバート1世の非嫡子であったロバート・ブルース (Robert Bruce) (1332年没)、摂政トマス・ダンドルフの長男であった2代マリ伯トマス・ランドルフ (Thomas Randolph, 2<sup>nd</sup> Earl of Moray) (1332年没)、メンテイス伯マードック (Murdoch III, Earl of Menteith) (1332年没)、最高司令官のアレグザンダー・フレーザー (Alexander Fraser, the High Chamberlain) (1332年没) がいた。

<sup>17</sup> その前年の1332年に、ダップリン・ムーアの戦いで勝利し、摂政マー伯を敗北させたが、アナンの戦いでは再びイングランドに押し戻されたエドワード・ベイリヤルは、1333年3月、大軍を引き連れて国境を越えて、ベリクに要塞を設けた。1333年3月22日、サー・アーチボルド・ダグラスは、東国境越えに失敗し、西国境を越えてイングランドに侵入した。これが、エドワード3世に軍事的準備の口実を与えた。その年の3月24日には、Dacre は、サー・アンソニー・ルーシー (Sir Anthony Lucy) と共に、ドーノックの浅瀬でソルウェイ (Solway) を横切り、イングランドの大軍をダンフリーズシャーに引き連れてきた。侵入者は、リズデイル卿ウィリアム・ダグラス (William Douglas, Lord of Liddesdale) の指揮下にあったロツホメイバン城 (Lochmaben Castle) に達した。ダグラス伯達は、サー・アンソニー・ルーシーと戦ったが、牢獄に入れられ、2年間、監禁された。

は、サー・アーチボルド・ダグラスが摂政のときに、ベリク (Berwick) の北西のハリダン・ヒルにおいて、デイヴィッド 2 世派は、侵攻者と戦った。軍人であった摂政ダグラスの軍とエドワード 3 世に支援されていたエドワード・ベイリヤルとの間にハリダン・ヒルの戦い (Battle of Halidon Hill) が起こった。このハリダン・ヒルの戦いでは、摂政のダグラス軍が敗北し、愛国者であったサー・アーチボルド・ダグラスは戦死した。この戦いにおいても、ダップリン・ムーアの戦いと同じように、スコットランドは、その最高指導者であった摂政を失った。ダグラスの摂政在任期間は 3 ヶ月ほどであった。

王位を追い落とされ、生命の危険さえ感じられた少年のデイヴィッド 2 世は、王妃ジョアンと共に、フランスのフィリップ 6 世 (Philippe VI) (在位 1328 年-1350 年) を頼って逃げ出した。2 人は、7 年間ノルマンディのシャトー・ガイヤール (Château Gaillard) で亡命生活を送った<sup>18</sup>。デイヴィッドは、そこで成人に達するまで暮らし、1341 年、18 歳のとき、王妃と共にスコットランドに帰国した<sup>19</sup>。

デイヴィッド 2 世がフランスに亡命している期間の間、ダグラスの摂政役の後を継いだのは、最初、1334 から 1335 年までは、マリ伯ジョン・ランダルフ (John Randolph, 3<sup>rd</sup> Earl of Moray) (1300 年生-1346 年没)、次に、1335 年から 1338 年まではサー・アンドリュー・マリーおよびその後はロバート 2 世 (在位 1371 年-1390 年) として即位したロバート・ステュワート (Robert Stewart, Earl of Strathearn) (1316 年生-1390 年没) との共同で摂政役を務めた。デイヴィッド国王がフランスに亡命した後、ダップリン・ムーアの戦い、および、ハリダン・ヒルの戦いで勝利していたエドワード・ベイリヤル派であったが、彼自身で政権を確立するほどには、強力でもなく、人気もなかった。この状態を見るに見かねていたエドワード 3 世<sup>20</sup> は、彼を援護し支え、スコットランドを手に入れることを目論んで、エドワード・

<sup>18</sup> 1333 年から 1357 年の間、スコットランドには 2 人の国王がいた、と見なされる。1 人は、デイヴィッド 2 世であり、他の 1 人は、エドワード・ベイリヤルであった。しかし、前者は、1334 年から 1341 年までフランスに逃亡しており、後者は、1332 年にイングランドに逃げたままであった。エドワード 3 世は、1356 年に 2,000 ポンドの年金をエドワード・ベイリヤルに与え、スコットランド王国の一部を引き受けた。デイヴィッド 2 世は、1346 年のネヴィルズ・クロスの戦いにおいて完膚無きまで撃ち破られ、囚われの身となり、ロンドン塔に軟禁された。

<sup>19</sup> デイヴィッド 2 世のフランスからの帰国は、イングランドとの戦いを好転させることを狙ったフランス王フィリップ 6 世の指示によるものであったかもしれない。

<sup>20</sup> エドワード 3 世は、ニューカッスルに 1 万 3 千以上の軍を持ち、カーライルからのエドワード・ベイリヤル軍と合流し、スコットランドに侵攻することを計画した。スコットランドを陸と海から挟撃することを計画した。軍隊は、2 派に分かれ、エドワード 3 世は、カーライルからスコットランドに侵攻し、ベイリヤルはベリクから陸路で北方に上っていった。ベイリヤル軍は、タイ湾 (Firth of Tay) に向い東海岸を上がる強力な海軍によって支えられた。エドワード 3 世軍は、アイルランドからの海を渡ってきた軍隊に支えられた。

エドワード 3 世軍は、Nithsdale を通って Loch Doon 城を迂回し、カリク (Carrick)、カニンガム

ベイリヤルとともにスコットランドに侵入することを決めた。この侵攻の目的は、スコットランド軍を壊滅させることにあり、戦利品や城を奪うことにはなかった。摂政役のジョン・ダンドルフは、1335年7月、エドワード3世の王妃フリッパ (Queen Philippa, Philippa of Hainault) (1314年生-1369年没)の従兄弟のナムール伯ガイ (Guy, Count of Namur) と、エディンバラの近くのパラムールの戦い (Battle of Boroughmuir) に勝利した。これはパラムールの戦いとして知られている。ジョン・ダンドルフは、その戦いには勝利したが、イングランド軍に捕らえられた。

次に、1335年9月、摂政役にはサー・アンドリュー・マリー (Sir Andrew Murray, Andrew de Mary of Avoch) (1298年生?-1338年没) が就いた。デイヴィッド派の残党の一団がダンバートン城 (Dumbarton Castle) に集まり、国王亡命中の留守居の摂政として彼が選ばれた。彼が摂政に就いたときは、スコットランドは、厳しい状態にあった。スコットランドの中央とその南の殆ど全ては、エドワード・ベイリヤルとその連合に抑えられていた。その地域の全ての自由保有者は、ベイリヤルに従えられていた、と思われる。スコットランド政府は、壊滅寸前の危機的状态で、摂政に選ばれたアンドリュー・マリー自身にとっての課題は、名目上のアサル伯ストラスポギーのデイヴィッド (David III, Titular Earl of Atholl) (1309年生?-1335年没) と交渉し取引きすることであった。というのは、スコットランド北部におけるストラスポギーのデイヴィッドの政策は、エドワード3世の政策の鏡であった。100人以上の自由保有者の土地が没収された、と思われる。彼は、アバディーンシャーにあるキルドラミー城<sup>21</sup> (Kildrummy Castle) を包囲し、スコットランド南部の平定の最終章を迎えていた。摂政アンドリュー・マリーは、1335年11月にエドワード3世の政策を遂行していたアサル伯デイヴィッド (David III, Titular Earl of Atholl) と戦った。これは、カルブリーンの戦い<sup>22</sup> (Battle of Culblean) として知られている。この勝利は、デイヴィッド派にとっての

---

(Cunnigham), キール (Kyle) を侵略した。一方、ベイリヤルは、ロージャン (Lothian) から東岸を上がり、その進路の途上にあった全てを破壊した。その中には、ファイフのインホコルム島 (Island of Inchcolm) にあった修道院でさえ破壊した。両軍はグラスゴーで合流し、パースに向かった。

スコットランドの軍は、摂政ジョン・ダンドルフによって支えられた。彼は、エドワード軍と直接戦うことは避けた。彼は、パラムールでガイと戦い、勝利した。しかし、ガイがフィリップ6世の臣下であったので、連合国のガイを蔑ろにすることを控えたランダルフは、彼をボーダーまで護送するとき、ジェットバラ (Jedburgh) から来たイングランド軍の待ち伏せに遭い、捕らえられ、5年間イングランドで監禁された。このとき、サー・ウィリアム・ダグラスは逃れたが、彼の弟ジェイムズは殺害された。

<sup>21</sup> この城を守るために、摂政アンドリュー・マリーの妻になったクリスチャン・ブルース (Christian Bruce) (1273年生?-1356年没) は、ストラスポギーのデイヴィッドに指揮されたベイリヤル軍に対する守備隊を指揮した。これによってベイリヤルのスコットランド南部の平定は阻止された。

<sup>22</sup> 摂政マリーの部隊は、2隊に分けられた。ウィリアム・ダグラスは、敵の部隊をその前方から名目上のアサル伯デイヴィッド軍に向かい、摂政マリーは、敵を側面から攻撃したので、名目上のアサル伯ストラスポギーのデイヴィッド軍は逃げることもできず、包囲され、後ろに引き下がるのみであった。デイ

みならず、スコットランドにとっても意味のある勝利であった。この戦いでの勝利は、エドワード3世の政策からの土地の自由保有者の解放をもたらし、スコットランドの国民性を復古させた。この戦いはそれまでの戦いからの転換点になった。

その後、スコットランドの勢力が強くなると、エドワード3世は、スコットランドとフランスとの間に古い同盟が結ばれていたので、フランスが北方からイングランドを侵攻することを考えた。1336年6月、エドワード3世は、ランカスターをスコットランドに派遣し、LochindorやCuparでスコットランドの指導者を包囲された。また、Lochindorに進み、エドワード3世は、ニューカッスルを経てスコットランドに入った。フランス軍は、アバディーンに上陸し、サー・アンドリュー・マリーが病気で死亡したので、次の摂政役にはデイヴィッド2世の甥で、ステュワート家の開祖となったロバート・ステュワート（Robert Stewart）（1316年生？-1390年没）（後にロバート2世）が就いた。デイヴィッドがフランスに亡命していた間、1338年から1341年までの間、摂政であった。デイヴィッド2世の1341年の帰国には、ロバート・ステュワートなどの摂政の活躍を無視することはできない。彼は、イングランド駐留軍の駆逐に力を発揮し、西部のビュート島（Isle of Bute）からイングランド守備隊を追い払い、南部東岸ダンバーの戦い（Battle of Dunbar）ではマリ伯トマス・ランダルフ（Thomas Randolph, Earl of Moray）（1332年没）の娘ダンバー伯夫人アグネス（Agnes Dunbar, Countess of Dunbar）（1312年生-1369年没）の活躍でダンバー城の防衛<sup>23</sup>に成功した。また、1339年、フランスの援軍を得てパース（Perth）を取り戻し、1340年にフォース湾の北側からイングランド軍を一掃した。デイヴィッド2世が帰国したのは、ロバート・ステュワートが、1341年にイングランド軍を駆逐したからであった、と考えられる。

しかし、愚王デイヴィッド2世は、フランス王フィリップ6世<sup>24</sup>の要請を受けて、3万の軍を携えて、1346年にイングランドを侵攻した。その結果は明らかであったが、デイヴィッド2世は、1346年に、ネヴィルズ・クロスの戦い（Naivil's Cross）において完膚無きまで撃ち破られ、デイヴィッド2世は逮捕され、囚われの身となり、ロンドン塔に11年間軟禁された。再び、国王デイヴィッドは、スコットランドを留守にし、国政から離れた。摂政ロバートの働きによってスコットランドの王制が維持された、と考えられる。

#### 第4節 エドワード3世による直接統治の危機とその解消：ステュワート王家の成立

前節で述べたように、スコットランドと敵対関係にあり、かつ、戦争状態にあったイング

---

ヴィッドは殺された。

<sup>23</sup> 1338年のことであった。

<sup>24</sup> フィリップ6世は、クレシーでイングランドに大敗し、カレー（Calais）も押さえられたので、デイヴィッド2世に北からイングランドに侵攻するように要請した。

ランドでは、エドワード3世(Edward III) (在位1327年-1377年)がエドワード2世(Edward II) (在位1307年-1327年)にとって替わって王に即位していた。イングランド国王エドワード3世による侵略の危機にあったスコットランドでは、年少国王の海外逃亡により、国王が長期に亘り国を不在にしたにも関わらず、スコットランドはイングランドからの侵略を免れ得た。それは、スコットランド国王の賢い政策に拠るのではなかった。

王位継承問題に関心を持っていたエドワード3世は、デイヴィッド2世とエドワード3世の妹ジョアン王妃の間に嗣子がいなかったため、スコットランド内の反対を押し切り、エドワード・ベイリヤルに2,000ポンドのイングランドの年金を与え、スコットランド王国を譲渡させようとした。エドワード3世は、1356年、スコットランド王国の直接統治を宣言したが、しかし、戦禍で疲弊したスコットランドから得るものもなく、侵略する価値のない地域と見なした。彼の思いを決定づけたのは、1356年のポワティエの戦いでブラック・プリンス<sup>25</sup> (Black Prince) (1330年生-1376年没) がフランス軍に大勝利したことであった。エドワード3世は、フランス征服の夢の実現も不可能では無いと思ひ直し、フランス支配の道が開けたと判断し、1357年、ベリクで10年の休戦条約を結び、10万マルクの身代金でデイヴィッド2世を釈放した。この10万マルクの身代金は、スコットランドを財政的に困難な状態に陥らせた。

何とかこの難を凌げたのは、スコットランドのみならずヨーロッパ全土を苦しめていたペストであった。イングランドでも1348年、続いて1349年、1361年、1368年と4回のペスト<sup>26</sup> に苦しめられ、人口の激減<sup>27</sup> と労働力の減少に陥り、イングランド自身がスコットランドに攻

<sup>25</sup> エドワード3世とその王妃フィリッパの間には、8男5女の王子や王女があった。2男と6男と3女は死亡した。ブラック・プリンス(エドワード黒太子)は長男、3男はクラランス公クラランス・オブ・アントワープ(Lionel of Antwerp, 1<sup>st</sup> Duke of Clarence) (1338年生-1368年没)、4男はランカスター公ジョン・オブ・ゴント(John of Gaunt, Duke of Lancaster) (1340年生-1399年没)、5男はヨーク公エドモンド・オブ・ラングリー(Edmund of Langley, Duke of York) (1341年生-1402年没)であった。

<sup>26</sup> ペストはイエネズミを介して感染した。これは黒死病と呼ばれた。この源は、中央アジアのステップ地帯であり、海を経由して地中海を通じて、ヨーロッパ北部を結んでいる航路に沿って広がった。イングランドに最初に渡ってきたのは、ドーゼット州メリカム・リージスあるいはハンプシャー州サウスハンプトンあるいはグロスター州プリストルであった、と言われている。1348年までにはイングランドの南部を経てロンドンまでに達していた。黒死病の症状では、脇の下あるいは足の付け根にあらわれる腫れ物で、それは膨れあがって腐肉のように悪臭を放し、最後には、破裂する。3から5日で死に至る腺ペスト、あるいは、肺に達し咯血を引きおこし、腺ペストよりも早く死ぬ肺ペストのペストがあった。

<sup>27</sup> 正確なイングランドの人口についてのデータを得ることはできない。その数を探る方法は幾つかある。たとえば、国王が人頭税を課すときには、人口調査をする。このデータから1330年代の人口は500万人であったが、リチャード2世治世(14世紀末)の人口は200万人と推定されている。黒死病を経験後の人口は半減したことになる。人口減少の要因は、黒死病のみではなく、結核や汗かき病などのペスト以外の伝染病で死亡する人口の方が多かったと考えられている。

め入る余裕が無かったからである。他方、スコットランドは財政難を切り抜けるために、ノーブル貨を鑄造している。この硬貨の表面には、スコットランド王の紋章が刻印されていた。この鑄造をスコットランド議会在決めたのは、スコットランドがデイヴィッド2世の身代金を支払うことを決めたベリク休戦条約が結ばれた翌年（1357年）であった。1349年以降、スコットランドにもペストが広がり、スコットランドの経済力は低下した。またデイヴィッド2世の保釈金を払うために、スコットランド議会は国民に増税を課した。

すでに述べたように、デイヴィッド2世が彼の摂政に国政を任せしたのは、フランスのシャトール・ガイヤールに亡命した7年間とイングランドのロンドン塔に囚われの身となった11年間を合わせた計17から18年間であった。その間、スコットランドでは王制が保持された。また1333年から1357年までの24年間の間、スコットランドには2人の国王が在位していた、と見られる。実際に、1333年から1357年までの間、スコットランドが王制<sup>28</sup>を廃止することなく維持できたのは、第1に、国王の亡命中や囚われの身の間、マリ伯ジョン・ランダルフ、サー・アンドリュース・マリー、そしてロバート・ステュワートなどが摂政を努め、実質的な国政の舵取りを行ったこと、第2に、1337年にイングランドとフランスの間で百年戦争に入り、イングランドがスコットランドよりはフランスの領土により関心をもったこと、第3に、1348年、1349年、1361年、1368年の4回に亘ってイングランドでペスト<sup>29</sup>が蔓延したために、イングランドにはスコットランドに攻め入る余裕が無かったこと等によって、スコットランドには仮初めの平和がもたされた、と考えられる。

デイヴィッド2世は、無為で怠惰な政治姿勢<sup>30</sup>を採ったにもかかわらず、スコットランドで

<sup>28</sup> ロバート1世（Robert I）（在位1306年-1329年）の後、王位はデイヴィッド2世に後継されたが、一方ではイングランド王エドワード3世はエドワード・ベイリヤル（Edward Balliol）（在位1332年8月-1332年12月、1333年-1346年）をスコットランド国王として認めていた。1333年から1357年までの間には、スコットランドには2人の国王が在位していたが、しかし、その2人の国王は、その間の殆どの時間を外国（デイヴィッド2世はフランスとイングランド、エドワード・ベイリヤルはイングランド）で生活していた。二人の国王が不在の時には、マリ伯トマス・ランダルフやマー伯ドナルド・マーがデイヴィッド2世の摂政を努め、1333年以降、ロバート・ステュワート（後にロバート2世になる）が摂政を務めた。

<sup>29</sup> ペストは、イングランドの人口を激減させ、その激減は労働人口の減少と経済の破綻をもたらした。

<sup>30</sup> デイヴィッド2世は、ネイヴィルズ・クロス（Naivil's Cross）の戦いでイングランドに囚われ、11年間、捕虜になったが、1357年10月、ベリク（Berwick）でイングランド王エドワード3世は、休戦条約を結び、10万マルクを10年間で返済することを条件にデイヴィッド2世の保釈を決めた（1マルク=13シリング・4ペンス、1シリング=12ペンス、20シリング=1ポンド）。保釈後、スコットランドに戻ったデイヴィッド2世は、イングランド宮廷で覚えた華やかな生活を改めることもなく、増税で集めた身代金を流用する始末であった。彼は、1363年、スコットランドでの生活に飽きて、ロンドンに戻ってしまった。デイヴィッド2世は、スコットランド統治には全く関心も興味もなく、スコットランド王位をエドワード3世に譲渡するというエドワード3世の要求に応じたのであった。また、ロバート・ステュワートは、デイヴィッド2世を廃位し、王座に就く意志もなかったため、身代金をイングランドに払い続け、当面を凌いだ。

は王国制が保持された。またデイヴィッド2世は、フランス亡命から戻った後、百年戦争の最中にイングランドを侵攻し、フランスの援護を行おうとしたが、所詮イングランドの敵ではなかった。彼は、囚われの身になった。その身代金の支払いのためにスコットランド議会在国民に増税を課したために、スコットランドの国土の疲弊が進んだ。エドワード3世は、そのようなスコットランドを侵略する価値のない地域と見なし、また1356年のポワティエ(Poitiers)の戦いでブラック・プリンス・エドワード(Edward the Black Prince)(1330年生-1376年没)がフランス軍に大勝利すると、戦禍で疲弊したスコットランドに侵攻することを止め、フランス征服の夢の実現も不可能では無いと思い直し、デイヴィッド2世の保釈に踏み切った、と推測される。1356年以降は、エドワード3世はフランスとの戦争に力を入れていった。

幼少のマーガレット王妃がノルウェイからスコットランドに向かう船上で死亡してからステュアート王家が開かれるまでの80年間は、一時は完全な独立を成し遂げたが、イングランド王エドワード3世の治世において再び、スコットランド王国は、イングランド王の支配統治の脅威にさらされ、イングランド王エドワード3世に拠る抑圧と脅威の内、国政の舵取りをしなければならなかった。スコットランドの2人の王デイヴィッド2世とエドワード・ベイリヤルが世継ぎを持たないまま他界した後、デイヴィッド2世の摂政を務めたロバート・ステュアートが、1371年にスコットランド王ロバート2世(Robert II)<sup>31</sup>(在位1371年-1390年)として即位し、ステュアート王家<sup>32</sup>の王制が開始された。彼は、国王に即位する以前には、デイヴィッド2世(David II)(在位1329年-1332年, 1346年-1371年)の摂政であった。摂政による王国の統治がステュアート王家の伝統の一つであった。

また1377年にはエドワード3世も他界し、スコットランドの直接統治による支配の危機も終了した。スコットランドの直接統治の危機は、エドワード3世の死と共に終結した、と理解される。

<sup>31</sup> ロバート・ステュアート(後のロバート2世)は、ロバート1世(ロバート・ドゥ・ブルース)の娘マジョリー(Marjorie Bruce)(1296年生-1316年没)と8代(あるいは6代)ステュワートのウォルター(Walter Stewart, 8<sup>th</sup> or 6<sup>th</sup> High Steward of Scotland)(1293年生-1326年没)との間に生まれた。彼は、デイヴィッド2世の摂政として執務を採り、スコットランド王国の維持・継承に務めた。彼がロバート2世として国王に即位したときは、彼は、既に、55歳であった。

<sup>32</sup> この家名は、ステュワードという職名に由来する。ステュワードは、宰相役兼財務長官の役目を担い、歳入の責任者であり、戦争には国王と行動を共にし、国王の第1の側近であった。マルカム4世(Malcolm IV)(在位1153年-1165年)は、デイヴィッド1世(David I)(在位1124年-1153年)の次男ハンティングダン伯ヘンリー(Henry Stewart, Earl of Huntingdon)(1114年生-1152年没)の長男であり、11歳で国王に即位した。マルカム4世の弟がウィリアム1世(William I)(在位1165年-1214年)であった。マルカム4世の時代から、ステュアート姓が名乗られるようになった。

## 第5節 摂政政治と貴族層の台頭

デイヴィッド2世とエドワード・ベイリヤルの2人の国王がスコットランドを留守にしていた間、摂政役を務めたロバート・ステュワートがロバート2世として即位した。スコットランド王家は、デイヴィッド2世の身代金の支払いによる財政問題、王権の低下をもたらす王家と貴族間の反目、あるいは、貴族間の激しい抗争の政治問題に苦しんでいた。スコットランドでは摂政による国内統治が日常化していたので、有力貴族が国政の実権を掌握して統治執務を遂行することが一般化していた。この統治の場合には、有力貴族間の抗争が頻繁に起こり、国政はいつも危機的状態に陥る様相を呈していた。

ロバート・ステュワートが王位に就いたとき、貴族と貴族の争いでは、スコットランドのダグラス伯爵家<sup>33</sup>とイングランドのパシー一族<sup>34</sup>との間で激闘が繰り広げられたノーサンバー

<sup>33</sup> ダグラス家が歴史の表に現れたのは、ロバート1世に仕え、ロバート1世の心臓を聖地へ埋葬する途次のスペインの内戦に巻き込まれてアンダルシア（Andaluza）で戦死したサー・ジェイムズ・ダグラス（Sir James Douglas, Lord of Douglas）（1286生？-1330年没）であった。彼は、ザ・グード（The Guid 善人）およびブラック・ダグラス（Black Douglas 黒いダグラス、彼の髪の毛が黒かったことによる）と知られている。彼の異母兄弟のアーチボルド・ダグラス（Sir Archibald Douglas）（1293年生？-1333年没）は、デイヴィッド2世の摂政になり、1333年7月、第2次スコットランド独立戦争中のハリダン・ヒルの戦い（Battle of Halidon Hill）で戦死した。

サー・アーチボルド・ダグラスの息子ウィリアム（William Douglas, 1<sup>st</sup> Earl of Douglas）（1327年生-1384年没）が1358年に初代ダグラス伯爵位を叙爵された。2代ダグラスである、その息子のジェイムズ（James Douglas, 2<sup>nd</sup> Earl of Douglas）（1358年生-1388年没）は1388年8月のオタバーン（Otterburn）の戦いで戦死し、3代ダグラスは、アーチボルド・ダグラス（Archibald Douglas, 3<sup>rd</sup> Earl of Douglas）（1328年生？-1400年没）であった。彼は、サー・ジェイムズ・ダグラス（善人のブラック・ダグラス）の庶子であった。母親はエリザベス・ステュワートで、エリザベス・ステュワートは、4代あるいは6代ハイ・ステュワードのアレクザンダー・ステュワード（Alexzander Stewart 4<sup>th</sup> or 6<sup>th</sup> High Steward）（1214年生-1283年没）の娘であった。3代ダグラス伯は、不屈の人（The Grim）と渾名され、ブラック・ダグラスと知られる。

4代ダグラスは、3代ダグラスの息子であり、4代アーチボルド・ダグラス（Archibald Douglas, 4<sup>th</sup> Earl of Douglas）（1372年生-1424年没）になった。彼は、ダグラス伯の他に、ウィグタウン伯、アナンディル卿、ギャラウエイ卿の爵位を与えられていた。さらに、マーガレット・ステュワートと結婚したことにより、国王（ロバート2世）から、国立公園のエトリック・フォーリスト（Ettrick Forest）、ローダーディル（Laudedale）やピーブルズシャー（Peeblesshire）が与えられた。4代ダグラス伯は、1402年にノーサンバーランド領でパシー一族に捕らえられ、1403年にはパシー一族と組んでシュルーズバリー（Shrewsbury）でイングランド王ヘンリー4（Henry IV）（在位1399年-1413年）軍と戦い、再び捕らわれた。このことから、4代ダグラス伯には「負け馬」と言う渾名が付けられた。その後、身代金を支払って釈放されると、彼は、フランスに渡り、勝利王シャルル7世（Charels VII）（在位1422年-1461年）の摂政になって活躍したが、ヘンリー5世のベドフォード公軍に敗れ、殺害された。

<sup>34</sup> ノーサンバーランド伯ヘンリー・パシー（Henry Percy, 1<sup>st</sup> Earl of Northumberland）（1342年生-1408年没）は、ヘンリー・ボリングブロク（Henry Bolingbroke 後のヘンリー4世）の挙兵に協力した。その息子で同名のヘンリー・パシー（Henry Percy, Duke of Northumberland）（1403年没）が、4代マーチ伯ロジャー・モーティマー（Roger de Mortimer, 4<sup>th</sup> Earl of March）（1374年生-1399年没）の姉エリザベスと結婚した。このヘンリー・パシーは、その王位継承者エドマンドの伯母（4代マーチ伯ロ

ランドのオタバーン (Otterburn) の戦い (1388年8月) が有名である。この戦いでダグラス軍が大勝した。ダグラス家は、代々巧妙な政略結婚<sup>35</sup> で所領を増加させ、4代ダグラス伯アーチボルド自身もロバート3世の長女マーガレット (Margaret Stewart) (1451年没) を妻に迎え入れ、そのため、ダグラス一族は低地地方 (ローランド) における最大かつ最強の貴族に成長していた。また、スコットランドのマクドナルド家 (The House of MacDonald) は、王家を無視し、その一方では、王家と姻戚関係<sup>36</sup> を結び、王権に深く関わってきた。

ロバート2世の後継者<sup>37</sup> は長男のジョン・ステュワートで、彼は後にロバート3世 (Robert

ジャーの姉エリザベス) を妻にしていた。

エドワード3世の3男で初代クラランス公ライオネル・オブ・アントワープ (Lionel of Antwerp, 1<sup>st</sup> Duke of Clarence) (1338年生-1368年没) と初代ランカスター公ヘンリー・オブ・グロスモント (Henry of Grosmont, 1<sup>st</sup> Duke of Lancaster) (1310年生-1361年没) の姉モードの娘エリザベスが結婚した。初代クラランス公とエリザベスの間に生まれた娘のフィリッパ (Philippa Plantagenet) (1355年生-1382年没) は、13歳の時、17歳であった3代マーチ伯エドモンド・モーティマー (Edmund de Mortimer, 3<sup>rd</sup> Duke of March) (1351年生?-1381年没) と結婚した。この2人の間の長男4代マーチ伯ロジャー・モーティマー (Roger de Mortimer, 4<sup>th</sup> Duke of March) (1374年生-1398年没) が王位継承者になったが、1398年、アイルランドで戦死した。その子の5代マーチ伯エドモンド・モーティマー (Edmund de Mortimer, 5<sup>th</sup> Duke of March) (1391年生-1425年没) は、6歳であったが、父の爵位と財産を継ぎ、王位継承者になった。1399年、イングランド王リチャード2世 (Richard II) (在位1377年-1399年) が廃位され、ヘンリー4世が王位を奪うと、5代マーチ伯は拘束された。

そのヘンリー・パーシーが、1402年9月、ベリクの南のハンプルドン・ヒル (Humbledon Hill) でスコットランド軍と戦い、4代ダグラス伯アーチボルド・ダグラスを捕虜にしたが、ウェールズのナショナルリズム (ウェールズの英雄 オウエン・グレンダワーの反抗) に対することを優先問題と考えていたヘンリー4世 (Henry IV) (在位1399年-1413年) は、その捕虜の身柄引き渡しを要求した。このことに不満を持った息子のヘンリー・パーシーは、蜂起し、シュルーズバリー (Shrewsbury) の戦いでヘンリー4世軍に敗れ、戦死した。また父のノーサンバーランド伯ヘンリー・パーシーも、1408年、ヨーク南西のブラマム・ムーア (Bramham Moor) の戦いで戦死した。

<sup>35</sup> ロバート2世は、サー・アダム・ミュア (Sir Adam Mure of Rowallan) (1290年生?-1330年没?) の娘であったエリザベス (Elizabeth) (1355年没?) を王妃した。彼女との間に生まれた5女イザベラ (Isabella Stewart) (1348年生?) は、2代ダグラス伯ジェームズと結婚した。ロバート3世の長女マーガレット (Margaret Stewart) (1451年没) は、4代ダグラス伯アーチボルド・ダグラスと結婚した。4代ダグラスは、ノーサンバーランド伯ヘンリー・パーシーと共にヘンリー4世 (Henry IV) (在位1399年-1413年) に対し蜂起し、シュルーズバリー (Shrewsbury) で戦って、捕虜になった。

<sup>36</sup> ロバート2世と王妃エリザベスとの間の長女マーガレット (Margaret Stewart) は、イール卿ジョン・マクドナルド (John MacDonald, Lord of the Isles) (1336年生-1386年没) と結婚していた。このことによってマクドナルド一族 (Clan Macdonald) は、スコットランド貴族内での地位を高め、その権限を強めた。ジョンの父アングス・オグ (Aonghas óg) (1316年頃生) は、ロバート・ドゥ・ブルース (後のロバート1世 在位1306年-1329年) を支持し、ロバート・ブルースが追われて国内を放浪した時にも、またバノックバーン (Bannockburn) の戦いにおいても、ロバート・ブルースと共にあった。ロバート1世は、アングス・オグにアイレー (Islay) 島、マル (Mull) 島、スカイ (Skye) 島、ルイス (Lewis) 島やマクドゥーガル一族 (Clan MacDougall) が占有していた土地を与え、クランコーア (Glencoe) と共にロッホアバール (Lochabar) に対して領主権を与えた。

<sup>37</sup> ロバート2世は、王位に就く前に結婚し、王位に就いてからも一度結婚していた。彼は、2度、結婚し

III) (在位 1390 年-1406 年)としてスコットランド国王に即位したが、国王としての政務の実権は、王妃エリザベスとの間に生まれた 3 男ロバート (Robert Stewart) (1340 年生?-1420 年没) にあった。その 3 男ロバートは、国王代理役や補佐役を務めていた。その彼の不満を抑えるために、ロバート 3 世は、彼を 1398 年にスコットランドで 2 番目の公爵位<sup>38</sup>であるオルバニー公 (Duke of Albany) に叙爵した。ロバート 3 世<sup>39</sup>の治世下で貴族間の抗争が激化

ていた。最初の妻は、エリザベス・ミュア (Elizabeth Mure) (1355 年没) であり、2 度目の妻 (王妃) は、ユーフィア・ドゥ・ロス (Ephemia de Ross) (1386 年没) であった。彼と 2 人の妻の間には、14 人の子女があり、その内で息子は 6 人であった。最初の王妃エリザベスとの間には 4 男 6 女、再婚したロス伯ヒュー (Hugh, Earl of Ross) (生没不詳) の娘で、3 代マリ伯ジョン・ランダルフ (John Randolph, 3<sup>rd</sup> Earl of Moray) (1333 年没) の末亡人であったユーフィアとの間には 2 男 2 女があった。その他、3 人の愛妾との間には、7 人の子女があった。

ロバート 2 世とエリザベスの間に生まれた子女について簡単に紹介しよう。その長子は、ジョン・ステュワート (John Stewart, Earl of Carrick) (1337 年生-1406 年没) で、後にロバート 3 世 (在位 1390 年-1406 年) になった。次男は、ウォルター・ステュワート (Walter Stewart) (1338 年生-1362 年没) であり、イザベラ・ドンハッド (Isabella Donnchadh, Countess of Fife) (1320 年生?-1389 年没) と結婚し、ファイフ伯を与えられた。3 男は、ロバート・ステュワート (Robert Stewart) (1340 年生-1420 年没) で、メンテース伯 (Earl of Menteith)、ファイフ伯 (Earl of Fife)、バハン伯 (Earl of Buchan)、アサル伯 (Earl of Atholl) を授けられた。1389 年には、オルバニー公爵位が与えられた。4 男は、アレグザンダー・ステュワート (Alexander Stewart, Lord of Buchan and Ross) (1343 年生?-1405 年没) で、バドノッホの狼 (The Wolf of Badenoch) と渾名される程に乱暴であった。長女は、マーガレット (Magaret Stewart) であり、イーリー卿 (Lord of Isles) と結婚していた。次女は、マジョリー (Marjory Stewart) で、ジョン・ダンバー (John Dunbar, Earl of Moray) (1390 年没) やアレグザンダー・ケイスと結婚した。3 女はジョアンナ (Johanna Stewart)、4 女は、イザベラ (Isabella Stewart) で、2 代ダグラス伯ジェイムズ・ダグラス (James Douglas, 2<sup>nd</sup> Earl of Douglas) と結婚し、デイヴィッド・エドモンドストーンと結婚した。5 女は、キャサリン (Katherine Stewart) で、High Admiral であったロバート・ロガンと結婚した。6 女は、エリザベス (Elizabeth Stewart) で、最高司令官のトマス・ヘイ (Thomas Hay) と結婚した。

ロバート 2 世とユーフィアとの間に生まれた子女を紹介しよう。長男は、デイヴィッド・ステュワート (David Stewart, 1<sup>st</sup> Earl of Caithness, Earl of Strathearn)、次男は、ウォルター・ステュワート (Walter Stewart, 1<sup>st</sup> Earl of Atholl)、次女は、エリザベス・ステュワート (Elizabeth Stewart) で、デイヴィッド・リンゼイ (David Lindsay, 1<sup>st</sup> Earl of Crawford) と結婚した。3 女は、エジディア (Egidia Stewart) で、ウィリアム・ダグラス (William Douglas) と結婚した。

<sup>38</sup> スコットランドの最初の公爵位は、1398 年、ロバート 3 世の長男デイヴィッド (David Stewart) (1378 年生-1402 年没) に与えられたロスシーニー公 (Duke of Rothesay) であった。長男デイヴィッドは、スコットランド王国統監に任命されたが、この処遇はデイヴィッドの力量を無視した拙劣な人事であった。デイヴィッドは、道徳感を欠き、不品行に走り、政務を蔑ろにし、統治能力の欠落した人物であった。デイヴィッドが同棲していた女性に虐待行為を行ったために、国王ロバートもやむなく彼の監禁を命じた。デイヴィッドは、叔父のオルバニー公に預けられたが、1401 年、パースの南東のフォークランド (Falkland) の館に監禁されたが、翌年の 3 月に死亡した。

<sup>39</sup> ロバート 3 世は、ロバート 2 世とエリザベス・ミュアとの間の長男ジョンであった。クリスチャン名をジョンからロバートに代えたことやロバート 3 世が 10 歳まで非嫡出子であったこと、さらに障害者 (馬に蹴られて重傷を負っていた) でもあった。

し、王権はさらに低下（王の威令はあって無きが如しの状態）し、庶民の間では泥棒、追いはぎ、殺人などの悪事が日常化していた。

貴族間の争いのみならず、国王の係累自身が社会的な厄介者と狼藉をはたらき、国王の威令・権威は失墜した。それは、国王自身の気質にも依存していた面があった。ロバート3世は、クリスチヤン名をジョン<sup>40</sup>からロバートに変えるほどに自信が無く気弱な国王であり、統治能力の面からは無能な国王でもあった。彼は、国王としての威令を欠き、国内には無法がまかり通り、バドノッホ卿でありバハン伯であった王弟アレグザンダー(Alexander Stewart, Lord of Badenoch, Earl of Buchan) (1342年生?-1406年没)の愚行、無法な行動<sup>41</sup>を阻止することができなかった。その王弟アレグザンダーは、「バドノッホの狼(The Wolf of Badenoch)」と渾名された。ロバート3世にはそれを諫め押さえる力が無かった。

ロバート3世が他界し、その3男<sup>42</sup>ジェイムズがジェイムズ1世(James I) (在位1406年-1437年)として王位を継承した。このとき、ジェイムズ1世はイングランドのロンドン塔に囚われの身であった。

## 第2章 王権の伸張：ジェイムズ1世からジェイムズ5世

### 第1節 摂政から王権の奪還のための闘い

またしてもスコットランドは国王不在<sup>43</sup>と摂政統治の時代になった。初代オルバニー公ロバート・ステュワート (Robert Stewart, 1<sup>st</sup> Duke of Albany) (1340年生?-1420年没)は、ロバート3世の弟、ジェイムズ1世の叔父であった。スコットランド議会は彼をジェイムズ1

<sup>40</sup> ジョンという名前から、イングランドの失地王ジョン、ジョン・ベイリヤル王 (彼は1296年に王位を追われ、ロンドン塔に幽閉された)、フランスの善良王ジャン(彼は1356年のポワティエの戦いでイングランド軍に破れ、捕虜となり、ロンドン塔に閉じこめられた)などが連想されたので、改名したのでないかと考えられる。

<sup>41</sup> 王弟アレグザンダーの愚行・非行としては、1390年に北部エルギンの寺院を焼き払ったこと、ハイランドでは家畜さらい、ローランドでは街中で乱暴行為、その他に武装強盗と数々の悪行が知られている。

<sup>42</sup> ロバート3世は、サー・ジョン・ドゥラモンドの娘アナベラ (Annabella Drummond) (1350年生-1401年没)との間に3男4女をもうけた。次男は早世し、長男デイヴィッドは、1398年にスコットランドで最初の爵位ロスシー公となったが、本稿の脚注38で述べたように、彼は、数々の不品行を行い、政務を蔑ろにし、統治力のない人物であった。彼は、その同棲者を虐待したことから、監禁された。その監禁先のオルバニー公ロバートの所領であったフォークランドの館で死亡した(1402年)。よって3男のジェイムズが王位を継ぐことになった。

<sup>43</sup> スコットランドでは、幼王マーガレットがノルウェイ王国にいながらにして王位にあった1286年から1290年、1296年にジョン・ベイリヤルが廃位され、1306年にロバート1世が即位するまでの10年間、デイヴィッド2世が1334年から1341年にかけてフランスで逃亡生活を送った7年間、ならびに1346年から1356年にかけてイングランドに抑留されていた11年間、そしてジェイムズ1世がイングランドで抑留された18年間のいずれのときも国王不在であったにもかかわらず、王制が継続された。

世の摂政役に指名した。ジェイムズ1世がイングランドに抑留されていた18年間<sup>44</sup>、オルバニー公とその子マードック（Murdock Stewart, 2<sup>nd</sup> Duke of Albany）（1362年生？-1425年没）がその摂政として、その王国の政務を執り行い、スコットランドの王制の安泰と保持に務めた。

オルバニー公ロバートは、有力貴族の勢力を押さえるその一方で、国政ならびに外交問題を解決する必要があった。オルバニー公は、国王ジェイムズ1世の保釈をイングランドに要求するかどうかという外交判断に直面していた。実際には、彼は、ジェイムズ1世の保釈をイングランドには要求しなかった。その理由として、第1に、デイヴィッド2世の身代金の支払いのために既に国民に増税していたことがあった、と思われる。彼は、再びジェイムズ1世の保釈を要求すると、それに対して身代金の請求がイングランドから提示されることを恐れていたのかも知れない。彼は、それ以上の増税を国民に課することが不合理であると判断していたからかも知れない。いずれの判断かは定かではないが、彼は、ジェイムズ1世の保釈をイングランドに求めずに、18年の歳月の間、スコットランドの最高意志決定者の代理を務めた。その第2に、彼は、実質的な王位にあったことに満足していたからかも知れない。彼は、権勢欲の強い人物で王位に魅力を感じながらも、結局、王位の篡奪行動に出なかった。そのことは賢明な判断であったと思われる。王位篡奪行動をとることは、貴族の力が強かった当時においては、すべての貴族を敵に回す愚行であったからである<sup>45</sup>。たとえば、初代オルバニー公は、毎年1回の議会を開催し、布告の文書に国王のシールを使用するという通常の慣習に従わずに、彼自身のシールを使用し、そのシールにスコットランド統治者オルバニー公ロバートと銘を刻んでいた、と言われている。その布告文書の冒頭には、王の臣民ではなく、「わが臣民たちへ」とあった<sup>46</sup>、と言われている。彼自身が王位にあるかのような気持ち

<sup>44</sup> ジェイムズ1世は、1406年から1424年までの18年間、12歳から30歳までの間、イングランドで人質として送った。健康が勝れなかったロバート3世は、彼とオールバニー公ロバートとの間に置かれた3男ジェイムズを保護するために、11歳のジェイムズにフランス宮廷での教育を受けさせることを決めた。1406年、商船Maryenknychtに乗船してフランスに向かう途中であったが、イングランド東ヨークシャのフラムバラ岬（Flamborough Head）でイングランド水兵に捕らえられた（一説では、ジェイムズが病を患ったために、イングランドに上陸した）。彼は、ヘンリー4世に引き渡され、ジェイムズは囚われの身となった。

ジェイムズは、ヘンリー4世にとっては、最高の人質であった。というのは、彼は、リチャード2世（Richard II）（在位1377-1399年）から王位を剥奪したばかりの頃であったので、スコットランド王位継承者を人質にすることによって、スコットランドだけではなく、その同盟国フランスをも牽制できる機会を得ることになったからであった。これによってスコットランドあるいはフランスからの侵攻を抑制できた。ヘンリー4世は、国内の治安安定に専念する機会を得たのであった。

<sup>45</sup> オルバニー公ロバートは自由都市の回復を図った。

<sup>46</sup> オルバニー公ロバートは、画期的な業績を上げることはできなかったが、1412年に、ジェイムズ1世の教育担当の聖アンドリュース司教のヘンリー・ウォードロー（Henry Wardlaw, Bishop of Saint An-

になれたので、王位篡奪行動に出る必要がなかったのかも知れない。

初代オルバニー公ロバートが、有力貴族との軋轢を避け、実質的には王位に等しい気持ちになる道を選択したことは賢明であった、と判断される。貴族の力の強い時代にあったスコットランドにおいて、財力のなかった初代オルバニー公ロバートは、可能な限り貴族の要求を受け入れ妥協し、最有力な貴族であったダグラス伯爵家<sup>47</sup>と協定を結び、お金で貴族たちとの間の平和を維持し、貴族の協力を引き出し、その政務を実行した。それ故、彼は、有力貴族が王家の所領から上がる収入を横領するのを見て見ぬふりをすることによって、摂政としての地位を守った、と推測される。

イングランド王国に人質として抑留されていたジェイムズ1世<sup>48</sup>は、1423年にスコットランド軍をフランスから引き上げる<sup>49</sup>ことを条件に自由にされ、またその他の条件として身代金

draws) (1440年没)の提案を受けて、スコットランド最初の大学であるセント・アンドリューズ大学の創設もオルバニー公ロバートの功績であった。

<sup>47</sup> ダグラス伯の所領は、ギャラウエイ (Galloway), ダグラスデイル (Douglasdale), アナンデイル (Annan-dale), クライズデイル (Clydesdale), ロージアン (Lothian), スターリング (Stirling), マリシャ (Morayshire) に及んでいた。

<sup>48</sup> ジェイムズ1世は、ロバート3世が王位に就く前の1367年頃、王妃アナベラ・ドゥナモンド (Annabella Drummond) (1350年生?-1401年没)との間の3男として、ダンファームリン (Dunfermline) で生まれ、12歳から18年間、イングランドで抑留生活を送った。イングランドでは、最高級の人質として、音楽、詩作、スポーツなどあらゆる教養教育を受けた。初めロンドン塔内での王宮生活、後に中部ノッティンガム、グロスター北東のイーヴィンシャム、ヘンリー5世 (Henry V) (在位1413年-1422年)の時にはウィンザー城に移り、ヘンリー5世に最高の軍事教育を受けた。イングランドの統治者(ヘンリー4世とヘンリー5世)からの統治に関する知識が、帰国後のジェイムズ1世の統治の原動力となった。

1424年2月2日にテムズ川南岸サザックで結婚式を挙げた。結婚相手は、サマーセット伯ジョン・ボーフォート (John Beaufort, Earl of Somerset) (1373年生?-1410年没)とマーガレット・ホーランド (Margaret Holland) (1385年生-1439年没)の娘ジョアン (Joan Beafort) (1445年没)であった。ジョアンはヘンリー5世と従妹であった。サマーセット伯ジョン・ボーフォートは、エドワード3世の4男ランカスター公ジョン・オブ・ゴント (John of Gaunt, Duke of Lancaster) (1340年生-1399年没)と3番目の夫人キャサリン・スウィンフォード (Catherine Swynford) (1350年生?-1403年没)との間の長子として生まれた。ランカスター公ジョン・オブ・ゴントとその最初の夫人ブランシュとの間に生まれたのがヘンリー4世であった。ジョアン・ボーフォートとヘンリー4世は、異母姉弟であったので、ジョアン・ボーフォートとヘンリー5世とは、従妹の関係にあった。

<sup>49</sup> ジェイムズ1世がイングランドで人質の身にあった期間、イングランドとフランスでは、百年戦争の後半から終末の時期で、すなわち第2次百年戦争に差し掛かっていた。ヘンリー5世は、フランスの内紛であるアルマニック派 (オルレアン公ルイ (Lois de Valois, Duc d'Orlean) (在位1392-1407年)がブルゴーニュ公ジャン無畏公 (Jean I, Duc de Bourgogne) (在位1404年-1419年)によって暗殺され、その義父アルマニャック伯によって率いられたブルボン公 (Duc de Bourbon), ベリー公 (Duc de Berry), オルレアン公 (Duc de Orlean) のグループ) とブルゴーニュ派との対立抗争を見て、失地回復を計画した。アルマニャック派は、1412年5月にブルージュ条約でイングランドにアキテーヌ継承を認め譲歩した。ヘンリー5世は、1414年に大使を派遣し、フランスの狂気王シャルル6世 (Charles VI 在位1380年-1422年)の末娘キャサリン・ドゥ・ヴァロア (Catherine de Valois) (1402年生-1437年没)との結婚を申し入れ、フランス王位継承権の譲渡、アンジュ (Anjou), ブルターニュ (Brutagne), フランドル (Flandre),

4万ポンドの支払いも加えられた。彼は、保釈後、1424年5月21日、スクーンで戴冠式を行った。王冠を王の頭に載せる権利を持つファイフ伯で2代オルバニー公マードック・ステュワート (Murdock Stewart, 2<sup>nd</sup> Duke of Albany, Earl of Fife) (1362年生? -1425年没) は、ジェイムズ1世の頭に王冠を載せ、摂政を退いた。

ジェイムズ1世は、戴冠後、直ちに、国王の権威・権力の強化を図り、土地所有権の乱れを正すことを狙った。ジェイムズ1世は、議会を招集し、「国民はすべて法の下に安全である」と宣言し、条例の第1号を上程した。彼は、全王国に強固な平和を徹底し、戦いを仕掛けるものには法に照らして処断すること、国王に反逆するものは、その生命、土地、財産を失う

---

メーン (Maine)、ノルマンディー (Normandie)、トゥレーヌ (Touraine) の主権の回復、ジャン2世の保釈金の未払い分であった200万クラウンをキャサリンの持参金とすることを要求した。フランスが王位継承権の譲渡についてはきっぱりと拒否し、交渉が決裂すると、ヘンリー5世は、セーヌ川河口のアルフルール (Harfleur) の要衝を占領し、そこを基地にして、フランス各地に攻撃を開始した。1415年10月のカレー南のアザンクール (Agincourt) の戦いでフランス軍に壊滅的な打撃を与え、ヘンリー5世は、アルマニック派やフランス王領を次々と攻略し、大勝した。1415年にヘンリー5世はイングランドに帰国した。彼は英雄としてロンドン市民に迎え入れられた。

1417年、ヘンリー5世は、第2回フランス遠征を始め、カーン (Caen) やバイユー (Bayeux) のノルマンディーの都市を占領し、1418年にはヘンリー2世 (Henry II 在位1154年-1189年) の所領の殆どを押さえ、1419年にはルーアン (Rouen) を占領した。さらに、ポントワーズを占領し、ヴェクサン地方のポントワーズ (Pontoise) とシャトー・ガイヤール (Château Gaillard) の城壁の支配権を手にした。パリはイングランド軍とブルゴーニュ軍によって完全に包囲された。ヘンリー5世は失地回復を果たした。1420年にトロワでイングランドとフランスの講和が締結され、ヘンリー5世をシャルル6世の王位継承者とする事に合意され、北部フランスとギェンヌをイングランド王の主権領と認め、キャサリンの持参金を80万クラウンとした。ヘンリー5世は、フランス王の娘キャサリンと結婚し、フランスの統治を開始した。しかし、ヘンリー5世は、次弟クラーランス公トマス (Thomas of Lancaster, Duke of Clarence) (1387年生-1421年没) が1421年にボージュ (Baugé) の戦いで戦死すると、急遽、フランスに渡り、パリ西方のドゥラールを押さえたが、長期化したモー包囲網戦で、1422年5月に、赤痢に感染し死亡した。この後、王位に就いたヘンリー6世 (Henry VI) (1422年-1461年, 1470年-1471年) は生後9か月であった。ヘンリー6世のフランス統治 (「二重王国君主政」) はブルゴーニュ派の支援に頼っていた。イングランドではこの幼い王に摂政をおく慣習がなかったため、イングランド宮廷内に政争 (主戦派のヘンリー5世の弟グロスター公ハンフリー (Humphrey, Duke of Gloucester) (1390年生-1447年没) と和平派のウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォード (Henry Beaufort, Bishop of Winchester) (1367年生-1447年没) の対立) が起こり、フランスの狂気王シャルル6世もその2か月後に死亡し、勝利王シャルル7世 (Charles VII) (在位1422年-1461年) が王位に就き、ブルジュ (Bourges) を拠点にフランスを統治し、1429年にランスで戴冠した。1431年にはヘンリー6世がパリで戴冠し、フランスではその両人が戴冠し、「二重戴冠」となった。この「二重戴冠」の背後にはイングランドがフランス支配を維持したいという強い意志があったと思われる。しかし、シャルル7世が死を迎えるときまでには、イングランドはフランスから完全に排除されていた。フランスの国民的戦いはジャンヌ・ダルク (Jeanne d'Arc 1412年生-1431年没) の経歴に凝縮されているが、イングランドはフランスに押され気味であったことは明らかであった。イングランドとしては、フランスから同盟国スコットランドを切り離し、フランスに対する劣勢を挽回することが残された手段であった。その線に沿って、スコットランド王ジェイムズ1世が1424年に解放されたと思われる。

こと、反逆者の追討に協力しないものは同じく反逆者となること、さらに徒党を組んでの全国の移動は禁止し、役人は法の執行において不十分であれば、解職することなどを宣言した。

これによって条例・宣言によって、摂政時代に王家の土地から上がる収入を有力貴族が横取りしていたことを王権の壟断と見ていたジェイムズ1世は、オルバニー公を処断することも計画していた。最初に、1425年5月に従兄弟の2代オルバニー公マードック親子<sup>50</sup>を逮捕し、貴族陪審裁判にかけ、彼の計画した通りに、スターリングでその親子3人の首を刎ねた。次に、1430年に、5代ダグラス伯アーチボルド (Archibald Douglas, 5<sup>th</sup> Earl of Douglas) (1391年生-1439年没)を逮捕した。このようにジェイムズ1世は、貴族の処刑や逮捕によって、公領、伯領を激減させ、自身の所領を増やした<sup>51</sup>。一方、ハイランド対策についても同様に貴族あるいは豪族の領地没収に務めた<sup>52</sup>。このような貴族の領地の没収やハイランド氏族に対する裏切り行為と彼の公私混同が、貴族達のジェイムズ1世に対する不満を募らせた。

またジェイムズ1世は、国防に備えて、国王直轄の艦隊を造り、フランドルと貿易協定を結び、フランドルから大砲を輸入した。そのために王国の民には、重税が課され、ジェイムズ1世の施策に国民は不信感を抱くようになった<sup>53</sup>。国防や貿易の財源をもとめた広範な課税の中には、王国民の納得できない個人的な支出のための課税も含まれていた。その代表例は、1436年長女マーガレット<sup>54</sup> (Margaret Stewart) (1424年生-1445年没)とフランス皇太子ル

<sup>50</sup> ジェイムズ1世は、オルバニー公マードックと、その次男ウォルター、3男のアレグザンダーを逮捕し、貴族陪審裁判にかけた。この時の裁判長は、ロバート2世の2度目の王妃ユーフィミアとの間に生まれた次男アサル伯ウォルター (Walter Stewart, Earl of Atholl) (1437年没)であった。彼は、ジェイムズ1世の叔父で、パースの修道院のジェームズ王の寝室を襲い暗殺する3人の中の一人であった。

<sup>51</sup> 戴冠した1424年には、1公領、15伯領であったが、1425年には公領がなくなり、7伯領に激減した。オルバニー公領は没収され王領とされた。マーチ (March), ファイフ (Fife), ロス (Ross), レノックス (Lenox), バハン (Buchan) の各伯領も没収され、王領にされた。それに対し、王族であるジェイムズ1世の叔父であるアサル伯ウォルター・ステュワートにはストラサーン伯領が増加された。

<sup>52</sup> その没収方法は、強引で騙し討ちによるものであった。1427年、ハイランドの氏族の族長と話し合いを持ちたいと、インヴァネスで合議を召集して、その呼びかけに応じた族長を捕らえ、牢獄に入れ、あるものは処刑した。

<sup>53</sup> 実際、国民の生活に直接関係しないものを調達するために課税された。たとえば、スコットランド教会では初めてであるが、彼の音楽好きという個人的趣味で高価なオルガンの輸入を強行した。

<sup>54</sup> ジェイムズ1世と王妃ジョアン (Joan Beaufort) (1445年没)の間には、2男6女が生まれた。長男アレグザンダーは夭折し、次男ジェイムズが王位を継ぎ、次女イザベラ (Isabella Stewart) (1426年生-1494年没)はブルターニュ公フランソワ1世 (François I, Duke of Bretagne) (1414年生-1455年没)の2度目の夫人、3女ジョアン (Joan Stewart) (1429年生-1488年没)は初代モートン伯ジェイムズ・ダグラス (James Douglas, 1<sup>st</sup> Earl of Morton) (1493年没)、4女エリナー (Eleanor Stewart) (1433年生-1480年没)はオーストリア公ジギスムント (Sigismund) (1472年生-1496年没)、5女メアリー (Mary Stewart) (1465年没)はグラウンブレイ伯ヴォルハルト・ファン・ボルゼレン (Wolfart VI, van Borssele, Count of Grandpre) (1487年没)、6女アナベラ (Annabella Stewart) (1433年生-1471年没)はジュネーブ伯ルイ (Lois of Savoy, Count of Geneva) (1437年生-1482年没)とそれぞれ結婚している。ス

イ (後のルイ 11 世 (Louis XI) (在位 1461 年-1483 年)) の結婚費用のための増税であった。ジェームズ 1 世自身の身代金も増税によって支払った。この公私混同がジェームズ 1 世の死を早めた。国民の不満に乗じて不平貴族が動き出した。この国民の不満を背景にして、国王の叔父アサル伯ウォルター・ステュワート (Walter Stewart, Earl of Atholl) (1437 年没?), 又従兄弟のロバート・ステュワート (Robert Stewart) (1437 年没), さらにロバート・グレアム (Robert Graham) (1437 年没?) の 3 人などによってジェームズ 1 世の暗殺計画が立てられ, 1437 年 2 月 22 日の夜にその計画が実行された。アサル伯など 3 人は, パースの修道院のジェームズ王の寝室を襲い, 国王を暗殺した。その 3 人は, スターリングで処刑された。

ジェームズ 1 世の治世時に発行された硬貨に, セント・アンドリュース十字の「青地に銀の斜めの十字」が刻印されている。これは, イングランドの「白地に赤の十字」の守護神セント・ジョージ十字と同様に, スコットランドの王国の守護神である。そのセント・アンドリュース十字がいつから使用されたのかは不明であるが, 資料的には, ジェームズ 1 世の治世時に発行されたディマイ貨 (9 シリング) が最初であった, と考えられている。

## 第 2 節 王権侵害者に対する国王の闘争

ジェームズ 1 世の王位を継いだジェームズ 2 世 (James II) (在位 1437 年-1460 年)<sup>55</sup> は, 6 歳であった。スコットランドの国政は, 再び, 摂政政治に託された。グラスゴー司教<sup>56</sup> (Bishop of Glasgow) のジョン・キャマラン<sup>57</sup> (John Cameron) (1446 年没?) が大法官 (Lord Chancellor) に就き, 摂政会議の議長として 5 代ダグラス伯アーチボルド (Archibald Douglas, 5<sup>th</sup> Earl of Douglas) (1391 年生?-1439 年没) が指名された。5 代ダグラス伯アーチボルドの母がロバート 3 世の長女マーガレット (Margaret Stewart) であったので, 5 代ダグラス

---

スコットランド王の子女が大陸の王家や諸侯家と縁組みをしたのは初めてであった。

<sup>55</sup> ジェームズ 2 世が戴冠したのは, スクーンではなく, エディンバラのホリールード (Holyrood) であった。スコットランド国王がスクーンで戴冠するという伝統は, ジェームズ 1 世で途絶えた。それ以後の国王は, ホリールード (現在は, ホリードールハウス宮殿になっている) で戴冠するようになった。イングランド王チャールズ 2 世 (Charles II) (在位 1660 年-1685 年) は, 1651 年にスコットランド王としてスクーンで戴冠した。またジェームズ 2 世は, 1437 年にスコットランド議회를スクーンからエディンバラに移した。

ジェームズ 2 世の妃はブルゴーニュ公の姪でゲルダール伯 (Duc de Gueldres) の娘マリー (Marie de Gueldres) (1463 年没) であった。2 人は, 1449 年ホリールード・アペーで結婚式を挙げた。

<sup>56</sup> ジョン・キャマランは, ジェームズ 1 世によって 1425 年にグラスゴウ司教に選出され, 1426 年にローマ教皇 (マーティン 5 世) によって任命された。

<sup>57</sup> 彼は, 法学士であり, リンクルデン (Lincluden) 大聖堂の司教長であった。ウィグタウン伯アーチボルド・ダグラス (Archibald Douglas, Earl of Wigtown) (5 代ダグラス伯アーチボルド・ダグラス) の秘書を務め, カンバスラグ (Cambuslag) 教区の牧師であった。彼は, 1424 年, ジェームズ 1 世の秘書になり, 国璽尚書係になり, 1425 年, グラスゴウの司教になった。

伯は、ジェームズ2世と従兄弟であった。5代ダグラス伯は、1437年から1439年まで摂政に就いたが、間もなく、病死した。大法官には、エディンバラの州長官であり、エディンバラ城の管理人であったサー・ウィリアム・クライトン (Sir William Crichton, 1<sup>st</sup> Lord Crichton of Sanquhar) (1454年没?) が就いた。

その後、直ぐに、ジェームズ2世の母親のジョアン・ボーフォート<sup>58</sup> (Joan Beaufort) (1404年生-1445年没) は、サー・ウィリアム・クライトンから王権 (王位) を守るために、エディンバラ城からスターリング城に移動した。ウィリアム・クライトンとアレグザンダー・リヴィングストンが手を握ると、彼女は、ブラック・ダグラスの同盟者であったジェームズ・ステュワート<sup>59</sup> (Sir James Stewart, The Black Knight of Lorn) (1383年生-1451年没?) と結婚し、王宮で権力を伸ばしてきていたスターリング城代のサー・アレグザンダー・リヴィングストン (Sir Alexander Livingstone) (1451年没?) に対抗した。

クライトンとリヴィングストンの2人は、エディンバラ城の管理人あるいはスターリング城の城代として、ジェームズ2世の後見人の役に就いていた。この2人にとって、病弱で権力を実際には振ることのなかった摂政の5代ダグラス伯アーチボルド・ダグラス<sup>60</sup> (Archibald

<sup>58</sup> 彼女は、スコットランド国王ジェームズ1世の未亡人であり、国王ジェームズ2世の摂政役であった。彼女は、脚注48で示したように、初代サマーセット伯とマーガレット・ホーランドの娘であり、ヘンリー4世の姪であり、ヘンリー5世の従妹であった。スコットランドでは、イングランド女性が摂政となる習慣はなかったので、病弱なダグラス伯が摂政に任命された。5代ダグラス伯の死後、直ぐに、ジョアン・ボーフォートは、サー・ジェームズ・ステュワートと結婚した。またクライトン卿の支配を避けるために、ジェームズ2世をエディンバラ城からスターリング城に移し、アレグザンダー・リヴィングストンの保護を受けようとした。その後、クライトンとリヴィングストンが連携すると、彼女は、サー・ジェームズ・ステュワートに助けを求めた。ジェームズとジョアンは、1439年、ローマー法皇から特許状を受け取り、結婚した。

サー・ジェームズ・ステュワートとジョアン・ボーフォートには3人の息子があった。その長男がジョン・ステュワート (John Stewart, 1<sup>st</sup> Earl of Atholl) (1440年生-1512年没) であった。そのジョン・ステュワートの娘アン・ステュワートが3代レノックス伯ジョン・ステュワート (John Stewart, 3<sup>rd</sup> Earl of Lennox) (1490/94年生-1526年没) と結婚し、その息子が4代レノックス伯マッシュュー・ステュワート (Matthew Stewart, 4<sup>th</sup> Earl of Lennox) (1516年生-1571年没) であった。彼が、マーガレット・ダグラスと結婚し、ダーンリー卿の父親になった。メアリー女王の2人目の夫になったダーンリー卿については、脚注177を参照する。

<sup>59</sup> 彼は、父親サー・ジョン・ステュワート (Sir John Stewart) (1421年没) と母親イザベラ・ドゥ・エルガディア (Isabl De Ergadia) (1439年没) との息子であった。彼の父親は、4代あるいは6代ステュワードのアレクザンダー・ステュワート (Alexamder Stewart, 4<sup>th</sup> あるいは 6<sup>th</sup> High Steward) (1214年生-1283年没) の子孫であり、彼の母親は、ロバート1世とエリザベス・ドゥ・バラ (Elizabeth De Burgh) (1289年生-1327年没) の子孫であった。故に、サー・ジェームズ・ステュワートは、父系および母系からもステュワート王家の末裔であった。ジョアン・ボーフォートが、ジェームズ2世の将来を案じてジェームズと結婚した理由が理解される。

<sup>60</sup> 彼の母親は、ロバート3世の長女マーガレットであった。5代ダグラス伯は、1437年から1439年の2年間、年少のジェームズ2世の摂政であった。何故病弱なダグラス伯が摂政になったのであろうか。それ

Douglas, 5<sup>th</sup> Earl of Douglas) (1390年生-1439年没)は、目障りな存在であった。2人によって命を狙われた5代ダグラス伯であったが、彼は病死した。リヴィングストンは、国王の未亡人ジョアン・ボーフォートを捕らえ、スターリング城に監禁し、ジェイムズ・ステュワートとその弟(William Stewart)を地下牢に入れた。このような乱暴な行為によってリヴィングストンは力を伸ばしていったと、推測される。彼は、ジョアン・ボーフォート達が、将来、友好関係を結ぶことや彼女の摂政職の辞退を条件に、彼女たちを解放した。このようにしてリヴィングストンは中央で申し上がった、と思われる。

その当時、絶大な権力を握っていたダグラス伯は、年若い6代ダグラス伯ウィリアム・ダグラス(William Douglas, 6<sup>th</sup> Earl of Douglas) (1424年生-1440年没)によって継がれた。その頃、ダグラス伯は、広大な領地を所有していた。ダグラス伯は、ギャラウェイ(Galloway)、ボスウェル(Bothwell)、アナンデイル(Annandale)、エトゥリック(Ettrick Forest)、ローダデイル(Lauderdale)、エスクデイル(Eskdale)、ティーヴィアトデイル(Teviotdale)などの一大領主であった。

しかし、その2人の後見人は、協力して、ダグラス伯を権力の中樞から追い出すことを計画し、実際に、1440年、「黒い晩餐(Black Dinner)」に6代ダグラス伯ウィリアムとその弟(David Douglas)をエディンバラ城に招待し、そのダグラス兄弟に臨席する若き国王ジェイムズ2世の目の当たりで、ダグラス伯の首をつり、殺害した<sup>61</sup>。6代ダグラス伯兄弟の暗殺に協力した7代ダグラス伯ジェイムズ<sup>62</sup>(James Douglas, 7<sup>th</sup> Earl of Douglas, 1<sup>st</sup> Earl of Avondale) (1371年生-1443年没)は、3年後に、他界した。8代ダグラス伯には、その息子のウィリアム(William Douglas, 8<sup>th</sup> Earl of Douglas, 2<sup>nd</sup> Earl of Avondale) (1425年生-1452年没)が就いた。彼は、奸智にたけた若者で、クライトンとリヴィングストンによる王権の壟断がダグラス家の破滅に導くと考え、その両者を仲違いさせる奸計を謀った。3代クロフォード伯デイヴィッド・リンゼイ<sup>63</sup>(David Lindsay, 3<sup>th</sup> Earl of Crawford) (1445年没)

は、5代ダグラス伯が、ジェイムズ2世と従兄弟であったこと、第2に、女性が国王の摂政になる先例がなかったことが挙げられる。故に、病弱な5代ダグラス伯が王の未亡人と共に摂政役になった、と判断される。このとき、ダグラス伯は、Earl of Wigtown, Lord of Galloway, Lord of Bothwellであった。また、ダグラス伯爵家は、Selkirk, Ettrick Forest, Eskdale, Lauderdale, Annandaleなどを領有していた。

<sup>61</sup> ボスウェル(Bothwell)、アナンデイル(Annandale)の領主権は国王にわたり、ダグラス家の土地と伯爵位は、6代ダグラス伯ウィリアムの父の伯父であったジェイムズ・ダグラス(James Douglas, 7<sup>th</sup> Earl of Douglas, 1<sup>st</sup> Earl of Avondale) (1371年生-1443年没)に譲渡された。

<sup>62</sup> 7代ダグラス伯は、3代ダグラス伯アーチボルドの2男として生まれた。彼は、1437年、アヴォンデイル伯(Earl of Avondale)を授けられた。

<sup>63</sup> 3代クロフォード伯は、4代クロフォード伯アレグザンダー・リンゼイ(Alexander Lindsay, 4<sup>th</sup> Earl of Crawford) (1453年没)に継がれた。このクロフォード伯は、ロバート2世によって叙位された。3代マ

などのクロフォード伯一族がリヴィングストンに加担し、聖アンドリュース司教のジェイムズ・ケネディー<sup>64</sup> (James Kennedy) (1408年生?-1465年没) がクライトン卿に加担し、両者の争いが各地で起きた。これは、8代ダグラス伯の思惑通りに展開し、その結果、8代ダグラス伯ウィリアムは、その領土を拡大した<sup>65</sup>。また、リヴィングトンも、8代ダフラスト伯と謀って、クライトン卿を大法官から締め出し、王権の中枢の大臣に成り上がっていった。

ジェイムズ2世は、18歳になり、親政に乗り出した。彼は、ジェイムズ1世と同様に王権の回復・伸張に力を傾け、貴族、特に有力貴族の力を削ぐ政策を実行した。貴族の勝手な振る舞いによる王権の壟断の阻止を計画し、それを実行した。彼は、はじめに、クライトン卿やリヴィングストン一族<sup>66</sup>の勢力を削ぐことから始めた。リヴィングストン一族が、宮内長官 (Chamberlain)、最高司法行政官 (Justiciary)、造幣局長官 (Master of Mint)、スターリング城 (Stirling Castle)、ダンバートン城 (Dumbarton Castle)、ダヌーン城 (Doune Castle)、メスバーン城 (Mathven Castle) の城代の要職を兼ねていた。ジェームズ2世は、1449年、リヴィングストン一族を西ロージアンブラックネス城 (Blackness Castle) に監禁し、反逆罪で処刑<sup>67</sup>した。またウィリアム・クライトンも要職からははずされ、聖アンドリュース司教のジェイムズ・ケネディーの監視下に置かれた。

次に、ジェイムズ2世は、ダグラス家の勢力を削ぐことを計画した。しかし、彼とダグラス家との闘いは、長期戦になった。当時のダグラス家は、国王に継いで広い領土を所有して

リ伯ジョン・ランダルフの未亡人ユーフィミア (Euphemia de Ross) (1386年没) の娘エリザベス (Elizabeth Stewart) (1356年と1376年の間に生) と結婚したクロフォード伯デイヴィッド・リンゼイ (David Lindsay, 1<sup>st</sup> Earl of Crawford) (1360年生-1407年没) に、ロバート2世 (Robert II) (在位1371年-1390年) によって、初代クロフォード伯が叙位された。

<sup>64</sup> 彼は、ロバート3世の次女メアリーとサー・ジェイムズ・ケネディーの息子であったので、ロバート3世の孫であった。ギルバート・ケネディー (Gilbert Kennedy, 1<sup>st</sup> Lord Kennedy) (1406年生?-1478/9年没?) は、彼の兄であった。ケネディー・ジェイムズは、国王ジェイムズ2世の政府の数少ない主要な人物の一人であった。また、彼は、後に、ジェイムズ3世の摂政会議の一員に選ばれた。

<sup>65</sup> 2人の争いを利用して、8代ダグラス伯ウィリアムは、マリ伯領およびオーモンド伯領を獲得し、彼の2人の弟 (ジェイムズおよびヒュー) に譲渡した。

<sup>66</sup> サー・アレグザンダー・リビングストンには、3人の弟がいたが、ロバート・リビングストン (Robert Livingston of Linlithgow) は、監査役 (Comptroller)、ジョン・リビングストン (John Livingston) は、造幣局長官 (Master of Mint)、そしてジェイムズ・リビングストン (James Livingston) であった。サー・アレグザンダー・リビングストンは、1444年にジェイムズ2世の後見人役を彼の長男ジェイムズ・リビングストン (James Livingston, 1<sup>st</sup> Lord Livingston) に譲渡していた。

<sup>67</sup> 処刑されたのは2人であった。サー・アレグザンダー・リビングストンの子で、スターリング城の城守であり、メスバーン城の隊長であったアレグザンダーとリンリスゴウのロバート・リビングストンであった。サー・アレグザンダー・リビングストンとサー・ジェイムズ・リビングストンは、捕らえられたが、釈放された。1454年、サー・ジェイムズ・リビングストンは、Lordに叙位された。

いた<sup>68</sup>。そのダグラス家の勢力を削ぐことによって、国王の勢力が伸張され、王の権威あるいは権力が回復された。ジェームズ2世は、その最初の戦術としてダグラス伯兄弟をローマ法王庁の使節として国外に送り出し、その間にダグラス家支配の城をジェームズ2世の支配下に置くことを謀った。これが、ダグラス伯の勢力を削ぐための第一歩であった。ローマから戻ったダグラス伯は、支配領の要塞がジェームズ2世<sup>69</sup>に押さえられていることを知り大いに驚いた。1452年2月22日、ジェームズ2世は、スターリング城に8代ダグラス伯ウィリアムを招いた。ダグラス伯は、身の危険を感じたが、国王の安全を保証するという約束を信じ、その招きに応じた。ジェームズ2世は、食事を取りながら、ダグラス伯にクロフォード伯との同盟を破棄することを迫ったが、8代ダグラス伯ウィリアムはその申し出を拒否した。これに激昂したジェームズ2世は、ウィリアムの胸に短剣を突き刺し、彼を死に至らしめた。ジェームズ2世は、8代ダグラス伯ウィリアムを騙し討ちにしたのであった。9代ダグラス伯は、彼の弟ジェームズ (James Douglas, 9<sup>th</sup> Earl of Douglas) (1426年-1488年) が継いだ。

ジェームズ2世に怨念を懐く9代ダグラス伯ジェームズは、1455年、次弟マリ伯アーチボルド<sup>70</sup> (Archibald Douglas, Earl of Moray) (1426年生-1455年没)、オーモンド伯ヒュー・ダグラス<sup>71</sup> (Hugh Douglas, Earl of Ormonde) (1455年没)、バルヴェニ卿ジョン・ダグラス<sup>72</sup> (John Douglas, Lord of Balvenie) (1433年生-1463年没) 等と共に、ジェームズ2世に一大決戦を挑んだ。これは、アーキンホーム (Arkinholm) の戦いとして知られている。この決戦は、ジェームズ2世側に「赤いダグラス」、アングス伯ジョージ・ダグラス (George

<sup>68</sup> ダグラス伯家は、依然として、ギャラウェイ (Galloway)、ボスウェル (Bothwell)、アナンデイル (Annandale)、エトトリク (Ettrick Forest)、ローグデイル (Lauderdale)、エスクデイル (Eskdale)、ティーヴィアトデイル (Teviotdale) などの領土を支配していた。

<sup>69</sup> ジェームズ2世は、8代ダグラス伯がロス伯イール卿ジョン・マクドナルド (John MacDonald, Lord of the Isles and Earl of Ross) (1434年生-1503年没) や4代クロフォード伯アレクザンダー・リンゼイ (Alexzander Lindsay, 4<sup>th</sup> Earl of Crawford) (1454年没) などと結んでいた同盟に対しても言いがかりをつけた。

<sup>70</sup> 彼は、7代ダグラス伯の5人兄弟の中の一人で、9代ダグラス伯ジェームズ・ダグラスと双子であった。彼もアーキンホーム (Arkinholm) の戦いで戦死した。

<sup>71</sup> 彼は、7代ダグラス伯の5人兄弟の4番目であった。1455年にオーモンド伯 (Earl of Ormond) に叙位されたが、1455年、9代ジェームズが伯爵位を剝奪されたとき、同時に、彼のオーモンド伯位も剝奪された。オーモンド伯という名は、ダグラス家によって保有されていた、ロスおよびクロマティー地方の Black Isle の Avoch にある、オーモンド城 (Ormond Castle) に因んでいる。

<sup>72</sup> 彼は、7代ダグラス伯の5人兄弟の末子であった。アーキンホーム (Arkinholm) の戦いに敗北して、彼は、9代と共に、イングランドに逃れたが、再び、ジェームズ2世の王権と戦うために戻ってきたが、捕らえられエディンバラで首つりになった。

Douglas, 4<sup>th</sup> Earl of Angus) (1412年生?-1462年没)と初代ハミルトン卿ジェームズ<sup>73</sup> (James Hamilton, 1<sup>st</sup> Lord Hamilton) (1415年生-1479年没)が加わり、ダグラス家が赤と黒に分かれて戦う、ダグラス一族の決戦でもあった。戦いは、ダムフリースシャー(Dumfriesshire)のLandhol近くのアーキンホームで繰り広げられたが、ギャロウエイのトリーヴ城(Treaves Castle)が落ちて、ジェームズ2世側の勝利に終わった。その勝因は、大砲<sup>74</sup>の威力によるものであった。ダグラス伯の方では、マリ伯アーチボルドが戦死し、ヒュー・ダグラスは捕虜にされ、殺害された。バルヴェニ卿ジョン・ダグラスは、9代伯ジェームズ・ダグラスと共に、イングランドに逃走し、後にバラ戦争ではヨーク派として参戦した。9代ダグラス伯ジェームズは、イングランドに逃げて、エドワード4世によってガーター騎士にされ、スコットランドの王と戦うためにハイランドと連携するために交渉役を務めた。彼は、ジェームズ3世の治世時の1484年に、スコットランドを侵攻し、ロホホメイバン・フェアの戦い(Battle of Lochmewan Fair)で捕らえられ、ファイフのリンドーズ・アベー(Lindores Abbey)に監禁され、その4年後に62歳の生涯を閉じた。彼の死によりブラック・ダグラスも歴史の表舞台から姿を消すことになった。

ブラック・ダグラスの壊滅によって、ジェームズ2世は、ダグラス伯の土地や財産を没収し、軍事的にも絶対的優位にたつた。また所領からの収入増加させることができた。

国王の権力と領土(富)の回復がジェームズ2世に統治の自信をもたらし、スコットランド議会では、貴族などの領主に王権への服従をもたらす条例を成立させた。国内の有力貴族

<sup>73</sup> ジェームズ・ハミルトンは、最初、ロバート2世の長男デイヴィッド・ステュワート(David Stewart, Earl of Strathearn) (1357年生-1386年没)の娘ユーフィミア(Euphemia Stewart 1434年没)と結婚し、次に、ジェームズ2世の長女メアリー(Mary Stewart) (1452年生-1488年没)と結婚した。ユーフィミアが5代ダグラス伯の末亡人であった関係から、ハミルトンは、6代ダグラス伯ウィリアム、6代伯の弟デイヴィッド、そしてマーガレットの継父になった。ウィリアムとデイヴィットの2人は、「黒い晩餐」でエディンバラ城にて暗殺された。マーガレットは、その従兄弟の8代ダグラス伯ウィリアムと結婚するが、8代ダグラス伯は、ジェームズ2世によって騙し討ちに遭い殺害された。次に、マーガレットは、9代ダグラス伯ジェームズと結婚した、と言われている。9代ダグラス伯とその3人の兄弟が連帯し、ジェームズ2世に謀反を謀り、隠謀と戦いを繰り広げられた。しかし、1455年、彼らは、アーキンホルムの戦い(Battle of Arkinholm)で敗れた。マリ伯ヒュー・ダグラスは、その戦いで捕虜になり、殺害され、またオーモンド伯アーチボルド・ダグラスは、捕らえられ死刑にされ、バルヴェニ卿ジョン・ダグラスは、9代伯ダグラスと共に、イングランドに逃げた。9代ダグラス伯ジェームズ・ダグラスは、1455年、その資格を剥奪され、ダグラス伯家の土地は分割され、その領主権は4代アンガス伯ジョージ・ダグラス(赤いダグラス)に継がれた。9代ダグラス伯は、イングランドに逃亡し、スコットランド国王に対して隠謀をはたらきかけた。その戦いにおいて、ジェームズ2世側が勝利することによって、王権が伸張した。「黒いダグラス」は歴史の表舞台から姿を消した。

<sup>74</sup> ジェームズ2世がディー川の中の島のスリーヴ城の攻撃に使用した大砲は、長さおよそ4メートル、口径が50センチメートルで、フランドルからの輸入品であった。この大砲は、「モンズ・メグ」と呼ばれた。

の力を削ぎ、王権を回復したジェイムズ 2 世は、バラ戦争<sup>75</sup> に入り、体制が乱れているイングランド<sup>76</sup> を侵攻する機会を窺っていた。1460 年にジェイムズ 2 世は意を決し、イングランド

<sup>75</sup> 1455 年 5 月に、3 代ヨーク公リチャード (Richard Plantagenet, 3<sup>rd</sup> Duke of York) (1411 年生-1460 年没) は、ロンドン郊外北東のセント・オールバンス (Saint Albans) で王軍と戦い、2 代サマーセット伯エドモンド・ボーフォード (Edmund Beaufort, 2<sup>nd</sup> Duke of Somerset) (1406 年生-1455 年没?), 2 代ノーサンバーランド伯 (Henry Percy, 2<sup>nd</sup> Earl of Northumberland) (1394 年生-1455 年没), 8 代クリホード伯トマス・クリホード (Thomas Clifford, 8<sup>th</sup> Baron de Clifford) (1455 年没) を敗死させ、大勝した。これが、バラ戦争の始まりであった。これは第 1 次セント・オールバンの戦いとして知られている。この戦いでヨーク家がランカスター家に大勝したが、その後も、王妃マーガレットの反撃と両家の戦いは続いた。ロンドンの評議会が、ヘンリー 6 世の後継として 3 代ヨーク公リチャードを決めた。これは、王妃マーガレットの息子エドワードおよびボーフォード家の血統者 (サマーセット公ヘンリー (Henry Beaufort, 3<sup>rd</sup> Duke of Somerset) (1436 年生-1464 年没), その妹リッチモンド伯妃マーガレット (Margaret Beaufort) (1443 年生-1509 年没), その息子ヘンリー・テューダ (Henry Tudor) (1457 年生-1509 年没) に王位の相続権がないことを決めたことになる。これに対し王妃マーガレットがヨークシャーで兵を挙げ、3 代ヨーク公リチャードと激しく戦い、1460 年のウェイクフィールド (Wakefield) の戦いでヨーク公を戦死させた。紙の王冠を被せたヨーク公の首は、ヨーク城壁に晒された。1461 年に王妃マーガレットは、第 2 次セント・オールバンの戦いでも勝利し、国王ヘンリー 6 世を取り戻した。

1461 年に 3 代ヨーク公リチャードの長男エドワードがエドワード 4 世 (Edward IV) (在位 1461 年-1470 年, 1471 年-1483 年) として王位についた。バラ戦争は、1485 年にテューダ朝が開かれるまでの 30 年間、ヨーク家とランカスター家との戦いであった。ランカスター家は、ヘンリー 6 世と王母マーガレットが中心になり、ヨーク家は、ヨーク公リチャード・プランタジニットとその子エドワード、エドモンド、クラランス公ジョージ・プランタジニット (George Plantagenet, 1<sup>st</sup> Duke of Clarence) (1449 年生-1478 年没), グロスター公リチャード (Richard, Earl of Gloucester), 後のリチャード 3 世 (Richard III) (在位 1483 年-1485 年) が中心になり、両家の間で争われた。

<sup>76</sup> イングランドでは、1422 年にヘンリー 5 世がフランス遠征中に急死し、ヘンリー 6 世が生後 9 か月で王位を継ぎ、フランス国王を兼務した (二重王国君主政)。ヘンリー 6 世 (Henry VI) (在位 1422 年-1461 年, 1470 年-1471 年) は成長し、1445 年 4 月 22 日に、アンジュ公ルネの娘マーガレット (Margaret of Anjou 1430 年生-1482 年没) と結婚した。この結婚の条件として、4 代サフォーク伯ウィリアム・ドゥ・ラ・ポール (William de la Pole, 4<sup>th</sup> Earl of Suffolk) (1396 年生-1450 年没) は休戦を申し出たが、これに対しフランスの勝利王シャルル 7 世 (Charles VII 在位 1422 年-1461 年) は、結婚の持参金なし、メーヌの主権の放棄を条件とした。イングランドでは、フランスの強硬な政策への対応を巡って、主戦派と和平派が対立した。王妃マーガレットと和平派のウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォードならびにサフォーク公ウィリアム (William, Earl of Suffolk) (1396 年生-1450 年没) は、主戦派のグロスター公ハンフリーや 3 代ヨーク公リチャード・プランタジニットと戦争の進め方を巡って対立していた。和平派は、グロスター公ハンフリーを投獄し拘禁中に死亡させ、3 代ヨーク公リチャード・プランタジニットをアイルランド卿に任命し、中央から追放した。政局の実権は和平派にあった。ウィンチェスター司教ヘンリー・ボーフォードも他界し、その後継は 2 代サマーセット伯エドモンド・ボーフォードが就いた。メーヌ (Maine) を失ったイングランドは、1449 年に休戦協定を破りフジエール (Fougères) を攻撃したが、サマーセット伯エドモンド・ボーフォードはノルマンディー公領の防衛を組織的に行うことができず、1499 年にルーアン (Rouen) さらにアルフルール (Harfleur) を失い、1450 年にはノルマンディーを放棄した。サフォーク伯ウィリアムに対する不満と非難が高まり、彼は海外追放にされ、その途中で船乗り達によって処刑された。

和平派の主導権は 2 代サマーセット伯エドモンドに移ったが、ロンドンで起こった反乱のためヘンリー 6 世や王妃はロンドンからウォーリックの北のケルニワース城に移った。その間に、アイルランドに追放

北部のベリクやロクスバラ城 (Roxburgh Castle) の奪還のために侵攻し、巨砲モンス・メグ数門を配置し、ロクスバラ城を陥落させ、手に入れた。しかし、ジェイムズ2世がロクスバラ城めがけて発射される大砲の傍らでそれを見守っていたときに、不運にも近くの一門が炸裂し、その破片でジェイムズ2世は倒され、死亡した。彼の後を継いだのがジェイムズ3世<sup>77</sup> (James III) (在位1460年-1488年) であった。

ジェイムズ2世の文化活動として挙げられるのは、グラスゴー大学の創設であった。1451年にグラスゴーの司教で、国璽尚書(Chancellor)でもあったウィリアム・ターンプル(William Turnbull) (1454年没) にグラスゴー大学の創設を命じた。人口がイングランドの10パーセントであったにも拘わらず、グラスゴー大学は、聖アンドリュース大学について、イングランド(オックスフォード大学に継ぐケンブリッジ大学)と同様に、2番目大学として創設された。また文化面ではこの他にも、実用的な道具類について見ても楽しめる道具へと変化させたきっかけをもたらし、それまでは戦闘だけに考えられていた城や館は居住性を欠くものであったが、それを住むに便利な空間すなわちインテリアに改良するように進めたのは、ジェイムズ2世の治世下のころであった、と思われる。

### 第3節 脆弱な国王ジェイムズ3世と不平貴族による王権への挑戦

ジェイムズ2世の後を継いだのがジェイムズ3世<sup>78</sup> (James III) (在位1460年-1488年) であった。彼は、1460年8月、ロックスバラシャー(Roxburghshire)のケルソー・アペー(Kelso Abbey)で戴冠した。このとき、彼は7歳11ヵ月であった。彼には摂政がつけられた。スコッ

されていた3代ヨーク公リチャードが議会で復帰し、ヨーク公の王位継承権が承認され、1453年8月にヘンリー6世が精神障害(緊張型統合失調症)になり、ヨーク公をイングランドの護国卿とした。1454年にヘンリー6世がその病から回復すると、ヨーク公はその護国卿を解任され、ヨーク公は評議会の議席を喪失した。再び2代サマーセット伯エドモンド・ボーフォードが宮廷での地位を回復し、パーシー家と結び、ヨーク公リチャードと対立した。このヨーク公とサマーセット公の対立がバラ戦争の直接的な切掛けであった。

<sup>77</sup> ジェイムズ2世と王妃マリー (Marie de Guelderes 1463年没) との間には、4男2女が生まれた。長男がジェイムズで王位を継いだ。次男はオルバニー公アレクサンダー・ステュワート (Alexander Stewart, 2<sup>nd</sup> Duke of Albany) (1454年生-1485年没) であった。3男のデイヴィッドは早世し、4男はマー伯ジョン (John Stewart, Earl of Mar) (1456年生-1479年没) であった。長女メアリー (Mary Stewart) (1453年生-1488年没) は、アラン伯トマス・ボイド (Thomas Boyd, Earl of Arran) (1472年没) と結婚したが、ボイドの死後は、初代ハミルトン卿ジェイムズ (James Hamilton, 1<sup>st</sup> Lord of Hamilton) (1415年生-1479年没) と再婚、次女マーガレット (Margaret Stewart) (生没不詳) は、3代クライトン卿ウィリアム・クライトン (William Crichton, 3<sup>rd</sup> Lord of Crichton) (1493年没?) と結婚した。

<sup>78</sup> ジェイムズ3世の王妃は、デンマーク・ノルウェー・スウェーデン王クリスティアン1世 (Christian I) (在位1448年-1481年) の王女マーガレットであった。この当時、デンマークは、カルマル連合によってデンマーク・ノルウェー・スウェーデン三国に君臨する大国であり、対イングランドとの関係で北欧三国と強い絆を結ぶことはスコットランドにとっては有効な政策であった。

トランドでは、再び、国政を摂政に任される摂政政治が実行された。

前王の摂政役の横暴な行動からの経験を踏まえて、ジェイムズ3世の場合には、摂政の他に母后マリー・ドゥ・グェルダール（Marie de Gueldres）（1463年没？）と聖アンドリュース司教のジェイムズ・ケネディーをジェイムズ3世の後見人とし、すべてを摂政会議に諮って統治する形式が採られた。

ジェイムズ3世が王位を継いだとき、大豪族ブラック・ダグラスの壊滅によって群雄が割拠し、各貴族が権力拡張の機会を狙っていた。西北部ハイランドの氏族の長、豪族であるロス伯マクドナルドは、9代ダグラス伯ジェイムズと謀り、摂政会議統治下のスコットランドを占領し、北部はマクドナルド、南部はダグラスの支配領とする密約を結び、ヨーク家<sup>79</sup>のイングランド<sup>80</sup>王エドワード4世<sup>81</sup>（Edward IV）（在位1461年-1470年、1471年-1483年）に支援を求めた。他方、スコットランドの摂政会議は、ランカスター家<sup>82</sup>に支援を求め、1462年、

<sup>79</sup> ヨーク王家とは、エドワード4世とリチャード3世の2代の王家であった。この両王家はエドワード3世に繋がる王家であり、プランタジネット家であった。ヨーク家は、エドワード3世の5男エドモンド・オブ・ラングリー（Edmund of Langley）（1341年生-1402年没）に始まり、彼が初代ヨーク公（1<sup>st</sup> Duke of York）になった。2代は、その長男のエドワードが継いだ。アジャンクール（Agincourt）の戦いで戦死した。また次男の2代ケンブリッジ伯リチャード・コニスバラ（Richard Conigsburgh, Earl of Cambridge, 2<sup>nd</sup> Duke of York）（1376年生-1415年没）、3代はヨーク公リチャード・プランタジネットであり、その長男がエドワード（後のエドワード4世）であり、父の死後、ヨーク公を継いだ。その3代ヨーク公リチャードの母アンは、王位継承権をもつマーチ伯ロジャー・モーティマの娘であり、彼女の兄エドモンドが他界し、王位継承権が彼女に移っていたので、3代ヨーク公リチャードは、父系によりエドワード3世の5男の家系を、また母系によりエドワード3世に3男（クラランス公ライオネル・オブ・アントワープ）の家系を継いだことになる。エドワードは、王位継承権において、ヘンリー6世よりは優先する順位にあった。その故に、彼は、ヘンリー6世に王位継承を要求したが、1460年にウェイクフィールド（Wakefield）の戦いで戦死した。

<sup>80</sup> イングランドは、ヨーク家とランカスター家の抗争状態にあった。ヨーク家は、3代ヨーク公の長男エドワード4世、その6男クラランス公ジョージ（George Plantagenet, Duke of Clarence）（1449年生-1478年没）、その8男グロスター公リチャード（Richard Plantagenet, Duke of Glocester, 後のリチャード3世）、ランカスター家は、ランカスター王家のヘンリー6世（在位1422年-1460年、70年-71年）、王妃マーガレット・オブ・アンジュ（Margerte of Anjou「フランスの雌狼」）（1430年生-1482年没）が中心となり、争いのさなかであった。1455年から1485年までの30年間はバラ戦争で両家は争っていた。

<sup>81</sup> ヨーク家エドワード4世は、イングランドをスコットランドの宗主権者にすることを認める条件で、ロス伯らの要請に応じ、15年間休戦するというウエストミンスター・アードトーニッシュ協定（Treaty of Westminster-Adtornish）を結んだ。

<sup>82</sup> ヘンリー4世からヘンリー6世までの3代の王家をランカスター家（The House of Lancaster）という。この王家はヨーク家（The House of York）同様にエドワード3世に繋がる王家である。両家ともプランタジネット家（The House of Plantagenet）に繋がる。ランカスター家の名称は、ヘンリー3世の次男エドモンド・クローチバック（Edmund Crouchback）（1245年生-1296年没）が初代ランカスター伯ヘンリー・グロスモント（Henry of Grosmont, 1<sup>st</sup> Duke of Lancaster）（1310年生-1361年没）に叙任されたことで始まる。初代ランカスター公ヘンリーには男子がなく、1359年にその次女ブランシュ（Blanche of Lancaster）（1369年没）（ランカスター家女子共同相続人）と結婚したのがエドワード3世の4男ジョ

ウェストミンスター・アードトーニッシュ協定 (Treaty of Westminster—Ardtornish) を結び、ロス伯達の隠謀の難を避けた。

しかし、1463年12月に母后マリー・ドゥ・グエルダーが他界し、1465年に聖アンドリュース司教のジェイムズ・ケネディー<sup>83</sup> (James Kennedy, Bishop of Saint Andrews) (1408年生? -1465年没)も他界したことによって、2人の後見人を失ったジェイムズ3世は、摂政会議なしで、彼を取り巻く困難な政局を乗り切ろうとした。しかし、氏族首長の群雄するスコットランドの現況を乗り切ることは、彼にとって、至難の業<sup>84</sup>であった。王位に挑戦する幾多の難題にジェイムズ3世は、直面した。

彼に対する最初の挑戦は、母后マリー・ドゥ・グエルダーならびにジェイムズ・ケネディーが世を去ると、摂政会議の一員であったボイド卿ロバート・ボイド<sup>85</sup> (Robert Boyd, Lord Boyd of Kilmarnock) (1469年没?)がジェイムズ3世に取って代わろうとする隠謀であった。彼は、エディンバラ城代職についていた彼の弟のアレグザンダー (Alexander Boyd) (生没不詳)とブリーヒン司教のパトリック・グレアム<sup>86</sup> (Patrick Graham, Bishop of Brechin and Archbishop of Saint Andrews) (1478年没)らと謀って、1466年7月、ジェイムズ3世をエディンバラ城に取り込み、自ら国王警護長官を名乗り、王室財務長官に就き、王権を壟断した。1467年、パトリックの息子トマス・ボイド (Thomas Boyd) (1472年没?)は、ジェイムズ2世の娘メアリー (Mary Stewart) (1453年生-1488年没)と結婚した。

1469年にデンマークのマーガレット (Margaret of Denmark) と結婚<sup>87</sup>したジェイムズ3

ン・オブ・ゴント (John of Gaunt) (1340年生-1399年没)であった。初代ランカスター公の姉モードが他界し、ブランシュはダービー伯領、リンカーン伯領を相続し、ジョン・オブ・ゴントは妻ブランシュの権利でランカスター公を名乗った。ジョン・ゴントとブランシュの間に生まれたのがヘンリー4世であった。彼がランカスター王家の開祖である。

<sup>83</sup> 彼は、ダンケルド教会の司教 (Bishop of Dunkeld) を経験していた。彼は、聖アンドリュース大学の聖サルバトルコレッジ (St Salvator's College) の創設者でもあった。

<sup>84</sup> それは、彼の性格にも依存していた。父王ジェイムズ2世とは真反対の性格であり、繊細で、虚弱で、果敢さに欠けていたからである。

<sup>85</sup> ボイド家は、スコットランド貴族の名門であった。1454年にジェイムズ2世によって卿位に叙位され、1460年に、摂政会議の7人の中の一人になった。1466年、議会法によって王国の唯一の統治者になった。

1467年、宮内長官 (Great Chamberlain) ならびに首席裁判長 (Lord Justice General) に任命された。<sup>86</sup> 彼の前任者は、ロバート3世の次女メアリー (彼女は、Dunure のサー・ジェイムズ・ケネディーと結婚し、Kincardine のサー・ウィリアム・グレアムと結婚していたので) によって、彼の義兄弟ジェイムズ・ケネディーであった。彼は、長い間、教区の教会を統轄していた。ブリーヒンの司教を務め、それから、1465年、聖アンドリュースの司教に転任した。1472年、聖アンドリュースの司教が大司教に格上げされたとき、彼は、初代聖アンドリュース大司教になった。彼は、精神錯乱の嫌疑で取り調べを受け、1478年、その大司教の職を解任された。彼は、修道院に入り、インホコルム (Inchcolm)、ダンファームリン (Dumfermline)、そしてロッホ・リーヴェン城 (Loch Leven Castle) で他界した。

<sup>87</sup> ボイド卿ロバートの功績は、ジェイムズ3世の王妃としてデンマーク・ノルウェイ・スウェーデン王国の

世は、親政に乗り出し、ボイド卿一派の一扫を決意した。ボイド卿の息子トマスが外国に出ているときに、ボイド家の政権が崩壊したが、その危険を察知したボイド卿と息子トマスは、イングランド領ノーサンバーランドのアニク(Alnwick)に逃れたが、その弟アレグザンダー・ボイドは、捕らわれ処刑された<sup>88</sup>。

第2の挑戦は、不平貴族と王弟達による国王に廃位を求める露骨な挑戦であった。王弟オルバニー公アレグザンダー(Alexander Stewart, 1<sup>st</sup> Duke of Albany) (1454年生-1485年没)と次の弟マー伯ジョン(John Stewart, Earl of Mar) (1456年生-1479年没)は、不平不満貴族たちにとっては輝ける星<sup>89</sup>であった。ジェームズ3世が、1474年、イングランドとの結婚同盟<sup>90</sup>を進めたことや貴族・豪族出身でない芸術家を側近に登用していたことに貴族達は不満を抱いていた。その不平貴族達は、その2人の王弟をそそのかし、ロバート・コホラン(Robert Cochrane) (1482年没?)らの側近の排除を謀り、それと共に兄王ジェームズ3世の廃位の計画を練っていたが、その陰謀が事前に漏れ、王弟アレグザンダーは、一時、エディンバラ城に収監されたが、1479年、フランスに逃れた<sup>91</sup>。弟マー伯ジョンは、捕らえられ、処刑された。マー伯ジョンの土地は、コホランに譲渡された。

フランスに逃れた王弟アレグザンダーは、フランス王ルイ11世(Louis XI) (在位1461年-1483年)に兄王ジェームズ3世の廃位の協力を求めたが、しかし、ルイ11世は、その要求には<sup>92</sup>とりあわなかった。ルイ11世に期待をかけることを諦めた王弟アレグザンダーは、イングランドに入り、亡命中の9代ダグラス伯ジェームズを訪ね、彼と共にエドワード4世に会

---

女王マーガレットを迎えたことであった。結婚には多額の持参金が付きものであったが、スコットランドは手許不如意から現金を要求したが、デンマーク・ノルウェー・スウェーデン王クリスティアン1世(Christian I) (在位1448年-1481年)も手許不如意から後に現金を送る代わりに、オークニ諸島、シェトランド列島を持参金とした。このことによって、スコットランドの北部あるいは西部海岸を荒らした海賊の根拠地あるいは中継地がスコットランド領にしたことは、現金では賄えない大きな収穫であった。

<sup>88</sup> ジェームズ3世の在位中、彼が、奸臣や反逆者を含めて、臣下の処刑に同意したのは、アレグザンダー・ボイドのみであった。

<sup>89</sup> 2人の王弟とジェームズ3世とは、全く、違った気質であった。王弟の2人は、激しいスポーツ、狩猟、弓術、剣術、レスリングに興じていたのに対して、ジェームズ3世は、芸術を愛した。

<sup>90</sup> 1474年、イングランド王エドワード4世との間で結ばれた。ステュワート王朝の皇太子(後のジェームズ4世)がエドワード4世の娘シシリー(Princess Cecily of York) (1469年生-1507年没)との結婚による同盟であった。この同盟は、スコットランドの有力貴族には反対され、それは、スコットランドの第1次ならびに第2次独立戦争を通して培われた両国の敵対関係に拠っていた。これが、1470年代の不人気の要因の1つであった。しかし、1479年にはこの同盟は破綻していた。1480年から1482年の間では、イングランドとの戦争が起こり、1482年にエドワード4世はスコットランドに本格的に侵攻し、1482年のローグ橋でコホラン等などの側近の首つりとジェームズ3世を拘束し、エディンバラ城に監禁した。

<sup>91</sup> エディンバラ城からロープ伝いに脱出し、フランスに逃亡した。

<sup>92</sup> ルイ11世は、ジェームズ3世の弟アレグザンダーを厚遇して、彼にブルゴーニュ伯の娘を紹介し、結婚までも用意したが、兄王の廃位には応じなかった。

い、エドワードの宗主権を認めることを条件に、ジェイムズ3世を廃位させるための援助軍を彼に求めた。それに対しエドワード4世は、フランスとスコットランドの「古い同盟」の廃棄、ベリクのイングランド領への正式編入、スコットランド南部のアナンディールとリッズデイル(Liddesdale)の一部割譲、そして王弟アレグザンダーとエドワード4世の3女シリー(Princess Cecily of York)(1469年生-1507年没)との結婚を条件とした。エドワード4世は、オルバニー公アレグザンダーのスコットランド帰国時に、エドワードの弟グロースター公リチャード(後のリチャード3世)を指揮官とする援軍の出動を命じた。

1480年と1482年の間で、オルバニー公アレグザンダーと9代ダグラス伯の共同軍によるベリク包囲戦がおこった。その共同軍に対するジェイムズ3世軍の対応は鈍く、またロバート・コホランら側近の服装あるいは出で立ちが戦闘に臨むものではなかったが、このことが不平貴族や軍を指揮する貴族の反感を増幅させ、彼らの怒りは爆発した。不平貴族であったバハン伯ジェイムズ・ステュワート<sup>93</sup>(James Stewart, 1<sup>st</sup> Earl of Buchan)(1442年生-1499年没)、2代ハントリー伯ジョージ・ゴードン<sup>94</sup>(George Gordon, 2<sup>nd</sup> Earl of Huntly)(1455年生?-1501年没)、5代アンガス伯アーチボルド・ダグラス<sup>95</sup>(Archibald Douglas, 5<sup>th</sup> Earl of Angus)(1449年生?-1513年没)等<sup>96</sup>は、ローダ教会(Lauder Church)に結集し、コホランらの側近の抹殺<sup>97</sup>を謀った。

国王をエディンバラ城に閉じこめ、勝ち誇ってエディンバラに戻った<sup>98</sup>王弟アレグザンダーは、不満貴族に対する市民の反感が意外に強いのに驚き、一転してジェイムズ3世を解放した。それは人目をくらすための虚偽の解放であったが、疑うことの知らないジェイムズ3世は、王弟を心から信じ、彼にマー伯位を増領した。しかし、その厚遇にもかかわらず、王

<sup>93</sup> 彼は、サー・ジェイムズ・ステュワート(The Black Knight of Lorn)とジョアン・ポーフォートとの次男であり、ジェイムズ2世や彼の妹マーガレットとは異母兄弟・兄妹であり、さらにジョン・ステュワート(John Stewart, Earl of Atholl)(1440年生?-1512年没)は彼の弟であった。

<sup>94</sup> 1498年から1501年にかけて、スコットランドの国璽尚書(Chancellor)を務めた。彼は、ダグラスの反乱時には、国王側に付いて戦った。彼は、ハントレイ城(Huntly)の再建を完成させた。

<sup>95</sup> 東ロージアン・タンタロン城(Tantallon Castle)で生まれた。彼は、Great Earl of Angus、また、Bell the Catとして知られている。1481年、彼は、イングランドとの東境界の見張り役になった。彼は、エドワード4世とオルバニー公側に付き、ジェイムズ3世には敵対した。オルバニー公と5代ダグラス伯は、イングランド王の大君主権を認める契約にウェストミンスターにて調印した。1487年、1488年にジェイムズ3世に対して反逆し、戦った。

<sup>96</sup> この他に2代グレイ伯アンドリュー・グレイ(Andrew Gray, 2<sup>nd</sup> Lord Gray)(1514年没)も参加していた。

<sup>97</sup> 5代アンガス伯アーチボルド・ダグラスは、コホランらの側近を捕らえ、トゥイード川に架かるローダ橋(Lauder Bridge)の上で、ジェイムズ3世の目の前で彼らを縛り首にした。

<sup>98</sup> 王弟アレグザンダーとグロースター公リチャードは、アニクを落とし、エディンバラに軍を進め、エディンバラ攻略の段になると、グロースター公リチャードはイングランドに引き揚げてしまった。

弟アレグザンダーによる王位篡奪の動きは一層露骨になった。ジェイムズ3世は、その露骨な王位篡奪の動きを静止するために、王弟の要職をすべて解くと、王弟アレグザンダーは、再び9代ダグラス伯に頼り、1484年にダグラス伯の率いる少数の軍勢と共に、ダムフリースシャー (Dumfriesshire) のロッホメイバン城 (Lochmaben Castle) の奪取に向かった。しかし、ダグラス伯はすでに過去の人 (貴族) であった。彼が、「ダグラス、ダグラス」と叫び、開城を求めたが、強力な反撃に遭い、捕らえられた。ダグラスは、ファイフのリンドーズ・アペー (Lindores Abbey) に監禁された。一方、王弟アレグザンダーは、敗走してフランスに逃れ、翌年パリで騎乗槍試合に出場して落命した。

第3の挑戦は、ジェイムズ3世の皇太子 (後のジェイムズ4世) を取り込んでの挑戦であった。1488年、5代アンガス伯アーチボルド・ダグラスと初代アーガイル伯コリン・キャンプ<sup>99</sup> (Colin Campbell, 1<sup>st</sup> Earl of Argyll) (1433年生?-1493年没?) は、国王の貴族軽視の人材登用に不満をもち、王位の廃位を求めたものであった。この初代アーガイル伯と5代アンガス伯アーチボルド・ダグラスとが協力し、皇太子ジェイムズを取り込み、ジェイムズ3世の廃位を求めて、スターリングの南のソーキバーン (Sauchiburn) で蜂起した。これは、ソーキバーンの戦い (1488年) として知られている。

初代アーガイル伯と5代アンガス伯側に加勢したのは、パトリック・ヘバーン<sup>100</sup> (Patrick Hepburn, Earl of Bothwell) (1508年没?), サー・アレグザンダー・ヒューム<sup>101</sup> (Sir Alexander Home, 1<sup>st</sup> Lord Home) (1403年生?-1490年没?), 2代グレイ卿アンドリュウなどであった。一方、ジェイムズ3世側には、3代エラル伯ヘイ<sup>102</sup> (William Hay, 3<sup>rd</sup> Earl of Errol)

<sup>99</sup> 1483年、ジェイムズ3世によって大法官 (Lord Chancellor) に任命された。翌年、彼は、ジェイムズ3世の虐殺に加わった。1488年、ジェイムズ3世は殺害された。彼は、この年、再び、ジェイムズ4世によって大法官に任命された。

<sup>100</sup> 1488年、スコットランド艦隊司令長官に任命された。また同年クライトンとボスウエルの領主権について王からの特許状を得た。1492年、彼は、ボスウエルの領主権と交換にリズデイル (Liddesdale) の土地と領主権を得た。彼は、1484年のイングランドとの停戦管理者の一人であったが、1488年のソーキバーンの戦いでは先頭に立ってジェイムズ3世の連隊と戦った。彼は、ジェイムズ3世の殺害の責任者の一人であった、と思われる。

ジェイムズ4世治世かでは、Master of the King's Household, エディンバラ城の監視人, エディンバラとハディングトン (Haddington) の州長官になった。1495年、彼は、ダンバートン城 (Dumberton Castle) のcaptainになった。また、ジェイムズ4世とマーガレット・テューダーの結婚交渉の全権大使とされ、その婚約式には国王代理で参加した。

<sup>101</sup> 彼は、ソーキバーンの戦いでジェイムズ3世を追放する反乱のリーダーであった。彼は、8代ダグラス伯ウィリアムに伴って、1450年、ローマに行った。また、1451年には、イングランドとの休戦交渉にジェイムズ2世によって派遣された。ニューキャスル・アポン・タインの聖ニコラス教会で3年間の休戦に調印した。1488年にバービックシャの州の副長官に任命された。

<sup>102</sup> ジェイムズ3世は、1488年のエディンバラで議会を開催した際に、反乱軍がリンリンスゴウからエディンバラに行進してきたとき、彼は、ファイフに逃げ、北に進行し、ハイランドの援軍を召集することを提

(1449年生?-1507年没), 2代ハントリー伯アレグザンダー・ゴードン<sup>103</sup> (George Gordon, 2<sup>nd</sup> Earl of Huntly) (1455年生?-1501年没), 聖アンドリュース司教のウィリアム・シーヴィズ<sup>104</sup> (William Scheves, Archbishop of Saint Andrews) (在位1478年-1497年) が馳せ参じた。一旦は, 西ロージアン人のブラックネスで休戦の約束が交わされたが, 反乱貴族に捕らわれている皇太子を取り返すためにジェイムズ3世は, 1488年6月11日, 軍備が整わないうちにソーキバンの戦場に向かった。準備不足のためジェイムズ3世軍は完全に敗北した。国王は37歳であった<sup>105</sup>。

ジェイムズ3世の国政を終わらせた貴族たちは, 勝利の美酒に酔ったが, 予想外な成り行きに困惑させられた。第1に, 皇太子ジェイムズ自身による自戒と統治の決意であった。彼は, 父王(ジェイムズ3世)の統治の方法には反対していたが, 父王を殺害するつもりはなかったもので, 不満貴族と行動を共にしたことこそを自責し, 鉄の鎖を身に巻き付け, 自戒と統治の決意を示した。第2に, 惨殺された国王に対する国民の同情が反乱貴族に対する憎しみに変わっていた。反乱貴族<sup>106</sup>は, 年少王を即位させ, 自分達の世界の到来を夢見ていたが, しかし, 惨殺された国王に対する国民の同情<sup>107</sup>が強烈であったため, 彼らの思い通りに年少

唱した貴族の一人であった。また, ソーキバンの戦いでは, 彼は, 他の多くの貴族と同様に, 王ジェイムズ3世を捨てた。

<sup>103</sup> 彼は, 初代ハントレー伯アレグザンダー・ゴードン (Alexander Gordon, 1<sup>st</sup> Earl of Huntley) (1470年没) とエリザベス・クライトン (Elizabeth Crichton) (1479年没) の息子であった。彼は, エリザベス・ダンバー (Elizabeth Dunbar) と結婚したが, ジェイムズ1世の娘アナベラ (Annabella Stewart) と結婚するために彼女とは離婚した。その後, 妻のエリザベス・ヘイ (Elizabeth Hay) と3度目の結婚をした。1498年から1501年まで, 彼は, 国璽尚書 (Chancellor) になり, ダグラス伯の反乱時には, ダグラス伯に敵対し, 国王側に付いた。彼は, ハントレー城 (Huntly Castle) を完成させた。

<sup>104</sup> 2代目の聖アンドリュース司教であった。彼の大司教在位期間は, 1478年から1497年であった。彼の前任者は, パトリック・グレームであった。彼は, 1476年に2度, ジェイムズ3世によって, 外国宮廷への大使に選ばれた。ロスシーニー公ジェイムズ・ステュワート (後のジェイムズ4世) とエドワード4世のシシリーと婚約を取り決めるためにイングランドを訪ねていた。

彼は, ジェイムズ3世から多大の寵愛を得たが, 彼は, ジェイムズ3世に反対する貴族と共に隠謀団に加わり, ソーキバンの戦いでジェイムズ3世を死に至らしめた。彼は, ジェイムズ4世の治世下に, 権力を保ち, ジェイムズ4世によって大使として雇用された。

<sup>105</sup> 国王は, 近くのミルトアンの粉ひき小屋に隠れたが, その女房に密告され, 僧に変装した刺客の手に落ちた。37歳の生涯を閉じた。

<sup>106</sup> 何故に, 不平貴族たちは, その反乱を国民が支持する, と考えたのであろうか。その大儀名分は, なんてあったのであろうか。その1つとしてあげられるのが, ジェイムズ3世が進めていたイングランドとの婚姻政策に起因すると思われる。皇太子(ジェイムズ4世)の妃としてイングランドのエドワード4世の娘シシリー (Cecily of York) (1469年生-1507年没) を迎えようとしていた。これは, スコットランドの独立戦争を通して, イングランドに反感を抱いていた宮廷人にとってジェイムズ3世のその選択は, 耐え難い行為であった, と推測される。

<sup>107</sup> 国王ジェイムズ3世が恵まれていない者, 下層階級の者に目をかけ, それまで登用されることのなかった下層階級の者を宮廷に抱えた国王であったから, 広く国民的同情を呼んだ, と思われる。

王を操作することはできなかった。

ジェームズ3世は、乱世の王国を統治するには全く相応しくない国王であったが、文化面で大きな功績を残し、スコットランドの初期ルネッサンスに貢献した、と思われる。彼は、建築家のロバート・コホラン<sup>108</sup>、音楽家のウィリアム・ロジャーズ（William Rogers）（生没不明）、服飾家のジェームズ・ホミル（James Hommil）（生没不明）、ヘンス職人のウィリアム・トージファン（William Torsifan）（生没不明）、聖アンドリュース教会のウィリアム・シーヴィズ（William Schevez、後にアンドリュースの大司教になった）（1440年生？-1497年年没）を側近として重用し、建築に音楽に服装などに一大変化をもたらした。建築では、コホランによって建てられたスターリング城のグレート・ホールは、全英で最も早い完成を見たルネッサンス建築であった。フランダース派の画家であったヒューゴ・ファン・デル・グース（Hugo Van der Goes）（1440年生？-1482/1483年没）によって、「三位一体の祭壇飾り（The Trinity Altarpieces）」<sup>109</sup>（1478年/1479年の作品）が描かれた。文学のロバート・ヘンリソン<sup>110</sup>（Robert Henryson）（1425年生？-1508年没？）、ブライド・ハリー<sup>111</sup>（Blind Harry）（1440年生-1492年没）などもジェームズ3世の保護を受け、彼によって高官として召し抱えられた。また鑄造技術の面ではスコットランドの先進性も文化面での発達から注目に値する。

クロード貨（銀貨）には、ジェームズ3世の像が刻まれ、陰影のついた横向きの彫像がスコットランド・コインにあらわれた最初の様式であった。それまでのコインでは正面向きで単純であった。その様式は、新ルネッサンス調と呼ばれるものである。この時代のスコットランド・コインには、スコットランドの象徴である「あざみ」をはっきりと記録した「あざみ

<sup>108</sup> 彼は、ジェームズ3世の側近中で最も重要な人物であった。1470年代には実際に統治に関わり、ジェームズ3世は、コホランをマー伯にした。しかし、イングランドとの戦争になると、ジェームズ3世の側近は5代アンガス伯アーチボルド・ダグラスらの隠謀によって排除された。ロード（Lauder）橋でコホランなどの側近は首つりに処された。

<sup>109</sup> これは、ベルギーのフランドル地域のガント（Ghent）で描かれ、スコットランドに持ち込まれたと思われる。この作品には、ジェームズ3世、マーガレット、このジェームズの子ならび依頼者 Edward Bonkil が描かれており、エディンバラの聖トリニティー礼拝堂におかれた。この作品は、現在、国立スコットランド・ギャラリーに展示されている。この画が、他のスコットランドの画家に、どのような影響をどれほど与えたかは確認できていない。

<sup>110</sup> スコットランド王によって特権が与えられた自治都市ダンファームリン（Dumfermline）に居住していた。彼は、法律と人文学の訓練を受けた教師であった。彼は、ダンファームリン修道院に親戚関係者を持ち、グラスゴー大学と連携していた。彼の詩は、この時期にスコットランド国の言語になった中世のスコットランド語によって作られた。彼の作品で最も長い詩が、*Morall Fabillis* であり、この詩は3,000行、13の説話物語から構成されていた。

<sup>111</sup> ハリー的生活については殆ど知られていない。彼は、*The Actes and Deidis of the Illustre and Vallyeant Campioun Schir William Wallace (The Wallace)* の著者として知られている。

コイン]と18シリングのユニコーン貨があった。現在のイギリス国王の紋章にもスコットランドの象徴としてのユニコーン<sup>112</sup>の楯をサポートとして使用されている。

#### 第4節 王権の伸張と近代的な国王

ジェイムズ3世の長男ジェイムズが王位を継承し、1488年6月26日にジェイムズ4世(James IV) (在位1488年-1513年)として戴冠した。そのときジェイムズ4世は15歳の若さであった。ジェイムズ4世の一生は40年であったが、彼は、統治の決断力と文化的才能の両方を持ち備えた理想的な国王であった。特に、語学の天才であり、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ラテン語、各地の方言を含むゲール語に精通していた、と言われている。彼は、画に描いた理想的な男性であった、と思われる。

ジェイムズ4世は、ジェイムズI世ならびにジェイムズ2世の王権を伸張させる政策を受け継ぎ、貴族の力を弱体化させ、スコットランド王権を強化させ、その回復<sup>113</sup>を成就した。それは、単に彼に先立つ国王達の政策によるだけではなく、ジェイムズ4世自身の気質であった彼の果敢さや先見性にもよっていたと、推測される。ジェイムズ4世の果敢さあるいはその先見性について幾つかの観点から確認しよう。

第1に、彼の行動力による王権の回復と彼の人員登用の観点からである。王権を侮っていた5代アンガス伯アーチボルド・ダグラス (Archibald Douglas, 5<sup>th</sup> Earl of Angus) (1449年生-1514年没) は、1491年にイングランド王ヘンリー7世<sup>114</sup> (Henry VII) (在位1485年-

<sup>112</sup> ユニコーンがいつ紋章に使われたのか、またなぜ使用されたのかについては不明である。

<sup>113</sup> ソーキバーンの戦い (Battle of Sauchiburn 1488年) で皇太子ジェイムズを擁してジェイムズ3世を抹殺した有力貴族は、論功行賞に預かることを当てにし、5代アンガス伯アーチボルド・ダグラスは摂政気取りで諸事を仕切り、またアーガイル伯コリン・キャンベルはイングランド大使に、パトリック・ヘバーンは海軍長官職とボスウェル伯爵になっていた。

<sup>114</sup> ヘンリー7世は、テューダ王家の開祖であった。ヘンリー5世の王妃キャサリン・オブ・ヴァロアは、ヘンリー5世が1422年に病死した後、議会で反対されながらも、王太后付納戸係秘書官であり一介の騎士程度の身分にすぎないウエールズ出身のオウエン・テューダ (Owen Tudor) (1400年生-1461年没) と再婚した。この2人の間に、1430年にエドモンドが生まれた。ヘンリー6世は、異父弟エドモンドをリッチモンド伯に叙爵し、全ての伯爵なかで最右翼とするなど破格の待遇をした。この叙伯によって彼は、1455年に、名門サマーセット公ジョン・ボーフォードの娘マーガレットを妻に迎えることができた。このマーガレットは、ランカスター公ジョン・オブ・ゴードン (エドワード3世の5男) の曾孫であった。エドモンドとマーガレットの間に生まれたヘンリーが、後のヘンリー7世であった。彼は、彼の母マーガレットによってランカスター家の血筋に繋がっていた。またエドワード3世の5男ジョン・オブ・ゴートンに繋がる血筋であったので、本来であれば王位継承権を持つのであるが、王位継承権から排除されていた。サマーセット公ジョン・ボーフォードは、ジョン・ゴートンと第3番目の妃キャサリン・スウィンフォードとの間に生まれていたが、2人が結婚する前に生まれていた庶子であった。ジョン・ボーフォードは庶子であったが、2人は正式に結婚し、嫡出子と認められたが、ヘンリー4世によって、王位継承権を排除されていた。リッチモンド伯の母マーガレットには王位継承権はなかった。当然にその子であったヘンリー

1509年)と謀反を企てようとしていた。その企ての情報を入手したジェイムズ4世は、迅速果敢な行動をとり、1491年、アングス伯の東ロージアンの北ベリク(North Berwick)の近くにある居城タンタラン城<sup>115</sup>(Tantallon Castle)を包囲し、アングス伯を閉じ込めた。さらに、彼は、アングス伯の持ち城であったロクスバラシャー(Roxburghshire)のハーミティジ城<sup>116</sup>(Hermitage Castle)を没収した。しかし、中世の国王の通例に反して、ジェイムズ4世はアングス伯を反逆罪で処罰することはなかった。また、中世の多くの王とは違い、ジェイムズ4世は、彼が没収した領地に代えて、他の領地(ボスウエルの領主権とボスウエル城)をアングス伯<sup>117</sup>に与えた。その上、その後アングス伯を宰相に据えている。この点からも彼は近代的な王であった。

第2に、ハイランド地域におけるその王権の伸張であった。ジェイムズ4世は、氏族制度によって強く団結していたハイランドの首長たちを王権の支配下に置くための努力をした。それまでのスコットランド国王は、ハイランド地域の隅々までその王権<sup>118</sup>を及ぼすことはで

---

7世にも王位継承権はなかったので、ヘンリー4世同様に、彼は王位篡奪者であった。ヘンリー7世は、1485年8月、ボズワースの戦いでリチャード3世を打ち破り、実力で王位を奪取した。

<sup>115</sup> この城は、14世紀の中頃、ウィリアム・ダグラス(William Douglas, 1<sup>st</sup> Earl of Douglas)(1327年生-1384年没)によって建てられ、それは彼の庶子ジョージ・ダグラス(George Douglas, 1<sup>st</sup> Earl of Angus)(1380年生-1403年没)に引き渡された。この城は、1491年、ジェイムズ4世によって包囲され、1528年、ジェイムズ5世によって包囲された。この城の特長は、中世のカーテン壁タイプの城である。

<sup>116</sup> 13世紀の中頃に建てられた。1338年、Sir Ralph de NevilleがSir William Douglasに包囲された。このダグラスは、同名のダグラス伯ウィリアム・ダグラス(William Douglas, 1<sup>st</sup> Earl of Douglas)(1327年生-1384年没)に殺害され、この城は、相続遺産として、初代ダグラス伯のものになった。彼が、その城をダーラム大聖堂の石工職人長(master mason)のJohn Lewinの助けによって、現代の城に建て替えた。

<sup>117</sup> パトリック・ヘバーン(Patrick Hepburn, 1<sup>st</sup> Earl of Bothwell)(1508年没)は、ボスウエルの領主権とボスウエル城と交換にハーミティジ城(Hermitage Castle)やリッズデイル(Liddesdale)地区を手に入れた。

<sup>118</sup> ハイランド地方への王権の伸張は、デイヴィッド1世(David I)(在位1124年-1153年)、アレグザンダー2世(Alexander II)(在位1214年-1249年)ならびにアレグザンダー3世(Alexander III)(在位1249年-1286年)によって進められた。デイヴィッド1世が封建制度のハイランド地方への浸透の足場を築いたが、この時、ハイランドは氏族制度の下にあり、ノルウェイに臣従していた。アレグザンダー2世は、デイヴィッド1世が築いた足場を踏み台にし、王権のハイランドの北部に浸透させた。マリ、ケイスネス、サザーランドに王権の浸透をもたらした。しかし、ハイランドのアーガイル地域では、依然として、イール領主などはスコットランド王権に反抗していた。アレグザンダー3世は、ノルウェイからヘブリデーズ諸島を奪回し、スコットランドの西部を王権の支配下に置く準備を果たしていたが、依然として、イール卿は独立していた。アレグザンダー3世(正確には、王妃マーガレット)以降、スコットランドは、イングランド(エドワード1世およびエドワード3世治世下のイングランド)との間で、スコットランド南部(ノーサンバーランド地域あるいはカンバーランド地域)の支配をめぐる争いのため、あるいは、フランス王権とイングランド王権のフランス王の継承に絡む内紛に関係していたため、スコットランドの内政あるいはハイランドの王権による統制は遅れていた。

きていなかった。ジェームズ4世が国王に就いた時には、シェリフが既に氏族首長の命令執行機関<sup>119</sup>となり、ハイランド地域は氏族の独立国家かのようにであった。ジェームズ4世は、ロス伯、かつ、イール卿であったジョン・マクドナルド(John MacDonald, Lord of the Isles, Earl of Ross) (1434年生-1503年没)とその庶子アングス・オグ(Aonghas Óg) (1490年没)との内紛や国王への反抗に乗じて、ハイランドでの王権の伸張を図った。

1462年にジョン・マクドナルドが、9代ダグラス伯ジェームズ・ダグラス(James Douglas, 9<sup>th</sup> Earl of Douglas) (1426年生-1488年没)と共に、エドワード4世と結んだウエストミンスター・アードトーニッシュ協定(Treaty of Westminster-Ardtornish)の逆行行為が尾を引き、ジェームズ3世の治世下の1475年にロス伯を取り上げられただけではなく、ネアン(Nairn)やインヴァネス(Inverness)州長官地位およびキンタイヤ(Kintyre)やクナップデイル(Knappdale)の領主権を取り上げられた。これを不満とするジョンの庶子アングス・オグ<sup>120</sup>(Aonghas Óg MacDonald) (1490年没)は、その父とスコットランド国王に対して反抗し、軍を起こした。

このために、西部ハイランドでは、1480年から1490年までマクドナルド対マクロード(MacLeod)、マッケンジー(Mackenzie)の氏族間の抗争が続くが、1490年、アングス・オグの殺害で終結した。しかし、翌年、ジョンの甥のアレグザンダーがロス伯位の復権を要求して立ち上り、イール卿ジョン自身も反乱に加わり、甥のアレグザンダーがインヴァネス王城(Inverness Castle)を占領したとき、マッケンジー氏族の領地を荒らしたために、マッケンジー氏族からの総攻撃を受け、1493年にアレグザンダーは大敗した。またジョン自身も王軍に降伏し、イール卿位も剝奪され、王権に含まれた。ジョンは、レンフルシャ(Refrewshire)のペイズリー・アベア(Paisley Abby)にて年金で余生を送った。

西ハイランドの名門氏族マクドナルドは、ロス伯を失ったばかりではなく、イール卿位<sup>121</sup>

<sup>119</sup> デイヴィッド1世以来、ハイランド地方の出先機関に任命されたシェリフ(州長官)が置かれていたが、スコットランドの王権が南部と中部に集中するようになったところから、シェリフは任命制から相続制へに変化した。このことのために、シェリフが国家の出先機関であるにも拘わらず、王権の及ばない機関になっていた。

<sup>120</sup> Aonghas Ógは、コリン・キャンベル(Colin Campbell, 1<sup>st</sup> Earl of Argyll) (1433年生-1493年没)の娘イザベラ(Isabella)と結婚した。彼は、彼の父ジョンを領地から追い出した。ジョンは、スコットランド王、アサル伯ジョン・ステュワート、親戚のMacLean, MacLeod, MacNeillの支持を得、オグはDomhnall BallachやMacDomhnall Mac Aonghais(chief of MacDonald of Keppoch)ならびにMacLeods of Lewisの支持を得て、親子が争った。オグが、父のガレー船を破壊し勝利したThe Battle of the Bloody Bay (1480年から1483年)の争いが起こった。またオグは、アサル伯の率いる王軍との戦いでも勝利した。

<sup>121</sup> これ以降、イール卿位は、王権に属し、皇太子の資格となった。現皇太子チャールズはこのイール卿の資格を持っている。

も失った。ジェームズ4世は、有力氏族であったイール卿を押さえたことに自信をつけ、ハイランド地域の氏族を訪れ、新しく州長官（シェリフ）を置く交渉もおこなった。徴税権や裁判権などの特権を持っていた氏族の首長は容易に応じなかったが、語学の天才であったジェームズ4世はゲール語を使い説得に当たった。これによって、ジェームズ4世はハイランダーの気持ちをつかんだ、と思われる。その一例であるが、国王直属の官軍を創設したとき、艦隊の最初の艦長を引き受けたサー・アンドリュー・ウッド<sup>122</sup>（Sir Andrew Wood）（1515年没）、アンドリュー・バートン<sup>123</sup>（Andrew Barton）（1466年生-1511年没）、ロバート・バートン<sup>124</sup>（Robert Barton）（生没不詳）などはハイランダーであったことから知ることができる。

第3に、ジェームズ4世の先見性について見てみよう。ジェームズ4世は、当時のヨーロッパ情勢から海軍力の増強を感じ取り、21門の大砲を装備したマーガレット号に加え、戦艦グレート・マイケル号<sup>125</sup>（The Great Michael）を建造した。これは、3万ポンドの費用をかけ、重量が千トン、全長約70メートル、300門の大砲を持ち、1,000人の軍隊を移送することができた。1506年から4年間の年月をかけて建造したヨーロッパで最大級の軍艦であった。これによって、北の小国というスコットランドのイメージを大きく変えた。

第4に、文化面での治績からジェームズ4世の先見性の一端を確認する。ジェームズ4世は、上で述べ来たったように、優れた統治能力と並はずれた人間性を持っていた。彼は、果敢ではあったが、信仰心が厚くかつ深く、臣下を冷酷に処刑することはなく、その臣下の能力を最大限に生かす統治を行った。彼は、語学の天才と言われ、音楽、スポーツ、狩猟、金属細工にまで秀でた人物であった。彼は、前王ジェームズ3世によって開かれたルネッサンスの扉を開け、その中に入り、各部屋にスコットランド文化の花を咲かせ、スコットランドの初期ルネッサンスの完成をもたらし、前王が登用した文化人に活躍の場を与えた。文学で

<sup>122</sup> はじめリース（Leith）で商人として活躍していたが、ジェームズ3世の治世では、私掠船（privateer）として許可されていた。後にスコットランド王立海軍（national naval action）と関係を持ち、スコットランド海軍長官（Lord High Admiral of Scotland）になった。1489年までには、戦闘船としてThe Flower号とThe Yellow Cavel号の2船を保有していた。ダンバー（Dunbar）沖でイングランド船を数船拿捕していた。ジェームズ4世は、Andrew Woodを大型船（3,4本のマストをもち、大西洋を航海したグレート・マイケル号）のGreat Michael号の最初の船長にした。

<sup>123</sup> 私掠船としてスコットランド王室から認められ、スコットランド王立海軍長官になった。1511年、ジェームズ4世によって、2艘の船（Lionn号とJenny Pirwyn号）でコペンハーゲンに送られ、イングランド高地での戦闘でエドワード・ハウード（Edward Howard）（1476/77年生-1513年没）によって拿捕され、Andrew Bartonは殺害され、その2艘はイングランド海軍に移送された。

<sup>124</sup> ロバート・バートンとアンドリュー・バートンは兄弟で、商業船であり私掠船の船長であった。

<sup>125</sup> このスコットランド王立海軍（ジェームズ4世）によって1505年に注文され、1507年にAndrew Woodによって建造された。この大型船は、1513年、フロドゥンの戦いでジェームズ4世が戦死すると、フランスのルイ12世に売られた。

は、ロバート・ヘンリスンの作品「クレイセイドの遺言 (*Testament of Cresseid*)」, 詩人のウィリアム・ダンバー<sup>126</sup> (William Dunbar) (1460年生?-1520年没?) の作品「あざみとばら (*The Thrissil and the Rois*)」, ガーヴィン・ダグラス<sup>127</sup> (Gavin/Gawin Douglas) (1474年生-1522年没) や前王の時代から活躍していたブライド・ハリ (Blind Harry) (1440年生-1492年没) がよく知られている。

また、1495年には、スコットランド3番目の大学となるアバディーン (Aberdeen) にキングス・カレッジを創設した。海外にも知られる文学作品の花が咲いた時代は、スコットランド最初の印刷の開始された時期と重なり合う。アンドウロウ・マイラー<sup>128</sup> (Andrew Myllar) (1503年-1508年の間活躍) がウォルター・チェプマン (Walter Chepman) (1473年生-1538年没?) の協力を得て、エディンバラでジェイムズ4世からパテントを与えられ、礼拝に関するものや法律本や議会の決議書を印刷し、ブランド・ハリ (Blind Harry) の *The Wallace* やロバート・ヘンリスンとウィリアム・ダンバーの詩集の印刷がその始まりであった。

しかし、ジェイムズ4世は、知力もあり、優れた統治者であったが、彼の外交問題の処遇には疑問がのこる。第1に、ウォーベック (Warbeck) のヨーク公リチャード僭称問題であった。彼は、その対応には慎重さを欠いていた。外交面で、スコットランドは、フランスと同

<sup>126</sup> 東ローザンに生まれたスコットランドの詩人。彼の名前は、1477年、聖アンドリュースの文学部の名簿 (文学士) に、1497年にはその博士の中に見ることができる。聖アンドリュースあるいはエディンバラでフランシスコ会の命によってフランスに行き、ピカディー (Picardy) で数年送り、1501年に帰国した。

<sup>127</sup> 東ローザンのタンタロン城 (Tantallon Castle) で5代アンガス伯アーチボルド・ダグラスの3男として生まれた。1489年から1494年にかけて聖アンドリュースの学生で、その後、パリで教育を受けた、と思われる。1494年には、アバディーンシャ (Aberdeenshire) のモニーマスク (Monymusk) に居住し、後に、リントン (Lynton, 今日の東リントン East Linton) の教区牧師になり、東ローザンのハウチ (Hauch, 現在の Prentonkik) で修道院長になった。そして1501年にはエディンバラの聖ジャイル (St Giles) のコレジエイト教会 (Collegiate Church) の長に昇進した。フロドゥンの戦い (Battle of Flodden) でジェイムズ4世 (在位1488年-1513年) が戦死し、その後5代伯アンガスが死ぬと、Gavin の甥の6代アンガス伯アーチボルド・ダグラス (Archibald Douglas, 6<sup>th</sup> Earl of Angus) (1490年生-1557年没) がその後を後継した。彼は、ジェイムズ4世の未亡人マーガレット・チューダと結婚した。Garvin は、マーガレットの相談相手として活躍した。フロドゥンの戦い以降は、宮廷内のマーガレットを支持したイングランド派とアルバーニー公 (Duke of Albany) を支持していたフランス派への分裂に関わり、政治的領域で公務に従事した。1516年、ダンケルド (Dunkeld) の司教に昇進した。

Gavin の文学的な活躍は、1501年から1513年の間に限定されていた。彼の最も重要な作品は、1513年にフロドゥンの戦いの3週間ほど前に出された訳詩 *Eneados* (Virgil の *Aeneid* のスコットランド語訳) であった。彼の作品には、*The Palice of Honour* (1501年) がある。

<sup>128</sup> アンドウロウ・マイラーの生い立ちについては不明である。彼は、商人であり宮廷人であったウォルター・チェプマン (Walter Chepman) と提携し、スコットランドで初の印刷会社 (Southgait Press) を起こした。Walter がお金を出し、Andrew が専門的技術を提供した。Andrew は、フランスのルーアン (Rouen) で技術 (craft) を身につけた。この会社は、礼拝式用の作品、法律本、ならびに議会の議決書の印刷のためにジェイムズ4世からパテントが与えられていた。

盟を結び、イングランドとはノーサンバーランドを巡って対立していた。1493年に、イングランド王エドワード4世の次男ヨーク公リチャード<sup>129</sup>と自称したパーキン・ウォーベック(Perkin Warbeck) (1474年生-1499年没)を、エドワード4世の妹のブルゴーニュ公夫人マーガレットがヨーク公であると認めた。このことを受け、神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世(Maximilian I) (在位1493年-1519年)は、ウォーベックにヘンリー7世打倒の軍資金を与えた。ウォーベックは、ヘンリー7世打倒の軍を起し、イングランド南部に上陸し、ロンドン郊外でヘンリー軍と戦うが、大敗した。そのウォーベックは、スコットランドに敗走した。ジェームズ4世は、その僭称者ウォーベックをヨーク公と信じてか、あるいは、それとは知らないでか、彼をスターリング城で温かく迎えるだけでなく、彼をハントリー伯の娘キャサリン・ゴードンと結婚させたのであった。これは、外交問題に注意深さを欠いていた行為であり、イングランド王ヘンリー7世の神経を逆撫でする行為<sup>130</sup>であった。

スコットランド王のウォーベック問題への対応に苛立ったヘンリー7世は、その長女マーガレット(Margaret Tudor) (1489年生-1541年没)をジェームズ4世の王妃にするという強引な申し出をしてきた。ジェームズ4世は、1501年にその申し出を受け入れ、1502年にローマ法王を保証人としてスコットランドとイングランドの永久平和条約を結び、もし一方が海陸いずれかにおいて先に侵略した場合には、法皇が侵略者を破門するという条件を付し、マーガレット・テューダのスコットランドへの輿入れを決定した。ヘンリー7世は、表面的には、イングランドとスコットランドの友好や平和を唱えていたが、実際には、スコットランドとフランスの同盟関係を引き裂き、フランスを孤立させることを狙っていた<sup>131</sup>。ヨーロッパ中でフランスは孤立し、フランスを支持するのは、スコットランドのみとなった。

外交政策の失敗・不手際がジェームズ4世の国王としての寿命を短くした。孤立するフランスとの同盟関係の維持がその原因であった。ジェームズ4世がマーガレット・テューダ<sup>132</sup>

<sup>129</sup> エドワード4世が急死した後、王妃エリザベス・ウッドヴィル(Elizabeth Woodville) (1437年生-1492年没)との間に生まれた長男エドワードと次男ヨーク公リチャードがいた。2人はグロスター公リチャードによりロンドン塔に閉じこめられ、グロスター公がイングランド王リチャード3世と戴冠した1483年6月26日から3か月後には、エドワード5世(Edward V) (在位1483年4月10日-6月26日)とヨーク公リチャード(Richard of Shrewsbury) (1473年生-1483年没)の姿は見られなくなった。このように、ヨーク公リチャードの行方が不明であったので、パーキン・ウォーベックのような人物が現れても不思議ではなかった。

<sup>130</sup> 3年後、ウォーベックは、再びヘンリー7世に対し軍を起しイングランドに入り、コーンウォールでリチャード4世を宣言したが、ヘンリー7世に捕らえられ、処刑された。

<sup>131</sup> このころ、既にフランス国王シャルル8世(Chalres VIII) (在位1483年-1498年)が1494年にナポリを占領したことに対し、法皇、ドイツ皇帝、スペイン王、ヴェネチアは神聖同盟を結んでいた。その後、この同盟に神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世、イングランド王ヘンリー7世が加わった。

<sup>132</sup> 1503年に結婚したとき、マーガレットは14歳であった。2人の間に、3男2女が生まれるが、3男以外は全て1歳未満で死んだ。マーガレットは、ジェームズ4世が死んだ後、1514年に6代アンガス伯アーチ



## 第5節 イングランドの脅威とイングランド・フランスの狭間のジェームズ5世

ジェームズ4世の後を継いだのは3男<sup>134</sup>ジェームズであり、彼がジェームズ5世（James V）（在位1513年-1542年）として即位した。そのとき彼は1歳5か月であった。スコットランドの伝統となった摂政による統治が再開された。

摂政政治は、国政の不安の種であり、また有力貴族間の争いの温床でもあった。最初の摂政役には王母マーガレット（Magaret Tudor）が就いた。彼女は国政に全く不向きであったので、ジェームズ2世の孫で親英派であった初代アラン伯ジェームズ・ハミルトン<sup>135</sup>（James Hamilton, 1<sup>st</sup> Earl of Arran）（1475年生？-1529年没）や親仏派の3代ヒューム卿アレグザンダー・ヒューム（Alexander Home, 3<sup>rd</sup> Lord Home）（1516年没）やジェームズ・ビートン<sup>136</sup>（James Beaton, Archbishop of Saint Andrews）（1472年生-1539年没）が彼女の補佐役についた。摂政政治の不安定さは、摂政役の王母マーガレットが、親英派の6代アンガス伯アーチボルド・ダグラス（Archibald Douglas, 6<sup>th</sup> Earl of Angus）（1489年生？-1577年没）と再婚<sup>137</sup>したことによって顕在化した。数少ない有力貴族の中で親英派の6代アンガス伯と王の未亡人の再婚には、摂政役を補佐していた重臣が反発し、彼女からその摂政役を取り上げた。その代わりにフランスから呼び寄せた2代オルバニー公ジョン・ステュワート<sup>138</sup>

<sup>134</sup> ジェームズ4世と王妃マーガレット・テューダの間には、4男2女が生まれたが、3男以外はすべて夭折していたので、3男のジェームズが王位を継承した。

<sup>135</sup> 彼は、初代ハミルトン卿（James Hamilton, 1<sup>st</sup> Lord of Hamilton）（1415年生-1479年没）とスコットランド王ジェームズ2世の娘メアリー女王（スコットランド王ジェームズ3世の妹）との間の一人息子であった。初代アラン伯ジェームズ・ハミルトンは、ジェームズ4世と従兄弟であった。1489年、スコットランド王ジェームズ4世は、彼をラナークの州長官にし、1503年8月、スコットランド枢密院顧問にした。彼は、ジェームズ4世とマーガレット・テューダとの結婚の交渉をし、1503年8月3日に2人の結婚式に出席した。その同じ日に、彼の父である初代ハミルトン卿がアラン伯に叙任された。

ジェームズ4世は、1507年、初代ハミルトン伯をフランス王ルイ12世との外交大使として送ったが、彼は、スコットランドとフランスの古い同盟を解消させようとしていたヘンリー7世に捕らえられた。

<sup>136</sup> 彼は、デイヴィッド・ビートン（David Beaton, Archbishop of Saint Andrews）（1494年生-1546年没）のおじであった。彼は、1505年に大蔵大臣（Lord High Treasurer of Scotland）、1508年にギャロウェイの司教に選任され、1515年、大法官になった。1522年、聖アンドリュースの大司教になった。彼は、司教として、ヘンリー8世のスコットランドを支配下に入れようとする隠謀を阻止するために、その全勢力を投入した。彼は、パトリック・ハミルトン（Patrick Hamilton）（1504年生-1528年没）と異端者を聖アンドリュースにおいて火あぶりの刑に処した。

彼は、ジェームズ5世の絶大な信望を獲得していたが、オルバニー公ジョン・ステュワートの嫉妬のために国璽尚書の任を解かれた。

<sup>137</sup> ジェームズ4世の死後一年も経たない内に、1514年に6代アンガス伯アーチボルド・ダグラスと再婚し、1515年にハーボトゥル城で娘マーガレットを出産した。このマーガレットと4代レノックス伯マッシュ・ステュワートとの間に生まれたのがダーンリー卿ヘンリーであった。このダーンリー卿ヘンリーとスコットランドのメアリー女王の間に生まれるのがスコットランド王ジェームズ6世である。

<sup>138</sup> 彼は、初代オルバニー公アレグザンダー・ステュワート（Alexander Stewart, 1<sup>st</sup> Duke of Albany）（1454

(John Stewart, 2<sup>nd</sup> Duke of Albany) (1481/1484年生-1536年没)を摂政にし、その不安定さを凌ごうとした。

2代オルバニー公は、王母マーガレットにスコットランドからの退去<sup>139</sup>を命じた。2代オルバニー公は、この采配で摂政としての人気を博し、議会によって王国第二の人物として宣言され、王位継承第一位者に公認されていた。しかし、彼は、王母マーガレットの補佐役であった3代ヒューム卿アレクザンダー・ヒュームなどの不穏分子を処刑し、1517年にフランスに一時帰国し、それから4年間もスコットランドを留守にしたのであった。このことから、摂政オルバニー公のスコットランド現状に対する認識が浅かった<sup>140</sup>、と判断される。他方、2代オルバニー公は、スコットランドの摂政として、フランス王フランソワ1世<sup>141</sup> (François I) (在位1515年-1547年)との間で、1517年に「古い同盟」を再確認するルーアン条約(Treaty of Rouen)を結んだ。フランソワ1世は、依然として列強から孤立して、その2年前にミラノ<sup>142</sup> (Milano)を押さえ、ハプスブルグ家(The House of Habsburg)と神聖ローマ皇帝の

年生-1485年没)とアンヌ・ドゥ・ラ・トゥール (Anne de la Tour d'Auvergne) (1512年没)の間に生まれた。初代オルバニー公アレクザンダーは、ジェイムズ2世の次男として生まれ、ジェイムズ3世の弟であった。彼には、スコットランド王位の継承権があった。

<sup>139</sup> 彼女は、ノーサンバーランドのハーボットル城に移った。王母マーガレット追放の彼の決断は、深い政治判断によるものではなく、単に彼がスコットランドとイングランドの関係を深く理解していないことやフランス語しか話さないことによっていた。

<sup>140</sup> 2代オルバニー公がスコットランドを留守にしていた間に、6代アンガス伯ダグラス(赤いダグラス)の一族と初代アラン伯ハミルトンの一族によるエディンバラのローヤル・マイルでの市街戦が、1520年4月30日に、起こった。この争いは、「コウズウェイの掃除(Cleanse the Causeway)」と呼ばれ、親英派ダグラス一族が親仏派のハミルトン一族に圧勝して終わった。この争いで、ハミルトン一族の指導者は、ハミルトン卿の庶子(アラン伯と異母兄弟)であったサー・パトリック・ハミルトン(Sir Patrick Hamilton) (1520年没)と、ハミルトン伯の庶子であったサー・ジェイムズ・ハミルトン(Sir James Hamilton) (1495年生-1540年没)であった。アラン伯は、親英派であったために、アラン伯の勝利は、スコットランドを親英的方向動かし、と思われる。

<sup>141</sup> フランソワ1世は幼少のころ人文学者の教育を受け、即位後、レオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci) (1452年生-1519年没)やロッソ・フィオレンティーノ(Rosso Fiorentino) (1495年生-1540年没)らを保護した。またコレージュ・ド・フランスを設立し、ヘブライ語、古代ギリシャ語、数学の研究を促進させた。

ルイ12世に世継ぎがいなかったため、その大甥のフランソワが王位を後継し、フランソワ1世として王位に就いた。フランソワが王太子のころルイ12世と王妃アンヌとの間に生まれた又従姉妹のクロードと結婚して、ブルターニュ公となり、1532年にブルターニュ公国をフランスに併合した。

<sup>142</sup> 1500年にフランス王ルイ12世(Lois XII) (在位1498年-1515年)は、スフォルツァ家(The House of Sforza)のイル・モーロを幽閉し、ミラノ公国を征服した。だが、フランスのイタリア介入を嫌うローマ教皇は神聖同盟を形成し、1513年にフランスはミラノから追放され、スフォルツァ家が復帰した。1515年にフランソワ1世(François I) (在位1515年-1547年)はミラノ(Milano)を侵攻し、スフォルツァ家を追放し、ミラノを支配した。

帝位を争う<sup>143</sup> 気概を抱いていたので、スコットランドとの同盟を再確認する必要があった。彼は、ハプスブルグ家と手を握っていたヘンリー 8 世の牽制を狙っていたいたのかも知れない。2代オルバニー公の狙いはスコットランドのためではなく、彼自身を強国のフランス王国に取り入れるためであった。

スコットランドにおいて6代アンガス伯がヘンリー 8 世と陰謀を企む状況になったので、1521年に2代オルバニー公は急いでスコットランドに戻った。6代アンガス伯の陰謀は失敗したが、王母マーガレットは、兄のヘンリー 8 世と組むそのアンガス伯と対立し、ハーボトゥル城 (Harbottle Castle) を出て、オルバニー公の側に走った。フランスとの間で確認された同盟を具体化するために、1522年と1523年の2回に亘って、フランス部隊の応援を得たスコットランド軍は、イングランド領を侵攻した。しかし、スコットランド軍が、国境にさしかかると、その進軍は止められた。というのは、その戦いがスコットランドのためではなく、フランスのためである、と連隊が感じたからであった。事実、オルバニー公は、1524年にフランス軍を帰し、彼自身もフランスに行ったまま、再びスコットランドには戻らなかった。

2代オルバニー公は、スコットランドを去ったが、スコットランドの摂政政治の不安定さは、なおも、続いた。その後、親仏派であった初代アラン伯ジェイムズ・ハミルトン (James Hamilton, 1<sup>st</sup> Earl of Arran) (1457年生-1529年没) が、王母マーガレットを取り込み、ジェイムズ 5 世をスターリング城からエディンバラ城に移し、政治的な主導権をとった。1525年に、6代アンガス伯アーチボルド・ダグラス (Archibald Douglas, 6<sup>th</sup> Earl of Angus) (1490年生-1557年没) は、アラン伯と同調して、ヘンリー 8 世の了解の下、ジェイムズ 5 世を取り込みフォークランド宮殿に軟禁し、ダグラス派による政権を樹立した<sup>144</sup>。

ジェイムズ 5 世も成長し、親政に乗り出し、王権の維持・確立に躍起になった。1528年に、ジェイムズ 5 世は、6代アンガス伯の手を逃れて、スターリング城に落ち着いた。最初にジェイムズ 5 世の内政面から彼の王としての手腕を見てみよう。スターリング城で直ちに親政に

<sup>143</sup> フランソワ 1 世は、皇帝マクシミリアン 1 世の死後、1519年にスペイン王カルロス 1 世 (Carlos I) (在位 1516年-1556年) と神聖ローマ帝国の帝位を争い、惨敗する。カルロス 1 世は神聖ローマ帝国の皇帝カール 5 世 (Karl V) (在位 1519年-1556年) として帝位に就いた。これによって、フランスはハプスブルク家スペインとハプスブルク家ドイツに挿まれた。フランソワ 1 世とカール 5 世の覇権争いは延々と続いた。フランソワ 1 世はハプスブルク家の包囲網を避けるための活路をイタリア侵攻に見いだしていた。フランソワ 1 世は、1521年から1544年にかけて、イタリアを巡って皇帝カール 5 世と争った。これは、第 1 次イタリア戦争 (1521年-1526年)、第 2 次イタリア戦争 (1526年-1529年)、第 3 次イタリア戦争 (1536年-1539年)、そして第 4 次イタリア戦争 (1542年-1544年) として知られている。

<sup>144</sup> このことによってアンガス伯とマーガレット・テューダの不仲は決定的になり、1527年に、マーガレット・テューダはアンガス伯と離婚し、翌年、初代メスヴァン卿ヘンリー・ステュワート (Henry Stewart, 1<sup>st</sup> Lord of Methven) (1495年生-1552年没) と再婚した。

乗り出し、議会を招集し、6代アングス伯一族の処刑と伯領の没収<sup>145</sup>を議決し、6代アングス伯を追い出した後、イングランドと休戦条約を結び、南の安泰を確保し、西部あるいは北部の地方氏族との関係強化の政策を推進した。父王ジェイムズ4世と同様に全国を駆けめぐり、身分の低いもの貧しいものに気を配り、国民からの人気<sup>146</sup>を博した。この全国を駆けめぐる点では父王ジェイムズ4世の気質を継いでいたが、前王の寛容さは継いではいなかった。彼は、他の中世の国王と同じように、強権を発動した。たとえば、国王に反乱を起こしていたアームストロング一族 (Clan Armstrong) とカーレンリグ (Carlenrig) で会合をもつために安全な交通証書を発行したが、ジェイムズ5世は、イングランドとの境界の部族を鎮める策略をもっていた。ジェイムズ5世は、ジョン・アームストラング (John Armstrong) (生没不詳) とその連隊を謀反の故に捕らえ、ジョンを首吊りに処した。また4代アーガイル伯コリン・キャンベル<sup>147</sup> (Colin Campbell, 4<sup>th</sup> Earl of Argyll) (1507年生?-1558年没) を嫌い、彼の死後、同家世襲のシェリフの職位を取り上げた。

ジェイムズ5世は、その外交政策と宗教政策では、カソリックを選び、フランスとの同盟を強化した。彼は、フランソワ1世の娘マドレーヌ・ドゥ・ヴァロア (Marie de Valois) (1520

<sup>145</sup> 6代アングス伯は、1529年イングランドに去り、ジェイムズ5世の治世の間、スコットランドには戻らなかった。

<sup>146</sup> その人気を利用して、ジェイムズ5世は、父王と同様に、全国視察では地方のおぼこ娘に次々と手を出したが、彼の女性好みは田舎の貧しい娘には限らなかった。アースキン家 (Erskin House) のマーガレット (Margaret Erskine) (ロッホリーヴンのロバート・ダグラスの妻)、エルフィンスタン家 (Elphinstone House)、ビートン家 (Beaton House) の娘たちもジェイムズ5世の後宮に加えられた。

ジェイムズ5世には9人の非嫡出子がいた。その男子の多くは、修道士などの聖職者になり、独身生活を誓った。3代レノックス伯ジョン・ステュワートの娘 (エリザベス・ステュワート) との間にアダム・ステュワート (Adam Stewart) (1606年没)、エリザベス・ベスヌー (Ekizabeth Bethune) の娘との間にジャン・ステュワート (Jean Stewart) (1588年没)、エリザベス・ショウ (Elizabeth Shaw) との間にジェイムズ・ステュワート (James Stewart) (1529年生-1559年没)、ユーフィンヌー・エルフィンスタンとの間に、ホーリールド宮修道院次長になった初代オークニ伯ロバート・ステュワート (Robert Stewart, 1<sup>st</sup> Earl of Orkney) (1533年生-1593年没)、エリザベス・カーミハエル (Elizabeth Carmicheal) との間に初代ダーンリー卿ジョン・ステュワート (John Stewart, 1<sup>st</sup> Lord of Darnley) (1531年生-1563年没)、そして、マーガレット・アースキンとの間には、幼くして修道院次長を経験していた初代マリ伯ジェイムズ・ステュワート (James Stewart, 1<sup>st</sup> Earl of Moray) (1531年生-1570年没) などの庶子が生まれた。このマリ伯は、ジェイムズ6世の摂政になるなどステュワート王家では中心的な役割を果たした。

<sup>147</sup> 彼は、ハイランド地域での反乱に対して軍事行動をとり、ジェイムズ5世の宮廷に加わり、国境地域の監督の長官になり、さらに1528年に首席裁判官 (Lord Justice General) になった3代キャンベル伯アーチボルド・キャンベル (Colin Campbell, 3<sup>rd</sup> Earl of Argyll) (1488年生-1529年没) と、3代ハントレー伯アレグザンダー・ゴードン (Alexander Gordon, 3<sup>rd</sup> Earl of Huntley) (1524年没) の長女ジャン・ゴードン (生没不詳) との間に生まれた長男であった。彼は、ジェイムズ5世とその枢密院からスコットランドの島々での暴動について嫌疑を懸けられ、国王の前に引き出され、投獄された。しかし、ジェイムズ5世が死んだ後、解放され、元の職に戻った。

年生-1537年没）と結婚した<sup>148</sup>。彼が多くの妃候補者<sup>149</sup>の中からフランソワ1世の娘を選んだのは、第1に、フランスとの「古い同盟」、第2に、宗教問題であった。ジェームズ5世は、カソリック国であったフランスを選んだ、と推測される。大陸では、ルターに端を発する新しい信仰が広まりつつあった。スコットランドは、新教によって、大陸ほど強い影響を受けてはいなかったが、ヘンリー8世のイングランド発の新教の影響を受ける恐れがあった<sup>150</sup>。

ジェームズ5世の命を奪ったのは、ジェームズ4世と同様に、外交政策であった。フランスとの「古い同盟」の破棄を執拗に迫ったヘンリー8世は、スコットランドに同盟関係を申し入れた<sup>151</sup>。その申し入れはフランスとの同盟の破棄を強要するものであるという重臣の忠告を聞き入れ、ジェームズ5世は、ヘンリー8世との会談を拒否した。それに激怒したヘン

<sup>148</sup> 2人は1537年にパリのノートルダム聖堂で挙式した。しかし、半年後にマドレーヌはホーリールドハウスで病没した。1538年にジェームズ5世は、フランソワ1世の重臣であったギーズ公クロード・ドゥ・ロレーヌ（Claude de Lorraine, duc de Guise）とアンカネット・ドゥ・ブルボン（Antoinette de Bourbon）（1493年生-1583年没）の娘のマリー・ドゥ・ロレーヌ（Marie de Lorraine）（1515年生-1560年没）と再婚した。

<sup>149</sup> イングランド王ヘンリー8世は、最初の王妃キャサリン・オブ・アラゴン（Catherine of Aragon）（1485年生-1536年没）との間の娘メアリーを押しつけてきた。神聖ローマ皇帝カール5世は、妹のカタリナ・デ・オーストリア（Catalina de Austria）（1507年生-1578年没）（後にポルトガル王ジョアン3世（João III）（在位1521年-1557年）の王妃）を押しつけ、法皇クレメンス7世は、姪のカテリーナ・デ・メディチ（Caterina di Lorenzo de' Medici）（1519年生-1589年没）（後にフランス王アンリ2世妃）を持ちかけた。

<sup>150</sup> ヘンリー8世は、王妃キャサリン・オブ・アラゴンと離婚し、アン・ブーリン（Anne Boleyn）（1501年生-1536年没）との再婚を目論むが、ローマ法王に認められなかった。ヘンリー8世は、兄アーサーの未亡人であったキャサリン・アンゴラと婚約した。当時、兄嫁と結婚することは近親相姦と考えられていたので、法皇ユリウス2世に願ひ出て、1504年に特免状の発布を受け、1505年に正式に婚約した。1509年にヘンリー8世とキャサリンは結婚した。ヘンリー18歳でキャサリンが24歳であった。2人の間に6人の女子は産まれるが、後にメアリー1世となる子だけが生長した。しかし、世継ぎの男子は生まれなかった。1533年に、ヘンリー8世はキャサリン・アンゴラと離婚し、アン・ブーリンと再婚した。この再婚には反対者がいた。法皇の特免状を介した結婚で、その上キャサリン・アンゴラは神聖ローマ帝国の皇帝カール5世の叔母であったので、カール5世は法皇クレメンス7世（Clemens VII）（在位1523年-1534年）に圧力をかけ、結婚を阻止しようとした。その交渉役に大法官トマス・ウールジ（Thomas Wolsey）（1471年生-1530年没）をヘンリー8世は当てたが、彼はその交渉に困難を極めた。最終的には、カンタベリー大司教のトマス・クラインマー（Thomas Cranmer）（1489年生-1556年没）に指図して、キャサリンとの結婚が無効であったとの裁定を出させ、キャサリン・アンゴラの侍女であったアン・ブーリンとの結婚を成立させた。ヘンリー8世は、カンタベリー大司教トマス・クラインマーに結婚の無効のお墨付きを出させ、新しい宗旨こそ出していないが、ルターと同様にローマに楯突くものであった。ジェームズ5世は、自身がカソリックを強く信仰していたことから、ヘンリー8世のローマとの断絶が新教に至ると判断し、フランスから王妃を迎えたと思われる。

<sup>151</sup> ジェームズ5世と王妃マリー・ドゥ・ロレーヌとの間に生まれた長男ジェームズと次男アーサーが同時に死ぬという不幸に見舞われていたとき、ヘンリー8世は、その悲しみにつけ込み、ローマから断絶し、彼の孤立の道連れにスコットランドも引きずり込もうとして、ヨークでの会談を持ち出し、ジェームズ5世からの返事を待たずに、ヨークに向かった。

リー8世は、フロドゥン (Flodden) の戦いの勝者トマス・ハワードの息子ノーフォーク公トマス・ハワード (Thomas Howard, 3<sup>rd</sup> Duke of Norfolk) (1473年生-1554年没) に出撃を命じ、国境のロクスバラ (Roxburgh), ケルソー (Kelso) を焼き払らわせた。これに対し、ジェイムズ5世は、軍を召集し南進した。その軍が、エディンバラの南東のファラ・ムア (Fala Moor) に差し掛かると、兵隊は南進を拒否した。そのことにジェイムズ5世は、大変に落胆し、陰鬱な空気の中で、その年を越した。その翌年の1541年には、聖アンドリュース大司教のデイヴィッド・ビートン (David Beaton, Archbishop of Saint Andrews) (1494年生-1546年没) らの高僧が、軍資金を集め、徴兵の他に傭兵を集め、軍政を整えた。そして1542年11月に、ジェイムズ5世は、その軍勢を先頭に南進し、ダムフリースシャーのロッホメイバン (Lochmaben) に到達した。ジェイムズ5世は、砦に残り、信頼できる反英・反プロテスタントの武将オリヴァー・シンクレア (Oliver Sinclair) (1560年没?) が総指揮する部隊に国境越えを命じた。しかし、シンクレアの部隊は、イングランド軍の罠にかかり、沼沢地のソルウェイ・モス (Solway Moss) に引きずり込まれ、各隊の指揮官は戦わずして投降する有様で、シンクレア自身もイングランド軍の捕虜になった。

ジェイムズ5世は、ロッホメイバンからフォークランド宮殿に帰り、あまりの悲痛のためにそのまま寝ついた。その一週間後に、ジェイムズ5世は、王妃マリー・ドゥ・ロレーヌが女の子を産んだとの知らせを受け取った。それから6日後の12月14日にその30年の生涯を閉じた<sup>152</sup>。

### 第3章 宗教改革とメアリー女王

#### 第1節 メアリー女王の誕生と摂政政治

ジェイムズ5世の死後、直ちに、生後6日のメアリー (Mary Queen) (在位1542年-1567年) がスコットランド国王として即位<sup>153</sup>した。スコットランド王国は、アルピン家の最後のマーガレット女王と同じように、またもや嬰兒女王による船出となった。メアリー女王が生長するまで、彼女の摂政職が必要であった。最初に、ジェイムズ2世の曾孫で、プロテスタ

<sup>152</sup> ジェイムズ5世の治績の第一は、民事の中央裁判所である College of Justice をエディンバラに設けたことである。これは、現在のスコットランドの最高民事裁判所である court of session に繋がっている。その第二は、王国の財政を巧く遣り繰りして、教会の収入を王国の特別プロジェクトに使い、ホリーロードハウス、リンリスゴウ宮殿、フォークランド宮殿の改築にあて、当時のルネッサンス建築の中でも優れたものをであった。スターリング・ヘッドと呼ばれる木彫の天井飾りは、現存するスコットランド・ルネッサンス調の最高の木彫である。これは、ジェイムズ5世の文化面での治績である。

<sup>153</sup> メアリーの戴冠式は、1543年9月9日に執り行われた。即位と戴冠が異なるのは、王母マリー・ドゥ・ロレーヌとアラン伯の間の確執があつことによる。王母マリー・ドゥ・ロレーヌと2代アラン伯の確執は、以下で見るように、王女メアリーへのイングランドとフランスからの結婚申し込みにも現れていた。

ントで、親英派であった2代アラン伯ジェイムズ・ハミルトン<sup>154</sup>（James Hamilton, Duc de Châtellerauld, 2<sup>nd</sup> Earl of Arran）（1516年生？-1575年没）が摂政に就いた<sup>155</sup>。メアリー女王は、スコットランド・ステュアート朝において、最後の女王であった。

スコットランドでは、ヘンリー8世（Henry VIII）（在位1509年-1547年）の執拗なフランスとスコットランドとの分断政策に悩まされた。ジェイムズ4世の時にエドワード4世が採った政策と同じように、彼は、一人息子のエドワード王子<sup>156</sup>（後のエドワード6世）とメアリー女王の結婚を通じて、イングランドとスコットランドの一体化政策を推進し、1543年6月にグリニッジ条約でエドワード王とメアリーの結婚を約束したが、しかし、枢密卿デイヴィッド・ビートンが実権を握ると、スコットランドは、カソリックを選び、フランスとの同盟を優先させる政策を強め、反イングランドの姿勢を採った。王母マリー・ドゥ・ロレーヌは、イングランド侵攻の危険を感じて、1543年9月、メアリー女王をリンリスゴウ宮殿（Linlithgow Palace）からスターリング城に移し、そこで戴冠した。このようにメアリー女王の戴冠が遅れたのは、イングランドとフランスの外交政策にスコットランドが振り回されたためであった。

<sup>154</sup> 1542年、ジェイムズ5世が死亡したとき、2代アラン伯ジェイムズ・ハミルトンが、メアリー女王に継ぐ第2の王位継承者であったので、メアリー女王の摂政になった。2代アラン伯は、はじめプロテスタントで親英派であったが、その後、カソリックで親仏派になり、メアリーとフランスのフランソワ王子との結婚に同意した。1548年、その働きによって、2代アラン伯は、フランスの公爵位（Duc de Châtellerauld）を授けられた。1554年、アラン伯は、摂政をマリー・ドゥ・ロレーヌに譲った。彼は、メアリー女王が幼くして死んだ場合に王位を継承するという条件で摂政を譲った。しかし、メアリー女王がフランスの王子と結婚したことによって、スコットランドの王位継承は、フランスに移っていた。1559年、再び、2代アラン伯ハミルトンは、プロテスタントに移り、マリー・ドゥ・ロレーヌの摂政に反対したため、フランスの公爵位を失った。1560年、フランソワ2世が死んだとき、2代アラン伯ハミルトンは、彼の息子ジェイムズと未亡人メアリー女王と結婚させようとした。

<sup>155</sup> 2代アラン伯は、1542年から1554年まで摂政職にあった。その後、1554年から1560年までは王母マリー・ドゥ・ロレーヌが摂政職にあった。その後、フランスから戻ったメアリー女王が親政を執った。

<sup>156</sup> ジェイン・シーモア（Jean Seymour）（1508年生-1537年没）は、ヘンリー8世の3番目の王妃であった。ヘンリー8世は、アン・ブーリン王妃が後継ぎ男子を流産した後、アンもキャサリンと同様に結婚無効を宣言され、さらにアンが宮廷関係者と密通したとして逮捕され、ロンドン塔に投獄され、反逆罪で断頭の刑に処せられた。アン王妃の処刑の翌日の1536年3月20日に、ヘンリー8世とキャサリン・アングラの侍女であったジェイン・シーモアが結婚したが、2人は結婚式を挙げなかった。1537年10月にジェイン・シーモアは待望の世継ぎの男子（エドワードと命名）をハンプトン・コート宮殿にて生んだ。しかし、産褥熱のためジェイン・シーモアは産後10日で他界した。

ヘンリー8世は、1540年に第4番目の妃アン・オブ・クレーヴィス（Anne of Cleves）（1515年生-1557年没）と結婚し、1540年7月に5番目の妃キャサリン・ハワード（Catherine Howard）（1521年生-1542年没）と結婚した。ヘンリー8世は、1542年2月、不貞をはたらいたキャサリン・ハワード王妃をロンドン塔で処刑し、1543年7月に第6の妃キャサリン・パー（Catherine Parr）（1512年生-1548年没）と結婚した。

王母マリー・ドゥ・ロレーヌ<sup>157</sup> (Marrie de Lorraine) (1515年生-1560年没) は親仏政策を推進した。1544年5月、初代ハートフォード伯エドワード・シーモア (Edward Seymour, 1<sup>st</sup> Earl of Hertford) (1506年生-1552年没) (後にエドワード6世によって、1547年に初代サマーセット公に叙爵) が、スコットランドとメアリー女王を支配するためにファイフ港に接近した<sup>158</sup>。王母マリー・ロレーヌは、メアリー女王をスターリング城の秘密の部屋に匿った。さらに、ヘンリー8世が他界し、エドワード6世 (Edward VI) (在位1547年-1553年) が即位すると、1547年9月に国王の伯父かつ初代サマーセット公エドワード・シーモアが、再び攻撃を仕掛けてきた。エディンバラ近くのピンキー・クロッホ (Pinkie Cleugh) の戦いでアラン伯は敗北した。メアリー女王の身の安全に恐怖を感じた王母マリー・ドゥ・ロレーヌは、王女メアリーをインチマホーム修道院に送り、フランスに助けを求めた。1548年、イングランドが引き返すことを知り、メアリー女王をハンプルトン宮殿 (Hambleton Palace) に移動させた。フランスからの援軍が到着し、そして1548年7月に、フランスとの結婚条約がハディントンの近くの女子修道院で調印された。

## 第2節 フランス王妃になったメアリー女王

5歳のメアリー女王はフランスに向かった。フランス国王によって送られたフランス艦隊は、1548年8月、5歳の王女メアリー、付き人4人、4人のメアリー<sup>159</sup> と共にダンバートン城 (Dumbarton Castle) からフランスに向かい、そこに無事に着いた。この渡仏は、将来メアリー女王がフランスの皇太子フランソワと結婚するためのものであった。彼女は、アンリ2世<sup>160</sup> (Henry II) (在位1547年-1559年) の宮廷に温かく迎えられた<sup>161</sup>。1558年、15歳の

<sup>157</sup> 彼女は、フランソワ1世の重臣ギーズ公クロード・ドゥ・ロレーヌ (Claude de Lorraine, Duc de Guise) (1496年生-1550年没) とアントワネット・ドゥ・ブルボン (Antoinette de Bourbon) (1493年生-1583年没) の娘であった。マリー・ロレーヌは、ジェームズ5世の二番目の王妃であったが、フランスから再び王妃を迎えたことはヘンリー8世にとっては不満やせなかつた。

<sup>158</sup> ヘンリー8世は、1544年ジェインの兄ハワード伯エドワード・シーモアに出動を命じ、武力を背景に結婚を迫った。これは、手荒な結婚申し込み、あるいは、ハワードの侵入と知られている。この時には、王女メアリーは拉致されることもなく、その難を避けることができた。

<sup>159</sup> メアリー女王と同じ年の4人のメアリーは、スコットランド貴族であるピートン、シートン、フレミング、リビングストンの貴族の娘であった。シートンは終生メアリー女王に仕え、女王の処刑にも立ち会った。

<sup>160</sup> アンリ2世は、フランソワ1世と王妃クロード・ド・フランスの次男として生まれた。兄フランソワが急死したため、王太子 (ドーファン) の称号を得、1547年に王位に就いた。彼の妹マドレーヌ・ドゥ・ヴァロアはスコットランド王ジェームズ5世の王妃となった。また、1559年6月30日、アンリ2世の妹マグリットとサヴォイア公、娘エリザベートとスペイン王フェリペ2世の結婚祝宴の一環として、モンゴメリ伯との騎乗槍試合で目を突き抜かれる槍傷をうけた。その傷が原因で7月10日に40歳で急逝した。

<sup>161</sup> メアリーは、フランス宮廷では、母方の祖母のギーズ公アントワネットに預けられ、散文、外国語、作詩、ダンス、乗馬、音楽、刺繍などの最高の教育を受けた。彼女は、スコットランドでは望むことのできない

王女メアリーは、1つ年下の皇太子フランソワとパリのノートルダム寺院で結婚式を挙げた。アンリ2世の死後、皇太子フランソワがフランソワ2世(François II) (在位1559年-1560年)として即位し、メアリー女王は、16歳でフランス王妃になった<sup>162</sup>。

イングランドでは、1558年11月にメアリー1世<sup>163</sup> (Mary I) (在位1553年-1558年)が他界し、ヘンリー8世の2番目の王妃アン・ブーリンの娘であるエリザベス (Elizabeth I) (在位1558年-1603年)が王位<sup>164</sup>に就いた。この王位継承に対しフランス王アンリ2世は、庶子であるエリザベスの王位継承には疑義があるとして、息子フランソワの嫁メアリー<sup>165</sup>に正当なイングランド王位継承権があるとした。これに対処するために、イングランド議会は、エリザベスを嫡出子と議決した。

1559年のカトー・カンブレジ (Cateau and Cambresis) 講和条約<sup>166</sup>で、フランスがイタリアへの権利を放棄し、イタリア戦争<sup>167</sup>は終結した。この条約には、ブローニュ (Boulogne)

貴婦人によって教育された。

<sup>162</sup> 1560年12月にフランソワ2世は、顔面の悪性の腫瘍から中耳炎を起こし、16歳の若さで他界した。メアリーは、18歳で未亡人になった。2人の間には子供はいなく、彼の死は、メアリーを単なるスコットランド女王という地位に戻した。彼女は、1561年8月に、カレーを発って、エディンバラ北西のリースに上陸した。13年振りに故国の地を踏んだ。

<sup>163</sup> イングランド王メアリー1世は、熱烈なカソリック信奉者であり、法皇至上権の復活を唱え、イングランドは統一キリスト教に復帰した、と宣言した。彼女は、従兄弟のスペイン王カルロス1世の長男フェリッペを結婚相手に選んだ。彼女は、「ブラッディー女王」と呼ばれ、300人のプロテスタントを血祭りに上げた。1555年2月4日にケンブリッジ大学ジョン・ロジャー (John Rogers) (1500年生-1555年没)を焚刑、同年2月9日に、オックスフォード大学のジョン・フーパー (John Hooper 1495/1500年生?-1555年没)を焚刑、同年10月、ロンドン司教ニコラス・リドゥリー (Nicholas Ridley 1500年生-1555年没)、ウスター司教ヒュー・ラティマー (Hugh Latimer) (1487年生-1555年没)を焚刑、1556年にカンタベリー大司教のトマス・克蘭マー (Thomas Cranmer) (1489年生-1556年没)を焚刑で処罰した。

<sup>164</sup> メアリー1世とスペイン王フェリッペ2世 (Felipe II) (在位1556年-1598年)は、エリザベスが王位を継承することに同意した。もし反対し拒否すれば、スコットランド女王メアリーに王位が移り、フランス皇太子フランソワと結婚していたので、やがてフランス王妃になるメアリーがイングランド王位を継承する。そのことはスペインとイングランドの同盟を失うこととなり、スペインはフランス、イングランド、スコットランドを敵に回すことになる。エリザベスが継承するとスペインの孤立を回避できた。

<sup>165</sup> メアリー女王の祖母はテューダ・マーガレットであり、マーガレットはヘンリー8世の妹であった。そのためメアリー女王にはテューダ王家の継承権があった。それに対し、エリザベスはヘンリー8世によって結婚無効が宣言されたアン・ブーリンの子であったため、後にイングランド王メアリー1世になるメアリーと同様に庶子と扱われていた。当時、庶子には王位継承権はなかった。

<sup>166</sup> 1559年に締結されたこの条約では、フランスのイタリアに対する権利放棄、スペインのナポリ統治の確定、神聖ローマ帝国によるミラノ公国の領有が締結された。

<sup>167</sup> この戦争では、ハプスブルク家 (神聖ローマ帝国・スペイン) とヴァロワ家 (フランス) の両家によるイタリアの支配権が争われた。1519年に、神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世の死後、スペイン王カルロス1世とフランス王フランソワ1世が皇帝選挙を争い、カルロス1世が神聖ローマ皇帝カール5世として即位した。彼は、また、スペイン王も兼ねていたため、フランスは、ハプスブルク家に包囲されることを避けるためには、戦略上、イタリアを占領・確保する必要があった。1521年から1526年までが第1次イタ

やカレー (Curry) などのイングランドからの失地回復も含まれていた。フランスの孤立した状態を脱却する機会をアンリ 2 世は狙っていたと思われる。その活路の一つがイングランド王位の継承であった。この講和条約締結後、多分、アンリ 2 世の戦略の一環として、駐イングランド大使を招き、大使達にイングランド王位継承権者を証す紋章を刻んだ金銀の食器でのもてなし行為をメアリー女王に採らしめた。これは、多分、アンリ 2 世の入れ知恵であったであろう、と思われる。しかし、アンリ 2 世は、この条約の締結後、騎乗横槍試合で目を突き抜かれ、それが原因で死亡した。

スコットランドでも宗教問題は深刻になってきた。スコットランドでも、ヨーロッパ大陸同様に、プロテスタントとカソリックの闘いと対立が深まった。スコットランドは、この問題でも、イングランド国王・新教とフランス国王・カソリックの対立に振り回された。1560 年には、スコットランドでは、ジョン・ノックス<sup>168</sup> (John Knox) (1510 年生-1572 年没) などのプロテスタント信奉者による教会破壊、聖像の打ち壊し、掠奪などの暴動がおこり内乱状態になった。プロテスタント側はイングランドに加勢を求め、旧守派はフランスに援軍を求めたので、スコットランドの宗教問題にイングランドとフランスが介入し、イングランド

---

リア戦争で、教皇レオ 10 世は皇帝カール 5 世と結託し、フランス支配下のミラノを奪還した。パヴィアの戦いでフランス王フランソワ 1 世が捕虜になり、マドリッドに幽閉された。1526 年に、フランソワ 1 世とカール 5 世がマドリッド条約 (Treaty of Madrid) を結び、フランソワ 1 世は釈放された (これまでが第 1 次イタリア戦争)。釈放後、直ちに、フランソワ 1 世は、反旗を翻し、教皇クレメンス 7 世、ミラノ (Milano)、ヴェネツィア (Comune di Venezia)、イングランド共にコニャック同盟を形成した。この報復として神聖ローマ皇帝軍は、ローマを攻め、教皇庁を屈服させ、フィレンツェからメディチ家を追放した。1529 年にイタリア諸国は、ボローニャ (Bologna) に集まり、皇帝カール 5 世に服することを決定し、フランスはイタリアを放棄した。1530 年にフィレンツェがカール 5 世皇帝軍に包囲され、凄惨な戦闘の末にフランスは敗北した。メディチ家がフィレンツェに戻り、ハウスブルク家と結びフィレンツェ支配が確立した (ここまでが第 2 次イタリア戦争)。イタリアにおけるハプスブルク家の優位が確立した。フランソワ 1 世は、カール 5 世に対抗するために、ドイツのルター派プロテスタント諸侯を支援し、異教徒オスマン帝国スレイマン 1 世と同盟を結んだ。その後第 3、4 次イタリア戦争が起こるが、神聖ローマ帝国の優位は変わらず、この戦争は 1559 年のカトー・カンブレジ条約で終結した。

<sup>168</sup> ジョン・ノックス (John Knox) (1513 年生-1572 年没) は、ハディングダンに生まれ、聖アンドリュース大学を卒業した。彼が公証人であったところに、カルヴィニズムの影響を受けて帰国したジョージ・ウィッシュアート (George Wishart) (1513 年生-1546 年没) に出会い、彼は、そのウィッシュアートの教えを受け継いだ。1546 年にウィッシュアートが焚刑に処されると、ジョン・ノックスは、改革派と一緒に大司教デイヴィッド・ビートンを血祭りにあげ、聖アンドリュース城に籠城したが、1547 年 7 月、母王メアリー・ドゥ・ロレーヌが求めたフランス軍の援軍に逮捕され、2 年間、ガレー船の漕ぎ手として鎖に繋がれる苦役を経験した。

そこから釈放された後、ジョン・ノックスは、スコットランドには戻らず、プロテスタントが容認されていたイングランドに行き、エドワード 6 世の宮廷牧師を勤めたが、イングランド王メアリー 1 世の反プロテスタント政策の結果、ヨーロッパに亡命した。亡命中にカルヴィンに会い親交を深め、彼は、愚像崇拜に抵抗する信仰的行為に行き着いた。

軍が、援軍としてのフランス海軍を撃破し、エディンバラ (Edinburgh) 条約<sup>169</sup> が締結され、イングランドとフランスを巻き込んだ反乱は終結した。この条約には、フランスのスコットランドへの軍事介入を禁止する条項と、エリザベス女王の強い要求で盛り込まれた、メアリー女王がイングランド王位継承権を示す紋章の使用を禁止する条項が含まれていた。

### 第3節 帰国したメアリー女王とジョン・ノックス

1560年12月に、フランソワ2世が顔面の悪性の腫瘍から中耳炎を起こし、16歳の若さで他界した後に、メアリー女王は、13年振りに母国スコットランドの土を踏んだ。スコットランドでは、既に、プロテスタント<sup>170</sup>が幅を利かせ、親英派が多く、メアリー女王を歓呼の声で迎え入れる雰囲気にはなかった。メアリー女王がホリールードハウス宮殿(The Holyroodhouse Palace)に落ち着いたとき、メアリー女王は、その雰囲気に馴染めなく、違和感を覚えていた。フランスでは耳にしなかった異様な歌声はプロテスタント達によるものであった。その雰囲気は、カソリックのメアリーにとって異教のただ中にいる、と感じられたことであろう。しかし、エディンバラ城では、メアリーは、カソリック方式の礼拝を押し通し、彼女に改宗をせまるジョン・ノックス<sup>171</sup>を宮殿に招き論争し、逆にノックスに改宗を迫った。このように宮廷内のプロテスタントとカソリックの貴族達が鎬を削るなかで、メアリー女王は、義兄<sup>172</sup>であり、第一信仰盟約<sup>173</sup>(The First Covenant)にも加わった初代マリ伯ジェームズ・ステュ

<sup>169</sup> 1560年7月にエディンバラで宗教会議が開かれ、ジョン・ノックスが起草した「スコットランドの信条(Scots Confession)」を承認し、ローマ教皇の司法権の否認、異端禁止法などのカソリック諸法の廃止、ミサの禁止を決めた。プロテスタントの反乱がイングランド軍とフランス軍の介入に発展し、その反乱はこの条約で終息した。

<sup>170</sup> このころスコットランドでは、ジョン・ノックスが精力的に各地方で新教義の説教を繰り広げ、スターリング、リンリスゴウ、パース、セント・アンドリュースなどの中部スコットランドの各地で群衆による教会の破壊、聖像の打ち壊し、掠奪が横行し、暴動、内乱の様相を呈していた。また王母メアリーが他界し、エディンバラ条約によって「古い盟約」は破棄同然になり、スコットランドはプロテスタントへの道を歩み始めていた。1560年12月、エディンバラ条約会議はローマ法皇の権威を否定し、ラテン語によるミサを禁止した。

<sup>171</sup> 改革当初のプロテスタントの信仰基盤は、「第一規律書(First Book of Discipline)」と「信仰告白(The Confession of Faith)」によっていた。これは、1560年のエディンバラの宗教会議で承認されていた。

<sup>172</sup> 初代マリ伯ジェームズ・ステュワートは、父ジェームズ5世とアースキン家のマーガレットとの間に生まれた庶子であった。メアリー女王とダーンリー卿ヘンリー・ステュワートとの結婚に反対し、イングランド女王エリザベス1世に結婚阻止を要請した。エリザベス1世は、ダーンリー卿の母マーガレット・ダグラス(ヘンリー8世の姉の娘であり、テューダ朝の王位継承者でもあった)をロンドンに呼び、ロンドン塔に幽閉した。またマリ伯ジェームズ・ステュワートはリッチオ殺害に加担した。

<sup>173</sup> これはプロテスタント信仰を誓う盟約書であった。1557年12月、有力貴族4代アーガイル伯アーチボルド・キャンベル(Archibald Campbell, 5<sup>th</sup> Earl of Argyll)(1532あるいは1537年生-1573年没)、4代モートン伯ジェームズ・ダグラス(James Douglas, 4<sup>th</sup> Earl of Morton)(1525年生?-1581年没)、5代グレンケアン伯アレクザンダー・カニングアム(Alexander Cunningham, 5<sup>th</sup> Earl of Glencairn)(1574

ワート (James Stewart, 1<sup>st</sup> Earl of Moray) (1531年生-1570没) とプロテスタントのウィリアム・メイトランド<sup>174</sup> (William Maitland of Lethington) (1525年生-1573年没) を彼女の枢密顧問にして、国政の助言を求めた。メアリー女王は、宗教改革には寛大な態度<sup>175</sup> をとり、プロテスタントを抑圧する政策は採らず<sup>176</sup>、宗派や政治的派閥を超越し、信仰の選択には寛容をもって臨むことを宣言した。

しかし、メアリー女王には、国政統治の能力がなく、彼女を牽引する力のある護国卿 (貴族) が必要であった。メアリー女王の統治能力の欠如が彼女を不幸にし、彼女をしてイングランド王権の継承に拘泥させたのかも知れない。

メアリー女王は、牽引力のある護国卿 (貴族) 捜しでは、女王とは思われない軽率な態度をとり、そして早々に結婚を決定した。彼女は、牽引力のある人がそばにいて初めて能力を發揮できることを自覚していたので、王国を統治する能力のある相手を探し始めた。最初の相手は、1565年にダーンリー卿ヘンリー・ステュワート<sup>177</sup> (Henry Stuart, Lord Darnley)

年没)らが中心になってまとめた盟約書であった。この盟約に署名した人たちは、国民的教会の創設を目指し、新しい聖書の採用と英語で書かれた公式祈祷書による礼拝を求めた。

<sup>174</sup> 彼は、メアリー・フレミング (4人のメアリーの一人であり、メアリー女王とともにフランスに同行した) と結婚した。彼は、メアリー女王の異母姉弟であった初代マリ伯ジェイムズ・ステュワート (1531年生-1570没) を支持し、ジョン・ノックスに対抗した。彼は、David Riccio の謀殺に加担し、さらにメアリー女王の愛人であるというデマを流された。1567年、メアリー女王がイングランドに逃亡した後、彼は、新しい政府の一員になったが、メアリー女王のための党派を作り、彼女に勢力を与えようとした。彼は、サー・ウィリアム・カーコルディと共にエディンバラ城に入り、その城をメアリー女王の本拠地にしようとしたが、4代モートン伯ジェイムズ・ダグラス (James Douglas, 4<sup>th</sup> Earl of Morton) (1516年生?-1581年没) は、イングランドから援軍を呼び入れ、エディンバラ城の明け渡しを実現した。

<sup>175</sup> メアリー女王とジョン・ノックスとを巡る宗教問題やスコットランドの宗教改革については別稿にて展開する。

<sup>176</sup> ハイランド地域の有力貴族の4代ハントレー伯ジョージ・ゴードン (George Gordon, 4<sup>th</sup> Earl of Huntly) (1514年生-1562年没) が、メアリー女王にインヴァネス城の門を閉ざし、王権を侮辱した。メアリー女王軍は、インヴァネス城を崩壊した。女王は、彼をアバディーンに呼び出したが、彼は、それに応じずに、逆に、アバディーンに軍隊を進め、アバディーンで、メアリー女王の異母姉弟であった初代マリ伯ジェイムズ・ステュワート軍と戦闘になった。これは、Battle of Corrichie (1562年) として知られている。この反乱を起こした4代ハントレー伯は、カソリック、摂政議会の一員、1546年には Chancellor になっていたが、捕らえられた後に、脳溢血のために死に、そして彼の息子は、アバディーンで処刑された。

<sup>177</sup> ダーンリー卿ヘンリー・ステュワートは、レノックス伯 (Matthew Stewart, 4<sup>th</sup> Earl of Lennox) (1516年生-1571年没) 夫人マーガレット (Margaret Douglas) (1515年生-1578年没) の息子であった。マーガレット・ダグラスの母親はマーガレット・テューダであったので、マーガレット夫人はジェイムズ5世とは異父妹であった。メアリー女王の祖母マーガレット・テューダは、祖父ジェイムズ4世の没後に、再婚した6代伯アンガス伯アーチボルド・ダグラスとの間に生まれた。マーガレットがダーンリー卿ヘンリー・ステュワートの母であったので、彼は、メアリー女王とは従弟であった。ダーンリー卿は、母系でテューダ王家に繋がり、父系でステュワート王家に繋がっていた。そのために、イングランド女王エリザベス1世は、メアリー女王とダーンリー卿の結婚には反対であった。

（1545年生-1567年没）であった。彼と知り合っただけの4か月後に彼と再婚したこと、またダーンリー卿がステュアート王家の先祖の後継者であったからであろうか、軽率にもローマ法皇の特許状<sup>178</sup>を受けずに結婚をしたことから判断するに、統治者の結婚としては全く常識を欠いた決定であった<sup>179</sup>。そのことは、結婚後半年も経たないうちに、ダーンリー卿との間が冷え込んだことから立証される。メアリー女王とダーンリー卿との結婚生活は、ダーンリー卿の横柄な態度や王資格による権力指向のために、うまくいかなかったと想像される。その証拠として、メアリー女王は、音楽家であり、彼女の私設秘書であったダヴィッド・リッチオ（David Riccio/David Rizzio）（1533年生-1566年没）を重用し、寵愛し、ダーンリー卿に約束した王位を引っ込めている。しかし、嫉妬に駆られたダーンリー卿と貴族達は、妊娠中のメアリー女王と共にホリールード宮殿で彼女の隣にいたりリッチオを女王の面前で殺害した<sup>180</sup>。その後、この殺害によって、メアリー女王とダーンリー卿の離婚は必然的になった。1566年6月、メアリー女王は男子（この子が後にスコットランド王ジェイムズ6世、すなわちイングランド王ジェイムズ1世）を出産した。

メアリー女王はダーンリー卿<sup>181</sup>を避ける生活を送っていたが、他方で取り巻きの貴族達はスコットランド王国の統治にとって、ダーンリー卿を排除しなければならない、と話し合っていた。

次のメアリーの結婚相手は、彼女のもとに足繁く通っていた貴族であるボスウェル伯ジェイムズ・ヘバーン<sup>182</sup>（James Hepburn, 4<sup>th</sup> Earl of Bothwell）（1535年生-1578年没）であった。彼は、メアリー女王に気に入られ、側近第1号として扱われた。メアリー女王は、ダーンリー卿の殺害首謀者であると思われた寵臣ボスウェル伯<sup>183</sup>を処罰するどころか、彼に領地

<sup>178</sup> 当時、従兄弟どうしの結婚には、法皇の特許状が必要であった。

<sup>179</sup> メアリー女王は、王族にしか与えられないロス伯、オルバニー公の公爵位をダーンリー卿に与えたばかりではなく、王位をさえ彼に与える約束をしていた。この王位に関する女王の処遇には、有力貴族の反発を買い、政治顧問のジェイムズは憤慨し、職を辞し、女王メアリーとダーンリー卿の敵に回った。

<sup>180</sup> 1566年3月9日、ホリールードハウス宮殿で食事中に、ダーンリー卿の部屋に近い接見室の前でリッチオ（David Rizzio）が殺害された。

<sup>181</sup> 1567年2月10日、エディンバラ教会のカーク・オ・フィールトのプロヴィスツ・ロッジで爆発がおこり、その中庭でダーンリー卿が死んでいた。この首謀者がボスウェル伯ジェイムズ・ヘバーンであるという風評が流れ、さらに首謀者はボスウェル伯であるという張り紙さえ出された。

<sup>182</sup> 彼は、女たらしであった。1566年に彼は、4代ハントレー伯ジョージ・ゴードン（Goerge Gordon 4<sup>th</sup> Earl of Huntley）（1514年生-1562年没）の娘ジャン・ゴードン（Jean Gordon, Countness of Bothwell）（1546年生-1624年没）と結婚したが、彼女の召使いとボスウェル伯の姦通を申し立てられ、1年で結婚を解消した。1560年、彼がフランス宮廷を訪れたときに、彼はフランソワ2世とメアリー王妃にあった。1561年、フランスガレー船でメアリー女王がスコットランドに戻るときにその船の手配は4代ボスウェル伯によってなされた。

<sup>183</sup> 1567年4月、枢密院は、ダーンリー卿の殺害に対して、4代レノック伯ジェイムズ・ステュアートの請願

を加増し、オークニ公爵位 (Duke of Orkney) を与えた。ボスウェル伯は、スターリングからエディンバラに戻るメアリー女王を拉致し、ダンバー城に連れて行き、レイプし、彼女に結婚を迫った。初めメアリーは、即答せずにいたが、1567年5月にプロテスタント宗旨に従って、ホリールードハウス宮殿で、両人は結婚式を挙行した。カソリックのメアリーがプロテスタントの夫の宗旨に従っての挙式であった。

その結婚に反対する貴族は、スターリングに結集し、メアリー女王をボスウェルから救出出す軍を起こし、2人はスコットランドの城から城へと転々と逃げ回る<sup>184</sup>が、結局、1567年7月24日、メアリー女王は、王位を廃位させられた。王位は、その子のジェイムズ6世(在位1567年-1625年)に継がれた。捕らわれていたメアリー女王は、1568年、ロッホリーヴン城 (Lochleven Castle) から脱出し、6,000人の兵を集め、軍をおこした。グラスゴウ北方のラングサイドの戦い<sup>185</sup> (Battle of Langside) で、メアリー女王は、初代マリ伯ジェイムズ・ステュワートの軍に敗れ、イングランドに敗走した<sup>186</sup>。イングランドのエリザベス1世<sup>187</sup>は、

---

よって、4代ボスウェル伯の訴訟手続きをはじめ、正午から夕方の7時まで審議し、ボスウェル伯の無罪が確定した。少なくとも議会の9人の司教と8人の伯爵と7人の侯爵によって署名された Ainslie Tavern Bond と知られているマニフェストをボスウェル伯に手渡した。このマニフェストは、4代ボスウェル伯の無罪の件とメアリー女王はスコットランドの臣民と結婚する主旨のことが記されていた。

<sup>184</sup> 2人は、ホリールードハウス宮殿から安全なエディンバラ城に移ろうとしたが、その衛兵に入城を拒否され、南ロージアンンのボースウィック城 (Borthwick Castle)、クライトン城 (Crithon Castle)、ダンバー城 (Dunbar Castle) と逃げ回るが、1567年6月15日エディンバラ城の東13キロメートルのカーベリー・ヒル (Carberry Hill) で4代ボスウェル伯の自由な行動を約束するという条件で、メアリー女王は反ボスウェル軍に投降した。4代ボスウェル伯は、逃走した。

1567年6月16日、メアリーはパースの南20キロメートルのロッホリーヴン城 (Loch Leven Castle) に移され、息子ジェイムズのために退位すること、ジェイムズの教育を貴族に任せること、マリ伯ジェイムズ・ステュワートを摂政にすることを条件として、7月24日にメアリーの王位は廃位された。

<sup>185</sup> この戦いは、スコットランドの歴史においても奇妙な戦いであった。メアリー女王と初代マリ伯ジェイムズ・ステュワートの2人は、異母兄妹であった。初代マリ伯は、ジェイムズ5世の妻子であった。この戦いは皇族間でのいざこざであった。またジェイムズ・ステュワートはプロテスタントであった。メアリー女王は、カソリックのハミルトン伯のもとにロッホリーヴン城から脱出し、逃げのびてきたと思われる。初代マリ伯が戦いに勝利した。

<sup>186</sup> 4代ボスウェル伯は、スカンジナビアに逃れ、メアリー女王に軍を用立てるつもりであったが、ノルウェーの海岸で捕らえられた。その後、デンマーク王フレデリック2世のもとに送られ、ドラグスホルム城 (Dragsholm Castle) に入れられ、鎖に繋がれ、そこで他界した、と思われる。

<sup>187</sup> エリザベス1世は、ヘンリー8世とその2番目の王妃アン・ブリーンの間に生まれた。母アン・ブリーンの処刑後は、姉メアリーと同様にプリンセスの処遇を停止され、王位継承権を剥奪された。エリザベス女王は、宗教面では、プロテスタントあるいはカソリックなどの極端な宗派は避け、国教会の基礎を確立し、ピューリタンとカソリックの両極端を排除する政策を採った。内政面では絶対主義、外交面では海外進出の基礎を築き、文化面ではイギリス・ルネッサンスの花を咲かせた国王であった。彼女は、女ヘンリー8世と言われた。彼女は、玉璽にアイルランド王国を示す「ハーブ」をイングランドの紋章に加えた。それが正式に採用されたのは、ジェイムズ1世においてであった。

メアリーを保護し、彼女を幽閉するでもなく自由にさるでもなったが<sup>188</sup>、メアリーは、1587年2月に処刑された。メアリーは44歳であった

## 第4章 同君連合王国の誕生とジェームズ6世と議会の対立

### 第1節 ジェームズ6世と摂政政治

メアリー女王がイングランドに逃走した後に、彼女とダーンリー卿ヘンリー・ステュワート<sup>189</sup>の間に生まれたジェームズ・チャールズ<sup>190</sup>が、ジェームズ6世（James VI）（在位1567年-1625年）として王位を継承した。そのとき、ジェームズ6世が1歳1か月であったので、またもや摂政によるスコットランド統治となった。摂政政治は、再び、不安定な政局を生み出した。宮廷内が有力貴族間の勢力争いの場になり、殺戮の場となり、血で血を洗うことになる。

最初のジェームズ6世の摂政役には、1567年、善良な摂政と称号を与えられた初代マリ伯ジェームズ・ステュワート<sup>191</sup>（James Stewart, 1<sup>st</sup> Earl of Moray）（1531年生-1570年没）

<sup>188</sup> メアリー女王は、18年間、イングランド北部のカーライル城（Carlyle Castle）、ボルトン城（Bolton Castle）、チャッツワース城（Chatsworth Castle）、北部のシェフィールド城（Sheffield Castle）、中部のコベントリー城（Coventry Castle）、タトビューリー城（Tutbury Castle）、そして最後にピータバラ西方のフォザリングイ城（Fortheringhay Castle）を転々とした。その間、メアリーは、イングランド王位に正当な継承権があることを主張したばかりではなく、エリザベス女王を廃位する陰謀に関与し、幾多の事件を起こした。それは、リドルフィ事件（1570年）やカソリックのアンソニー・バビンドンがエリザベスの暗殺を謀ったバビントン事件（1586年）などであった。この間の1572年に4代ノーフォーク公トマス・ハワード（Thomas Howard, 4<sup>th</sup> Earl of Norfolk）（1536年生-1572年没）がメアリーと結託し王位を狙った。

<sup>189</sup> ダーンリー卿の家系は、ステュワート・オブ・ダーンリー家と呼ばれ、ステュワート家の一族であった。その家系は、スコットランド王ロバート2世（Robert II）（在位1371年-1390年）の祖父である第5代王室執事長ジェームズ・ステュワートの弟の子孫であった。ダーンリー卿の父方の曾祖母エリザベス・ハミルトン（Elizabeth Hamilton）（生没不詳）は、スコットランド王ジェームズ2世の外孫であった。

<sup>190</sup> 名付けの親は、イングランド王エリザベス1世であった。

<sup>191</sup> 彼は、スコットランド王ジェームズ5世の庶子であった。彼の母親は、マーガレット・アースキン（Margaret Erskine）（1572年没）であった。1561年にメアリー女王によってマリ伯を叙位された。メアリー女王の異母兄妹であった。初代マリ伯は、プロテスタントであった。彼は、メアリー女王とダーンリー卿ヘンリー・ステュワートとの結婚には反対であった。またスコットランドのカソリック化に反対していた、と思われる。1565年、彼は、5代アーガイル伯アーチボルド・キャンベル（Archibald Campbell）（1532/1537年生-1573年没）やハミルトン一族と共に、Chaseaboutの襲撃に出たが、失敗した。一時、イングランドに逃れたが、David Rizzioの暗殺後はスコットランドに戻った。また、ダーンリー卿の暗殺時には逃げ、メアリー女王と4代ボスウェル伯との結婚に関連した混乱を避けて、フランスに逃げた。1567年のロッホリーヴァン城でのメアリー女王の退位後に、彼は摂政に任命された。ロングサイドの戦いでは、2代アラン伯ジェームズ・ハミルトンや他の貴族がメアリー女王の旗下に参集したが、彼は、メアリー女王に対抗し、勝利した。この戦いで彼は、ハミルトンに対する報復として、南ラナークシャにあったルーザーグレン城（Rutherglen Castle）を焼き落とした。

が就いた。彼は、ジェームズ6世の義理の伯父で、宗教政策としては、ジョン・ノックスと協力し、プロテスタント改革教会の強化に努め、また国内の治安では、貴族間の私闘を抑制すると同時に一般市民の保護に務め、よき摂政として活躍した。しかし、有力貴族間での勢力争いとカソリックとプロテスタントの宗教対立が絡む複雑な宮廷政治が繰り広げられた。

スコットランドでは、第2章第6節のジェームズ5世の摂政政治の説明でも指摘したように、ジェームズ6世の摂政政治においても有力貴族間の抗争・殺戮が絶えなかった。その抗争・殺戮は、1570年1月に、ハミルトン一族による摂政役の初代マリ伯ジェームズ・ステュワートの暗殺<sup>192</sup>によって再開された。

ジェームズ6世の次の摂政役として、1570年、4代レノックス伯マッシュュー・ステュワート<sup>193</sup> (Matthew Stewart, 4<sup>th</sup> Earl of Lennox) (1516年生-1571年没) が就いた。彼は、ダーンリー卿ヘンリー・ステュワートの父で、ジェームズ6世の祖父であった。彼は、1571年9月にスターリング城で殺害された。その3番目の摂政には、1571年10月、6代マー伯ジョン・アースキン<sup>194</sup> (John Erskine, 6<sup>th</sup> Lord Erskine, 17<sup>th</sup> Earl of Mar) (1510年生-1572年没) が就いたが、その実権は、そのマー伯の他界後に摂政となった4代モートン伯ジェームズ・ダグラス<sup>195</sup> (James Douglas, 4<sup>th</sup> Earl of Morton) (1525年生?-1581年没) によって握られ

<sup>192</sup> 初代マリ伯ジェームズ・ステュワートの暗殺者は、暗殺者として知られるジェームズ・ハミルトン (James Stewart) (1581年没) であった。1570年1月23日、彼の伯父であった聖アンドリュースの大司教ジョン・ハミルトン (John Hamilton) (1511年生-1571年没) のリンリスゴウ (Linlithgow) の家の階段 (あるいは窓) から銃で初代マリ伯ジェームズ・ステュワートを暗殺した。この事件は、エディンバラの聖ジャイル大聖堂のステンドグラスに描かれている。

<sup>193</sup> 彼は、カソリックの指導者であり、ダーンリー卿の父であった。彼は、ジェームズ2世の娘を通して、王位継承権をもっていた。彼は、ジェームズ5世とは又従兄弟であった。1544年、彼は、マーガレット・ダグラス (ジェームズ5世の又従兄弟) と結婚した。1570年、ジェームズ6世の摂政になった。しかし、メアリー派の反対に遭い、1571年、スターリンでの争いで死亡した。

<sup>194</sup> 彼は、プロテスタントであったが、熱心ではなかった。彼は、1557年、カルヴィニストであったジョン・ノックスをスコットランドに戻すことを願う手紙を出していた。メアリーの母親であり、摂政であったマリー・ドゥ・ロレーヌとプロテスタントとの争いの時には、彼は平和を維持するように行動した。1561年メアリーがスコットランドに戻ってきたとき、彼は議会のメンバーであった。彼は、メアリー女王とダーンリー卿の結婚を歓迎したが、ジェームズ6世が、4代ボスウェル伯の手中に落ちることを避けるために、メアリー女王と4代ボスウェル伯の結婚には反対であった。1552年にアースキン侯爵を引き継ぎ、1565年にマー伯が与えられた。

<sup>195</sup> 4代モートン伯ジェームズ・ダグラスは、1563年に大法官 (Lord Chancellor of Scotland) になり、1566年3月のホリールド宮殿における David Rizzio の暗殺では、武装軍を指揮した。彼は、その後、一時イングランドに逃れたが、1567年、スコットランドに戻った。このときメアリー女王は、すでに、4代ボスウェル伯ジェームズ・ヘバートと結婚し、スコットランドの城から城と逃げ回っていた。彼は、女王が隠れていたボースウィック (Borthwick) 城に600人の軍勢と共に姿を見せた。彼は、1567年6月15日、カーベリー・ヒル (Carbery Hill) での会合に参加し、1567年7月24日、ロッホリーヴァン城 (Lochleven Castle) でメアリー女王からジェームズ6世への王位の譲渡の承諾を得ることに貢献した。さらに1568

ていた。次に摂政に就いた4代モートン伯は、プロテスタントであったが、ジョン・ノックスらの改革派の長老会による聖職者の任命には反対し、王権による司教（主教）の任命の立場<sup>196</sup>を採っていた。その一方では、プロテスタント信仰の普及と一般民の法による保護を目指していた。

4代モートン伯ジェームズ・ダグラスは、エディンバラ城に籠城するメアリー女王を支持していた党派の排除に努め、ウィリアム・カーコルディー<sup>197</sup>（William Kirkcaldy）（1520年生-1573年没）などを投降させ絞首刑にした。しかし、4代モートン伯は、1581年、ダーンリー卿殺害の謀議に加担したとして、国王の従兄弟である初代レノックス公エズメ・ステュワート<sup>198</sup>（Esmé Stuart, 1<sup>st</sup> Duke of Lennox, 1<sup>st</sup> Earl of Lennox）（1542年生-1583年没）

---

年のロングサイド（Longside）の戦いにおいてもメアリー軍を敗北させるのに活躍した。4代モートン伯は、4代レノックス伯マッシュー・ステュワートならびに初代マー伯ジョン・アースキンがジェームズ6世の摂政であったとき、最も力のあった貴族であった。1573年、4代モートン伯は、5代ハントレー伯ジョージ・ゴードン（George Gordon, 5<sup>th</sup> Earl of Huntly）、ハミルトン一族（Clan Hamilton）、メアリーを支持するカソリック貴族との間で講和協定を批准・締結した。エディンバラ城に籠城するウィリアム・メイトランド（William Maitland）（1523年生-1573年没）やウィリアム・カーコルディー（William Kirkcaldy）を投降させ、エディンバラ城の開放に貢献した。

メアリー女王の復活の可能性は潰えたが、しかし、4代モートン伯が歓迎して受け入れられる土壌ではなかった。それは、4代モートン伯が主教制に近寄った為であった。彼は、プレジビテリアンの6代アーガイル伯コリン・キャンベル（Colin Campbell, 6<sup>th</sup> Earl of Argyll）（1541/1546年生-1584年没）や4代アサール伯ジョン・ステュワード（John Stewart, 4<sup>th</sup> Earl of Atholl）（1579年没）のみだけからではなく、ローマ・カソリックやメアリー派からも反対された。彼には、摂政から降りるしか道はなかった。

<sup>196</sup> この考えは、教会の長は国王という、イングランド教会の主張である主教派の立場であった。これは、イングランド方式とも呼ばれた。

<sup>197</sup> カーコルディーは、1546年、聖アンドリュースの大司教ビートン（David Beaton, Archbishop of Saint Andrews）（1494年生-1546年没）の殺害に加担した。そのために、彼は、1547年にフランスに送られた。1557年、彼は、フランスから戻ると、プロテスタントとしてメアリー女王の母親で、摂政であったマリィ・ドゥ・ロレーヌと争いを交えて、ファイフでフランス軍に攻め入ることを宣言した。また彼は、メアリー女王とダーンリー卿の結婚に反対し、初代マリ伯ジェームズ・ステュワートと協働した。

彼は、メアリー女王の個人教師であった Rizzio の殺害に手を貸し、またメアリー女王の Bothwell 伯との結婚後、メアリー女王を救い出すために貴族を団結させた公爵であった。カーベリ・ヒル戦後、メアリー女王はカーコルディーにその身を任せた。カーコルディーはオークニにスコットランド海軍としてボスウェルの追跡をしたが、座礁し、彼を捕らえることに失敗したが、メアリー女王との和解は可能であると信じていた。初代マリ伯ジェームズ・ステュワートの殺害後に、カーコルディーは、ウィリアム・メイトランド（William Maitland）（1523年生-1573年没）の影響下で、メアリー女王のためにエディンバラ城の要塞化を強め、支配者の一人であった4代レノック伯に挑んだ。しかし、1573年、摂政モートン伯との交渉が決裂し、彼は、その後首つりの刑に処せられた。

<sup>198</sup> 彼は、フランスから宮廷に入ってきた父ダーンリー卿ヘンリー・ステュワートの従兄であった。彼は、ジェームズより24歳年長であり、ジェームズが13歳の時にフランスからスコットランド宮廷に来た。彼は、ジェームズ6世を魅了し、彼の寵臣になった。エズメは、プロテスタントが支配するスコットランドでは、カソリックかジェームズ6世かの選択を迫られた。彼は、ジェームズ6世を選択した。ジェームズ6世は、彼にカルヴァン主義の考えを教え、1579年、アングスのアープロウス修道院の領地を彼に与え、また4代

によって、4代モートン伯自身が導入した断頭機で処刑された。

ジェームズ6世の最後の摂政は、ジェームズ6世の従兄弟のエズメ・ステュワートであった。初代ガウリー伯ウィリアム・リヴァン<sup>199</sup> (William Ruthven, 1<sup>st</sup> Earl of Gowrie) (1541年生-1584年没)によって、1582年、ジェームズ6世が、今日ハンティングタワー城(Huntingtower Castle)として知られているリヴァン城(Ruthven Castle)に軟禁されるリヴァンの襲撃が起こされ、エズメ・ステュワートは国外に追放された。翌年、ジェームズ6世は、その城から脱出し、17歳にして親政に乗り出し、王権の回復と伸張に努めた。1584年、ジェームズは、かれ自身をリヴァン城に軟禁した初代ガウリー伯を処刑し、同時に、ジェームズ自身による統治(personal rule)に乗り出した。

ジェームズ6世が直面した最大の問題は、宗教問題であった。ジェームズ6世は、メアリー女王とは多少異なり、宗教改革を抑制する態度で臨んだ。宗教改革派によると、教会は長老制教会<sup>200</sup>をとることになり、長老会制度では、教会はイエス・キリストの王国であり、その王国の王は神であって、たとえ国王ジェームズ6世であっても、その王国の構成員の一人である、という信条を採っていた。長老会制度では、いかなる聖職者も、国王の任命ではなく、長老会(全国総会)において選出されるとことになっていた。これに対抗し、ジェームズ6世は、国王は教会と国家の長であるという主教派の考えを取り入れ、1584年にブラック・アクト(Black Act)を發布し、国王が最高権威者であると規定し、司教制度を諷い、国王の議会对に反対する説教を禁止する態度で臨んだ。しかし、ジェームズ6世は、1592年に、ブラック・アクトを多少緩和し、ゴールデン・アクト(Golden Act)を發布し、主教制度は廃止され、「スコットランド教会」の統治方式として長老組織が確立し、集会は許されたが、日時や

---

レノックス伯マッシュュー・ステュワートの死後、1580年、エズメ・ステュワートにレノックス伯位を与え、1581年に公爵位を与えた。

エズメ・ステュワートは、奸計をめぐらし、4代モートン伯の排除に乗り出し、ダーンリー卿殺害の謀議に加担した罪で有罪にし、4代モートン伯を断頭機で処刑した。これには、4代モートン伯がプロテスタントであったので、スコットランド教会(Scottish Kirk)は驚き、そしてスコットランドの貴族達は、エズメを追い出す為に、ジェームズ6世をRuthven Castleに誘い出し、王を10ヵ月、その城に監禁した(Ruthvenの襲撃として知られている)。エズメ自身、初代ガウリー伯ウィリアム・リヴァンに追われ、1582年、フランスに戻ったが、背信者として冷ややかに迎え入れられ、1583年、死亡した。その後、彼の心臓がジェームズ6世に届けられた。

<sup>199</sup> 彼は、1566年、David Rizzioの殺害に関与した。1581年、ガウリー伯が与えられたが、1584年、処刑と同時に取り上げられた。1582年、リヴァンの襲撃を企てた張本人であった。彼の支配は、超プロテスタント的であり、彼と王室の財政担当者は多数の王室費用節約方法を提示し、宮廷の過剰な支出を抑制する政策を推進した。この政策は、イングランド女王エリザベスI世とフランシス・ウォルシingham(Francis Walsingham) (1532年生-1590年没)には歓迎された。

<sup>200</sup> スコットランドでは、1592年、主教制が正式に廃止され、長老組織が「スコットランド教会」の統治方式として取り入れられた。

場所については事前に国王の許可を得ることが条件とされた。ジェイムズは、司教（主教）を任命し続け、「司教国会議員」3人を指名し、一般の国会議員と同様に、議会における立法活動を教会が推す3人の司教に許した。

ジェイムズ6世にとって次に重要な問題は、外交問題であった。大国スペインとイングランドに配慮した外交政策を展開する必要があった。1586年にイングランドとはエリザベス女王からの申し入れで同盟<sup>201</sup>を結び、他方、カソリック国スペインにはカソリックの貴族を使節として送っていた。彼の全方位外交は彼の結婚相手の決定にも伺える。1589年にデンマークならびにノルウェイ王フレデリック2世（Frederick II）（在位1559年-1588年）の娘アンと結婚式<sup>202</sup>を挙げた。ジェイムズ6世の統治姿勢は、ジェイムズ1世以来の姿勢に通じるものがあつた。それは、第1に、貴族の横暴を防ぎ、第2に、法による正義を確立し、一般国民の保護に努めることであつた。政府要人には貴族よりも中産階級の有能な人物<sup>203</sup>を登用した。

## 第2節 ジェイムズ6世がジェイムズ1世を兼務：同君連合の誕生

ジェイムズ6世は、イングランド王ジェイムズ1世として1603年7月25日ウエストミンスター・アベールで戴冠式を執り行った。ジェイムズ6世は「同君連合<sup>204</sup>」の国王になった。

<sup>201</sup> 1587年に母メアリーが処刑されたとき、エリザベス女王にジェイムズ6世は、抗議文を送るのみで、形式的な抗議であつた。

<sup>202</sup> ジェイムズ6世は、イングランドのエリザベス女王がアン女王との結婚に反対していた、さらに母であるメアリーが囚われの身であつたので、ジェイムズ6世は慎重な行動を取っていた。しかし、1587年にメアリーが処刑されると、1589年11月にジェイムズ6世はオスローに向いて結婚式を挙げた。

ジェイムズ6世と王妃アン（ノルウェイ王フレデリック2世の娘アン）の間には3男4女が生まれた。長男ヘンリー・フレデリックは、18歳のときに、腸チフスで病死した。次男はチャールズ1世として、ジェイムズ6世の後を継ぎ、イングランド国王になった。3男ロバートは、生後まもなく、死亡した。次女から4女までは、幼くして死亡した。長女エリザベス（Elizabeth Stewart）（1596生-1662年没）は、17歳でファルツ選定侯でもあるバイエルン公フリードリッヒ5世（Friedrich V）（在位1610年-1632年）と結婚したが、フリードリッヒはフェルディナント2世（Ferdinand II）（在位1619年-1637年）と戦い、亡命のまま、他界したが、彼女は「慈愛の王妃」と呼ばれ慕われた。アン女王（Ann Queen）（在位1702年-1714年）に世嗣がなく、王位がハノーヴァー家に移るが、それはステュアート王家に繋げるためであつた。後にイングランド王家になるハノーヴァー家はそのエリザベスの血筋である。ジョージ1世（George I）（在位1714年-1727年）は、そのエリザベスの孫であつた。

<sup>203</sup> ジェイムズ・エルンフィストン（James Elphinstone, 1<sup>st</sup> Lord Balmerion）（1553年生?-1612年没）、ジョン・リンゼイ（John Lindsay of Balcarres）（1552年生-1598年没）、アレグザンダー・シートゥン（Alexander Seaton, 1<sup>st</sup> Earl of Dunfermline）（1555年生?-1622年没）、トマス・ハミルトン（Thomas Hamilton, 1<sup>st</sup> Earl of Haddington）（1563年生-1637年没）などの中産階級の8人が、Octaviansを構成し、財政問題や法律問題について、ジェイムズ6世の下で活躍した。

<sup>204</sup> 同君連合の時代は、スコットランドにとっては激動の時代であつた。国王が国を留守にした。ジェイムズ1世は、イングランド王を兼ねた22年間に、わずか1回しかスコットランドを訪れていない。またその

国王は同じ人物でありながら、両国は、それぞれ独立した別国である同君連合になった。人口90万人に満たないスコットランド国王が、その5倍の450万人のイングランド国王を兼ねることになったが、王位についてからの22年間で、1回しか、ジェイムズ6世は、スコットランドのエディンバラには戻っていない。それは、ジェイムズ6世がイングランドでの宮廷生活をエディンバラでの生活より好んだからであり、同時に、政治的にも経済的にも先んじていたイングランドの仕組みを学びスコットランドに導入するためには、一日たりともロンドンを留守にできなかったからであろうか。いろいろと解釈されるが、彼は、その在位22年間に、1度しかスコットランドのエディンバラに戻っていないという事実は認識しておく必要がある。ジェイムズ6世(イングランド王 ジェイムズ1世)のスコットランドの統治方法は、彼自身はロンドンにいて、ペンでスコットランドを治めるものであった。スコットランド議会に王の代表(高等弁務官)<sup>205</sup>(Lord High Commissioner)を置いて統治した。2代レノックス公リ्यूトヴィック・ステュワート<sup>206</sup>(Ludovick Stewart, 2<sup>nd</sup> Duke of Lennox)(1574年生-1624年没)も高等弁務官(総督)(1607年-1609年)になっていた。またジェイムズ6世の「同君連合(Personal Union)」の統治方法論では、両国の議会を連合形態に持ち込み、同時に、宗教による両国の連合を図ることが考えられていた。しかし、この問題はジェイムズ6世の手に負える問題ではなく、この両国議会の連合は、後年、アン女王(Ann Queen)(在位1702年-1714年)時代に「連合王国」として実現した。

ジェイムズ6世が残した問題に「スコットランド国教の統一」の問題があった。ジェイムズ6世は、司教制度を拒否していた改革派の教会に対し、司教国会議員を任命して対抗した<sup>207</sup>。しかし、ジェイムズ6世がイングランド王を兼ねると、ジェイムズは、長老派の年次総会の

---

後の多くの国王もスコットランドを訪れていない。その間、スコットランドでは、実力貴族や部族の対立、抗争が一層激化し、それに宗教をめぐる対立・抗争も起こり、さらにイングランドのスコットランドに対する差別・蔑視に苦しめられた。

<sup>205</sup> ジェイムズ6世がイングランド王を兼ね、スコットランド議会に国王が出席できなくなったので、スコットランド議会への主権代表としてスコットランド総督(高等弁務官)(Lord High Commissioner)がその任務を果たした。

<sup>206</sup> 彼は、エズメ・ステュワートの息子であり、アイルランドのウルスターのプランテーションとニューイングランドのメイン州の植民化に関与した。彼は、リッチモンドと同様にリッチモンドのアイルランドと呼ばれた。彼は、初代ガウリー伯ウィリアム・リヴァンの娘ソフィア・リヴァンと結婚した。彼は、イングランドのリッチモンド公爵(1<sup>st</sup> Duke of Richmond)になった。

<sup>207</sup> 1604年にハンプトン・コート宮殿に国教会、ピューリタンなどの宗教界の代表を集め会議を開き、その席上でイングランド王ジェイムズ1世は、国教会の立場を採ること共に、ピューリタンやカソリックの極端な立場は排除することを宣言した。カソリックへの弾圧を恐れたロバート・ケイッピー(Robert Catesby)(1573年生-1605年没)が発案し、その計画の協力者の一人であったキド・フォークス(Guido Fawkes)(1570年生-1606年没)による火薬陰謀事件が起こったが、未遂に終わった。ピューリタンの抵抗運動は、ジェイムズ1世治世では目立った活動はなかったが、チャールズ1世の時代になって加速された。

開催に許可を与えずに、その開催が5年に亘って延期されたので、集会を開いた19人の聖職者達は反逆罪として国から追われた。教会の長が国王であることに徹底的に反対していたアンドリュー・メルヴィル<sup>208</sup>（Andrew Melville）（1545年生-1623年没）は、1606年にジェイムズの計画変更について話し合うためにロンドンに呼び出され、ジェイムズに対して教会の自由を主張したため、ロンドン塔に送られ、数年後に釈放されたが、スコットランドから追放された。指導者を奪われ監禁や追放で脅かされたスコットランドの聖職者たちは、十分な大衆の支持も得られず、王の圧迫に屈し、1601年、主教（司教）が総会などの大会の議長になることを認め、主教制度が、正式に、「スコットランド教会」で承認された。1618年、ジェイムズ国王は、パースに聖職者会議を召集し、「パース5か条（Five Articles of Perth）<sup>209</sup>」で司教制を強化した。この中には、長老派が最も反対していた聖餐のパンとブドウ酒を受けることも含まれていた。

「同君連合」王国の紋章に関してジェイムズ1世は大きな貢献をした。スコットランド、イングランド、アイルランドの3王を兼ねるジェイムズ1世の場合、盾に3王の紋章を組み込み、盾には優位と劣位の場合があり、どの王国の紋章を優位あるいは劣位にするかが問題であった。ジェイムズ1世は、紋章の構成要素は同じにし、イングランド王ジェイムズ1世の紋章とスコットランド王ジェイムズ6世の紋章では、その組み合わせによって、イングランド優位とスコットランド劣位の使い分けをした<sup>210</sup>。大紋章でも、同様に、イングランド優位の配置とスコットランド優位の配置を使い分けた。イングランド王ジェイムズ1世の大紋章では、向かって、左側にライオン、右側にユニコーンが配置された。またスコットランド王ジェイムズ6世の大紋章では、向かって右側にライオンと左側にユニコーンが配置された。

<sup>208</sup> アンドリュー・メルヴィルは、留学先のフランスあるいはジュネーヴからスコットランドに帰国し、1580年にセント・アドリュース大学の学長になった。1582年に長老派教会の大会の議長を務め、カトリック的な監督制度をスコットランド教会に持ち込むことに反対し、教会に長老制を確立することに努力した。彼は、政府によるあらゆる干渉から教会の自由を守るために闘った。アンドリュー・メルヴィルは、「教会はイエス・キリストの王国であり、その国の王は神であり、ジェイムズ6世はそのメンバー」と主張している。それに対し、ジェイムズ6世は、王は教会の単なるメンバーではなく、教会と国家の長であると、考えていた。ジェイムズ6世は、ブラック・アクトによって、国王が最高権威者であることを規定し、司教（主教）制度を謳った。

<sup>209</sup> 1618年、パースでの総会（General Assembly）では、いやいや5箇条が受け入れられた。1621年、スコットランド会議でこの条項が批准された。5箇条とは、聖餐式の間膝をつく（kneeling during communion）、私的洗礼（private baptism）、病人や弱者のための私的聖餐式（private communion for the sick or infirm）、司教による堅信式（confirmation by a Bishop）、聖祝日の典礼（the observation of Holy Days）の5箇条である。

<sup>210</sup> イングランド王ジェイムズ1世の紋章で、盾の構成要素は同じにし、3頭のライオンと百合の花を2箇所に配置し、イングランド優位にした。スコットランド王ジェイムズ6世の紋章では、立ち姿のライオンを2箇所に配置し、スコットランド優位にした。

### 第3節 イングランド王ジェームズ1世と議会

イングランド王ジェームズ1世は、議会に対して王の絶対権を要求していた。1604年に議会が召集され、庶民院(House of Commons) (下院)は、ジェームズ1世に請願書を提出し、宗教の問題について議会の同意を得るように請願し、ジェームズ国王は議会の休会に追い込まれた。1605年に議会が刑罰法規を強化することを決めたことに対して、ウェストミンスター宮殿(Palace Westminster)内にあった議事堂を爆破し、ジェームズ国王を議員共々に爆死させる計画をロバート・ケイッピー(Robert Catesby) (1573年生-1605年没)<sup>211</sup>が発案した。この計画の協力者<sup>212</sup>にギドー・フォーク(ガイ・フォーク)<sup>213</sup> (Guido Fawkes, Guy Fawkes)

<sup>211</sup> Catesby (ケイッピー) は、父ウィリアム・ケイッピー (William Catesby), 母アン・スロックモートンウ (Anne Throckmorton) の3男として、ウォーリックシャーのオックスフォード近くで生まれた。彼は、オックスフォードのグロスターホールで教育を受けたが、カソリックであったために学位取得を諦めた。彼の両親は、英国教会(国教)に反対するカソリック教徒であったが、彼は1593年にプロテスタントのCatherine Leighと結婚した。富裕なプロテスタントの持参金は2千ポンドであった。彼は、1595年11月にChastletonのプロテスタント教会で洗礼を受けた。彼は、幸せであったかも知れないが、惨めなカソリック教徒であった。1598年に彼の父と妻の死後、彼は、苦悩し、狂信的なカソリックに改宗した。

1601年にエセックの反乱に参加したが、捕らえられ、獄中に収監され、エリザベス1世によって4,000マルクの罰金刑に処せられた。トマス・トレシャムがケイッピーの罰金のいくらかを肩代わりし、彼はChastletonの財産を処分した。1603年に彼は、スペインのフェリッペ3世(Felipe III) (在位1578年-1621年)に、エリザベス女王の崩御後イングランドのカソリックを援助し続けるかどうかを探るためにクリストファー・ライトを遣わしている。

エリザベス女王を継いだプロテスタントのジェームズ1世はカソリックに寛大であり、迫害は終わると期待されていた。彼は、最初の約束に反してカソリック主義に寛容ではなくなかったジェームズIを、上院議会を火薬で爆破し、他の議員と一緒に殺害し、イングランド国王をカソリックに取り戻すことを計画した。この事件は、カソリック修道院を司教座に戻すための反抗でもあった。1604年の初めに彼は、その計画に他のカソリック教徒を誘い入れようとした。その中には、トマス・ウィンター(Thomas Wintour,あるいはWinter), ジョン・ライト(John Wright), トマス・パーシー(Thomas Percy), ならびにガイ・フォークス(Guy Fawkes)等がいた。

1605年11月4日遅く、ケイッピーは、ジョン・ライトおよび執事バート(Thomas Bates)と共に暴動を起こすためにミッドランドに向かった。しかし、その深夜に火薬番をしていたガイ・フォークが発見され、逮捕された。11月5日に、その逮捕のニュースをルークウッドから告げられた。彼らは、他の共謀者と共に、Dunchurchに馬を走らせた。11月7日に一行は、雨の中を馬を走らせ、Holbeche Houseに到着した。ディグビーとジョン・ウィンターと執事バートは、Houseを去ったが、ケイッピー、ルークウッド、ライト兄弟、パーシーおよびジョン・グラント(John Grant)はそこに残った。そのHouseはウスター州長官であったウォルシュ(Richard Walsh)とその部隊に包囲され、その銃撃戦でケイッピーとパーシーは撃ち殺された。

<sup>212</sup> 協力者は、最初、トマス・ウィンター(Thomas Wintour) (1571年あるいは1572年生-1606年没)(ケイッピーの従兄弟) トマス・パーシー(Thomas Percy), ガイ・フォーク(Guy Fawkes) (1570年生-1606年没), ジョン・ライト(John Wright) (1568年生-1605年没), クリストファー・ライト(Christopher Wright) (1570年生-1605年没), ロバート・ウィンター(Robert Wintour) (1568年生-1606年没)であった。次に、ロバート・キーズ(Robert Keyes) (1565年生?-1606年没), アンブローズ・ルークウッド(Ambrose Rookwood) (1578年生?-1606年没), エバーラード・ディグビー(Everard Digby) (1578

(1570年生-1606年没), トマス・パーシー(Thomas Percy) (1560年生?-1605年)<sup>214</sup>, ジョン・ライト(John Wright) (1568年生-1605年没)<sup>215</sup>, クリストファー・ライト(Christopher Wright) (1570年生-1605年没)<sup>216</sup>, トマス・ウィンター(Thomas Wintour) (1571年あるいは1572年生-1606年没)<sup>217</sup>, ロバート・ウィンター(Robert Wintour) (1568年生-1606年

年生?-1606年没), フランシス・トレシャム(Francis Tresham) (1567年生?-1605年没) 等であった。

<sup>213</sup> ヨーク生まれ, 両親は英国教会(国教)であったが, 母親の再婚相手がカソリック教徒であったことから, ギド・フォークスは熱心なカソリック教徒として成長した。

<sup>214</sup> 彼は, 4代ノーサンバーランド伯ヘンリー・パーシー(1449年生-1489年没)の孫であった。トマスはプロテスタントとして育てられる。ケンブリッジ大学付属のピーターハウスに通い, 1579年にケンブリッジ大学に入学した。1591年にジョンとクリストファー・ライト兄弟の姉であったマルタ・ライトと結婚し, 彼は熱心なカソリックに改宗した。マルタは, 誠実なカソリックであり, ケイッビーの親友であった。

1594年に彼は9代ノーザバーランド伯ヘンリー・パーシー(1564年生-1632年没)にアニク城代として雇われた。1602年に9代ノーザバーランド伯は, 彼にスコットランド王ジェイムズ6世(イングランド王ジェイムズ1世に就くことが決まっていた)にカソリックに対して寛容であることを要請する手紙を託した。それに対するジェイムズ6世からの返事は好意的であったが, しかし, イングランド王に就いたジェイムズ1世は, カソリックに対する締め付けを厳しくする刑法を制定した。トマスは, 多くのイングランドのカソリックと同様にこの態度の変容には失望した。1605年11月4日の爆破事件の前日, トマスはノーサンバーランド伯と共に, ロンドン近くのSyon Houseで夕食を摂っていたが, 計画失敗の情報が伝えられると, 彼は, 翌日, クリストファー・ライト共にウエルズの方向に逃亡した。王の名前でその指名手配書が発行された。それによると, 彼は, 背が高く, 捻れた灰色の顎髭を蓄え, 猫背で赤ら顔, 短足であった。

<sup>215</sup> ジョン・ライト(John Wright)は, ヨークシャーのウエルウック(Welwick)生まれ, 洗礼を受け, ヨークの聖ピーター学校で弟のクリストファーやガイ・フォークと共に教育を受けた。彼の両親は, カソリックを頑なに信じていたために, 牢獄に入れられた。彼は, 物静かで強靱で, 落ち着いた身のこなしをする人物で, また剣の優れた名手で, 勇敢でもあった。彼は, この陰謀計画をケイッビーから知らされたのは, 1604年1月であり, その計画を知らされた2番目の共謀者であった。

陰謀計画が発覚したとき, 11月4日, 逮捕を避けるためライトはケイッビーと共にロンドンからHolbeche Houseに逃亡した。そしてイングランド軍と武力闘争をするために支援者を集めようとした。しかし, 11月5日, 共謀者が隠れていたHolbeche Houseはウスターシャー州の長官リチャード・ウォルシュ(Richard Walsh)と200人の軍隊に包囲され, 彼は瀕死の重傷を負い, その後死亡。首謀者のケイッビー, パーシー, そして弟のクリストファー・ライトは撃ち殺された。

<sup>216</sup> クリストファー・ライト(Christopher Wright)は, ジョン・ライトの弟であり, ヨークシャーのウエルウック(Welwick)で生まれた。彼の両親は, カソリックを頑なに信じていたために, 牢獄に入れられた。彼自身も熱心なカソリックであった。1601年にエリザベス1世に反対して, エセックの反乱に加わったが, その反乱は失敗した。彼には重い刑罰は科されなかった。

彼は, ケイッビーの陰謀計画に加わった6番目の人物であったという説と, 1604年と1605年の間, 時々, ロバート・ウィンター(Robert Wintour)等と共に, 陰謀会議に参加したという説がある。この事件で彼の役割は, ロンドンでパーシーが賃貸している建物から上院議会まで(実際には使用されなかった)トンネルを掘ることであった。彼が, 火薬事件の密告した手紙, すなわちモントレー・レターの差し出し人であったと, フランシス・トレシャム(Francis Treshman)が証言した。

<sup>217</sup> トマス・ウィンターは, ウスターシャー州のハディングトン・コートでジョージ・ウィンターの次男として生まれた。父方の祖母キャサリン(Catherine)がジョージ・スロックモートン卿(Sir George Throckmorton)の娘であったので, 彼は, スロックモートン家の子孫であった。この関係で火薬事件の共謀者で

没)<sup>218</sup>がいた。またこの計画に資金を提供した有力なカソリック教徒(旧教徒)のとエベラー  
ド・ディグビー(Everard Digby) (1578年生?-1606年没)<sup>219</sup>, フランシス・トレシャム(Francis

あったロバート・ケイッピーやトマス・トレシャムとは従兄弟の関係にあった。この陰謀で彼は、彼の語  
学力(ラテン語, スペイン語, フランス語)を利用して、海外からの協力を得る交渉に当たった。

この陰謀計画に参加する以前, 1601年から1602年にかけて, 彼はローマやスペインに旅行し, 2代エ  
セックス伯の処刑によって指導者を失った, イングランドでのカソリックの反乱に代わって, 議会で請願  
することであった。しかし, 彼は, アイルランド攻撃に失敗した直後のスペインから, 明確な支援を得る  
ことはできなかった。1604年2月, ケイッピーとジョン・ライトに会って, 上院会議の開催される初日  
(1605年11月5日)に上院を爆破し, ジェイムズ国王を殺傷するという陰謀計画を打ち明けられた。彼  
は, その計画には危険も伴うことを斟酌して, ケイッピーの計画に賛同した。1604年の3月頃, 海外から  
の支援を諦めていなかったため, 彼はフランドルに渡り, ウェールズのスパイを通じて, ガイ・フォク  
スを紹介され, フォクスにまだ具体化していない陰謀計画(イングランド絵でどでかいことをする)  
を話し, 賛同を得て, 2人はその4月にロンドンのLambethにあるケイッピーのロッジに戻ってきた。

1604年5月にケイッピー, ウィンター兄弟, ライト兄弟, そしてパーシーの5人がロンドンのStrand  
districtにあるDuck and Drake居酒屋で会合を開いた。5人はロンドンのLambethにある家屋をリースし,  
テムズ川を渡って運ばれる火薬を貯蔵するために使用した。しかし, フランシス・トレシャムの義  
理の兄である, ウィリアム・パーカーでありモンレー男爵(William Parker, 4<sup>th</sup> Baron Monteagle)  
が, 1605年10月26日, 彼の自宅で匿名の手紙を受け取った。それによると, 上院会議が開催される初日  
にはモンレー男爵が議会から離れているようにと書いてあった。彼は, ケイッピーと共にその件でトレ  
シャムと向き合い, もしトレシャムが無実でないならば, 彼を縛り上げることを申し出たが, しかし, ト  
レシャムは無実であることを強く主張した。1605年11月3日にケイッピーとパーシーの3人がロンドン  
で会合を持ったとき, トマスはケイッピーに陰謀計画の破棄を申し出たが, ケイッピーとパーシーはでき  
る限り計画を続けることを主張し, 結局, トマスの意見は退けられた。

<sup>218</sup> ロバート・ウィンターは, トマス・ウィンターの兄である。ウスターシャー州のハディングトン・コート  
でジョージ・ウィンターの長男として生まれた。父方の祖母キャサリン(Catherine)がジョージ・スロ  
ックモートン卿(Sir George Throckmorton)の娘であったので, 彼は, スロックモートン家の子孫であ  
った。この関係で火薬事件の共謀者であったロバート・ケイッピーやトマス・トレシャムとは従兄弟の関  
係にあった。彼は, 弟より遅れて, 1605年5月に火薬陰謀計画に加わった。彼の役割は, 武器と逃亡に必要  
になる馬の調達であった。彼が弟の陰謀計画参加から1年遅れたのは, 彼自身では必ずしもその計画に  
気が乗らなかったからである。例えば, 彼は, 馬を調達するためにウォーリック城から馬を盗むことには  
気が進まなかった。

<sup>219</sup> ディグビーはプロテスタントとして育てられた。1596年に10代でプロテスタントのMary Mulshawと  
結婚した。この結婚は彼にバーミンガムシャーのGayhurst Houseを財産としてもたらしたが, 彼女はイ  
エズス会士ジョン・ジェラルド(John Gerard) (1564年生?-1637年没)によってカソリックに改宗した。  
また彼が重篤な病気を患ったとき, Gerardは彼をも改宗させた。またGerardは彼の長男の名付け親で  
あった。彼はGayhurstに隠れ礼拝堂と聖具安置室を建てた。

彼がケイッピーに会ったのは, 1605年10月21日であった。ディグビー, 彼の妻, ガーネット(Henry  
Garnet) (1555年生-1606年没)およびアンネ・ボウ(Anne Vaux) (1562年生?-1637年没)がHarrowden  
で聖ルカ祝日を祝福していた時に, ケイッピーに出会った。ケイッピーは, 警戒しながら, ディグビーに  
陰謀計画を話した。しかし, 実際, ディグビーがその計画をどれ程知っていたかはよく分っていない。ケ  
イッピーがその計画にディグビーを引き込むに際して, その爆破によって誰も捕らえられる者はいない,  
その計画はすでにイエズス会士には話してある, イエズス会の許可なしには行動に移さない, などと言葉  
巧みに説得したのではないだろうか, と思われる。ケイッピーはディグビーにCoughton Courtを  
Throckmorton家から賃貸することを頼んだ。またディグビーは金銭的な援助を与えた。ウエストミンス

Tresham) (1567 年生? -1605 年没)<sup>220</sup> がいた。火薬の箱を議事堂の地下に据えて、国王と議會を一挙に吹き飛ばす火薬陰謀を計画した。この計画では、国王を殺害し、王の子女を死に至らす予定であったが、しかし、臆病なカソリック教徒（フランシス・トレシャムではないか）が親戚に投函した手紙によって、事前にその計画が漏れ、1605 年 11 月 4 日、火薬の番をしていたギドー・フォークは取り押さえられ、ロンドン塔に投獄され、拷問され、事件の全容を自白した<sup>221</sup>。この未遂事件は、ジェームズ国王の国教優遇政策に対するカソリック教徒

ターの借家の賃貸の支払にトマス・パーシーが困っていたので、彼は 1,500 ポンドの援助を約束した。

彼のこの陰謀計画での役割は、Dunchurch のレッド・ライオン宿に身を隠し、Hunting Party を準備することであった。この宿には、彼の他にロバートおよびトマス・ウィンター兄弟がいた。ガイ・フォークが逮捕されたこと知ったロンドンの共謀者（ケイッピー、パーシー、ライト兄弟など）も後にレッド・ライオンで合流した。そこからウォーリック城に攻め入り、馬を調達し、Huddington に向かい 11 月 5 日の午後 2 時頃にそこに着いた。その夜、雨の中馬を走らせ、スタフォードシャーの国境にある Holbeche House に着いた。しかし、政府軍に囲まれ、撃ち合いになり、11 月 8 日、ケイッピー、パーシー、ライト兄弟はウスターシャー州の長官に射殺された。

<sup>220</sup> トレシャムは、ノーザンプトン州で父トマス・トレシャムと母メリエル・スロックモートン (Meriel Throckmorton) の間で長男として生まれ、グロスターホールで教育を受けたという説がある。彼の父がカトリックコミュニティの指導者であったことから、彼は、カソリック教会に入れられた。ケイッピーの母親は、Anne Trockmorton で、フランシス・トレシャムの叔母に当たっていた。彼はケイッピーと従兄弟であった。

彼もジェームズ国王には期待していたが、非国教徒に対する罰金刑の廃止や森林税に関する約束を履行していないことに対して不満を懐いていた。1596 年にエリザベス 1 世が病気になること、予備的手段としてトレシャム、クリストファーとジョンのライト兄弟、およびロバート・ケイッピーなどのカソリック社会の指導者グループは逮捕され、ロンドン塔に送還された。1601 年に彼は、エセックスの反乱に参加したが、捕らえられ獄中に収監された。1602 年、彼は、スペイン王にイングランド侵攻を説得するために、トマス・ウィンターやガイ・フォークなどで結成されたマドリッド使節団の一員であった。

彼は、1605 年 10 月 14 日に陰謀計画のメンバーに加わった。ケイッピーが従兄弟の彼を誘ったのは、彼の資産が目当てであった。彼は、Clerkenwell でケイッピー達と会合を持った。ケイッピーは、トレシャムに 2 つのことを求めた。第 1 に、2,000 ポンド、第 2 に、Rushton Hall の使用であった。しかし、トレシャムには父親の負債のために金銭的余裕がなく、また Rushton Hall を閉鎖し、彼の家族はロンドンに戻ったため、Rushton Hall を提供することもできなかった。

11 月 1 日に匿名の Monteaule Letter が国王ジェームズ 1 世に渡り、翌日 2 日には枢密議会のメンバーは、上院および下院議會を捜索することを国王に報告していた。トレシャムは、ケイッピーとトマス・ウィンターに爆破計画を止めるように忠告したが、パーシーは最大限の努力は続けることを主張し、ケイッピー達は 11 月 4 日にミッドランドに向けてロンドンを出発した。

その匿名の Monteaule Letter の差出人がトレシャムによると言われてきたが、彼は、ロンドン塔で、その死の床での告白においても、その手紙については何も述べていない。彼がその手紙を書いた可能性は高いが、その手紙を Monteaule 男爵から受け取ったソールズベリー伯自身がその手紙を書いた可能性もある。トレシャムは、ロンドン塔の中で泌尿器系統の炎症によって引きおこされた strangury のために、1605 年 12 月 23 日に死亡した。彼は裁判を受けていないにも拘わらず、彼の首は、ケイッピーやパーシーと同様に、ノーザンプトンで晒された。

<sup>221</sup> この未遂事件に関与した人々は、殺害されるか処刑されるかした。首謀者のロバート・ケイッピーは、トマス・パーシーと共に隠れ家で殺害された。1606 年 1 月、ディグビーとフォークスは処刑された。

の反発であった。

1606年の議会では、イングランド王ジェームズ1世は、国庫収入の不足を補うために、王権が議会の協賛を得ることなく関税<sup>222</sup>を課すことができると提議した。またジェームズ1世は、その収入不足を埋めるために、封建的特権<sup>223</sup>を行使し、爵位の売買を行った。1611年、議会は、ジェームズ1世に対して、自由民(臣民)の財産や財貨に課税する場合には議会の協賛を必要とすることを請願し、併せて高等宗務官裁判所(Court of High Commission)などの裁判権が法によって制限されることなど宗教問題も王権の範囲外であることを認めるように請願した。ジェームズ1世は、1611年に議会を解散した。それから1621年までの間に、1614年に唯一回議会<sup>224</sup>を召集したにすぎない。1614年の議会在解散されると、1621年まで議会を再開しなかった。その間、ジェームズ1世は、議会を無視しただけではなく、枢密院の権限を奪う横暴な行動を取った。この行動は、彼の王権神授説<sup>225</sup>に裏付けられていた。ジェームズ国王自身が国事を統制する首相となり、枢密院から国事を牽制する権限を取り上げて、気に入りの無能な寵臣に国事を任せ<sup>226</sup>た。

ジェームズ1世の対外政策に目を向けてみよう。対スペイン対策によって、ジェームズ国王の外交姿勢を見ることができる。1618年、カソリック教のオーストリアのハプスブルグ家が支配するボヘミアの反乱によって、ドイツの平和を維持してきていた宗教上の休戦が破れた。ジェームズ1世は、スペインを抑圧することではなく、それと友好関係を保つ政策を採ろうとした。彼は、ドイツ諸公がボヘミアを支持したとき、それを支援することを拒否しただけではなく、ファルツ選帝侯<sup>227</sup>を支持してきたオランダに戦いを仕掛けると脅したのであ

<sup>222</sup> ジェームズ1世以前にも、羊毛、皮革、錫、葡萄酒などの輸出入に関税を課していたが、彼は、多くの財貨の輸出入に関税を課す制度を布告した。従来、そのためには議会の協賛(承認)が必要であった。またレバント商会が解散したとき、その商会が取り立てていた関税は王権に帰属するとして差し押さえた。議会の抗議も聞き入れられなかった。さらに財務府裁判所に持ち込んだが、その裁判所も関税は外国貿易の結果であり、外国貿易は王権に帰属し、その結果である関税も王権に属する、と判決した。

<sup>223</sup> 若い相続人の後見権、女相続人の結婚権を使って収入の増加を図った。1610年の議会でソールズベリー伯ロバート・セシル(Robert Cecil, Earl of Salisbury)(1563年生-1612年没)は、庶民院が王室費20万ポンド増額することと引き替えに、その特権や徴発権を放棄する「大契約(The Great Contract)」ことを提議したが、庶民院は信用しなかった。

<sup>224</sup> この議会の選挙では、多くの新人議員が当選した。300人の新人議員が誕生し、その中には、ジョン・エリオットやトマス・ウェントワースなどがいた。

<sup>225</sup> ジェームズが、国事を王と枢密院に委ねるように命じた。1611年の議会で、ジェームズ1世は、王のなし得ることを議論することは臣民の暴動であり、国王の権力について議論されることには、決して、賛成しないと述べた。

<sup>226</sup> ジェームズ1世は、寵臣ジョージ・ヴィラーズ(George Villiers)(1592年生-1628年没)をバッキンガム公(Duke of Buckingham)にし、彼に政府の高官を任命する権限を与えた。彼は、才能は無かったが、若く美形からくる自信と大胆さを持っていた。

<sup>227</sup> ファルツ選帝侯は、神聖ローマ帝国の諸侯で、ドイツ西部のライン地方を治め、また、選帝侯の一人とし

た。熱心なカルヴァン派で神聖ローマ帝国におけるプロテスタントの擁護者であったファルツ選帝侯フリードリヒ4世（Friedrich IV）（在位1583年-1610年）にボヘミアから身を引くように迫った。ジェームズ1世は、平和を回復するために、イングランドとスペインとが共同することを狙っていたが、フリードリヒは同意せず、またスペインもまた皇帝援助に乗り出した。ボヘミアの局地戦がヨーロッパ戦争や30年戦争に突入した。

この外交政策におけるジェームズ1世の政略は失敗した。イングランドもこの戦争に巻き込まれ、ジェームズは、ファルツ支援の兵を送るために、また、戦費調達のために、議会を召集しなければならなかった。1621年に、議会が召集された。この議会で国王は50万ポンドの王室費を求めたが、議会は15万ポンドを認めただけであった。庶民院は、ジェームズ1世を、スペインとの戦争とフランシス・ベーコン<sup>228</sup>（Bacon Francis）（1561年生-1626年没）を収賄のかどで弾劾した。

ジェームズ1世は、庶民院（議会）との間で、王権を巡って権力闘争を繰り広げた。市民層が成長し、王権は抑圧される傾向にあったが、ジェームズ1世は、自身の王権神授説を盲信し、議会ならびに法を無視した。

ジェームズ1世は、宗教による両国（イングランドとスコットランド両王国）の連合の推進を目指していた。ジェームズ1世が即位すると、国内の聖職者の10パーセントに当たる800人から千人願<sup>229</sup>（ミレナリ・ペティション）が提出された。これに返答するために、ジェームズ1世は、1604年にハンプトン・コート宮殿（Hampton Court Palace）に主教やピューリタンの聖職者などの宗教界の代表を集め、会議を開き、その席上で、ジェームズ1世は、国教会の立場を採ることと共に、ピューリタンやカソリックの極端な立場の排除を宣言した。

---

て国王選出権やその他の特権を有していた。ライン・プファルツ（ファルツ）伯とも訳され、単にプファルツ（Pfalzgraf）とも呼ばれた。選帝侯である場合には、プファルツ（ファルツ）選帝侯（Kurpfalz）とも呼ばれた。

<sup>228</sup> 彼は貴族出である。父（ニコラス・ベーコン）（Nicholas Bacon）（1509年生-1579年没）は国璽尚書（首相）であり、彼の伯父は、國務卿（1558年-1572年）ならびに大蔵卿（1572年-1598年）に就いたウィリアム・セシル（William Cecil, Duke of Burghley）（1520年生-1598年没）であった。本人も1613年に検事総長、1617年に国璽尚書となり、シェイクスピアが死んだときに枢密院に招かれ、1618年に大法官に上り詰めている。1621年の議会では、庶民院によって汚職のために弾劾された。ベーコンは、まだ訴訟が片づいていない人々から贈与を受けていた。彼は、国璽を取り上げられ、官職失格と議員失格を宣告された。その後、セント・オルバーンに引きこもって執筆と思索の生活に入った。「新機関（Novum Organum）」（1620年）、「ニューアトランティス（New Atlantis）」（1626年）を刊行している。

<sup>229</sup> その願いでは、裁判所の改革、祈祷書から迷信的慣用を除くこと、経外聖典から日課（朝夕に読む聖書の一節で、祈祷書に書かれていた）を廃止すること、安息日をもっと厳格に守ること、説教師の叙任と訓練などを求めた。ピューリタンから、白い法衣の着用、洗礼時の十字のしるしの使用などの一定の礼拝様式上の些事を受け入れるか断るかの自由、説教をすることや安息日を守ることや聖徒記念日を守らないことなどに関する請願が提出されていた。

彼は、長老会制度の教会に王権を脅す要素を見て取っていたが、スコットランドの宗教改革やスコットランドの国教統一が彼の手には負える問題ではなかった。ジェームズ1世は、主教(司教)制度を拒否していた改革派教会(長老制教会)に対し、司教国会議員を任命して対抗した<sup>230</sup>。彼のスコットランドにおける体験から、スコットランドの長老会制度では神と君主(国王)が、折り合わなく、彼の王権に馴染まない、と確信していた。国家に従属する教会を求めていたジェームズ1世にとっては、君主制に馴染む教会組織として主教(司教)制度の教会(国教会)の立場を採った、と考えられる。ジェームズ1世は、主教制を取り入れて、教会を厳粛にすることに服従に従わない教会牧師300人を離職させた。長老派の勢いが勝っていたために、ジェームズ1世は、教会の長が国王であることに徹底的に反対していたアンドリュー・メルヴィル<sup>231</sup>(Andrew Melville)(1545年生-1622年没)を1606年にロンドンに呼び出し、スコットランドから追放した。1618年に、パースに聖職者の会議を召集し、「パース5か条」で司教(主教)制を強化した。この中には、長老派が最も反対していた聖餐のパンとブドウ酒を受けることも含まれていた。

### むすびにかえて

この研究ノートでは、14世紀から17世紀のはじめにかけてのスコットランドの国民性とその宗教に焦点を当て、スコットランド国民の主権の有り様を概観した。その時代は、スコットランドのイングランド(より正確にはイングランド国王)からの第2次独立戦争の時代からステュアート王家の王権確立の時期であった。ジェームズ1世からジェームズ2世を経てジェームズ4世の治世までの100年間に、スコットランドのステュアート王家の王権の基盤が確立し、その伸張がなされ、またジェームズ5世からメアリー女王を経てジェームズ6世の治世の100間では、その王権と台頭する市民権との格闘の時であった、と見ることができ

<sup>230</sup> ジェームズ1世自身もカルヴィニストであったので、彼は宗教上の理由からではなく、政治的理由からピューリタンを避けた、と思われる。カソリックへの弾圧を恐れたガイ・フォークス(1570年生-1606年没)を実行首謀者とする火薬陰謀未遂事件が起こり、この事件に関わった人々は、処刑されるか断頭台の刑にされた。またイエズス会の支部長ガーネット(John Garnet)(1555年生-1606年没)は、審問にかけられ処刑された。ピューリタンの抵抗運動は、ジェームズ1世の治世下では、目立たなかったが、チャールズ1世の時代になって加速された。

<sup>231</sup> アンドリュー・メルヴィルは、留学先のフランスあるいはジュネーヴからスコットランドに帰国し、1580年にセント・アドリュース大学の学長になった。1582年に長老派教会の大会議長を務め、カトリック的な監督制度をスコットランド教会に持ち込むことに反対し、教会に長老制を確立することに努力した。彼は、政府によるあらゆる干渉から教会の自由を守るために闘った。彼は、ジェームズ王を「神の愚かな僕」と呼び、「教会はイエス・キリストの王国であり、その国王は神であり、ジェームズ6世はそのメンバーである」と主張した。それに対し、ジェームズ6世は、王は教会の単なるメンバーではなく、教会と国家の長であるとし、ブラック・アクトによって、国王が最高権威者であることを規定し、司教制度を謳った。

よう。特に、メアリー女王が王位に就いていた16世紀の中頃には、スコットランドの市民層が経済的にも勢力を伸ばし、国王や教皇に新たな価値を突きつけることが出来るようになるまでに成長していた。

その頃、ヨーロッパ大陸では、ルターに端を発する新しい信仰が広まりつつあった。スコットランドでは、新教によってヨーロッパ大陸におけるほどに強い影響を受けてはいなかったが、イングランド王ヘンリー8世（在位1509年-1547年）のローマの教皇権からの離脱を目指したイングランド発の新教（国教会）の影響を受ける恐れはあった。スコットランドでも新教徒と旧教徒の間での対立から起こる問題は深刻になり、その大陸におけると同様に、プロテスタント（長老派）とカトリックの闘いと両者の対立が深まった。スコットランドでは、この問題でもイングランド国王に加担する新教派とフランス国王に加担する旧教派の対立に国政は振り回された。1560年にはジョン・ノックスなどのプロテスタント信奉者による教会破壊、聖像の打ち壊し、掠奪などの暴動がおこり、スコットランドは内乱状態になった。プロテスタント（長老派）はイングランドに加勢軍を求め、カトリック（旧教派）はフランスに援軍を求めたので、スコットランドの宗教問題にイングランドとフランスが介入し、イングランド軍が、フランス海軍を撃破し、エディンバラ条約<sup>232</sup>が締結され、イングランドとフランスを巻き込んだ反乱は終結した。メアリー女王の時代には、必ずしもプロテスタント（長老派）がスコットランドにおいて排除されてはいなかった。

「スコットランド国教の統一」の問題は、本稿の第4章第2節においても指摘したように、ジェームズ6世の残した問題であった。実際には、ジェームズ6世は、主教（司教）制度を拒否していた改革派の教会に対し、司教国会議員を任命して対抗したが、長老派の勢いが勝っていたために、教会の長が国王であることに徹底的に反対しているアンドリュー・メルヴィルを1606年にロンドンに呼び出し、スコットランドから追放し、1618年に、パースに聖職者

<sup>232</sup> この条約は、1560年7月にエディンバラで合意された。フランス軍によるリース包囲の終結と、フランスとの古い同盟を新しいイングランド-スコットランド協定に置き換えるために、イングランドのエリザベス1世の弁務官であったウィリアム・セシルとニコラス・ウオットン、フランス代表のジャン・ドゥ・モントラック（Jean de Montluc, Bishop of Valence）との間で交渉が持たれた。その内容は、全ての陸海部隊はスコットランドから撤退すること、メアリーとフランソワ2世は紋章にイングランド-アイルランドの記章や記を使用しないこと、であった。

この条約は、メアリー女王の拒否によって、1587年まで批准されなかった。メアリー女王は、フランス王の配偶者であったこと、メアリー女王は、盟約を彼女の母メアリー・ギーズに対する反乱であること、さらにその条約はイングランド王として、エリザベス女王を認めることになるので、その批准に反対した。批准されなかったが、その条約は、イングランド軍とフランス軍のスコットランドからの撤退ならびにスコットランドにおけるカトリック教会の凋落をもたらした、と考えられる。

また、1560年8月の宗教改革会議では、ジョン・ノックスが起草した「スコットランドの信条」が承認され、ローマ教皇の司法権の否認、異端禁止法などのカトリック諸法の廃止、ミサの禁止を決めた。これは、スコットランドにおけるカトリック教会の凋落を強く印象づけた。

会議を召集し、「パース5か条」で主教(司教)制を強化した。彼は、政治的理由からプロテスタント(長老派)の弱体化を目指した。それを支えたのが彼の王権神授説であった。

王権神授説は、17世紀の初めのイングランドおよびスコットランドの同君連合成立後、ジェイムズ1世ならびにチャールズ1世によって大きく修正されることとなった。プロテスタントとカソリックの戦い、あるいは王権と市民権の戦いがイングランド議会で展開され、スコットランドでは17世紀を通して宗教を巡る戦いが繰り広げられた。同君連合後のスコットランドでは、イングランドと同様に、主権を王から市民に移行する市民運動の隆盛時代に入った。1603年の「同君連合」から1707年の「連合王国」の100年間におけるスコットランドの国民性の変遷の歴史については、別稿で展開する。

#### 参考文献

- デイヴィッド・アーミテイジ 著(平田・岩井・大西・井藤 共訳)『帝国の誕生』日本経済評論社 2005年6月
- マックス・ウェーバー 著(大塚 久雄 訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 1989年1月
- マックス・ウェーバー 著(阿閉 吉男・脇 圭平 共訳)『官僚制』角川文庫 1971年8月
- マックス・ウェーバー 著(脇 圭平 訳)『職業としての政治』岩波文庫 1980年3月
- 梶田 孝道 著『統合と分裂のヨーロッパ』岩波新書 1993年11月
- 川畑 洋一 編著『現代世界とイギリス帝国』ミネルヴァ書房 2007年6月
- 北 政巳 著『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の繁栄』藤原書店 2003年3月
- ジョン・キャンベル著(坂本 賢三 著)『中世の産業革命』岩波書店 1978年12月
- エドモンド・キング著(吉武 憲司 監訳)『中世のイギリス』慶応義塾大学出版 2006年11月
- リンダー・コリー著(川北 稔 監訳)『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会 2000年9月
- バルーチ・スピノザ 著(畠中 尚志 訳)『国家論』岩波文庫 1971年9月
- 塩川 伸明 著『民族とネイション』岩波新書 2008年11月
- スマウト, T. C. (木村 正俊 監訳)『スコットランド国民の歴史』原書房 2010年11月
- アダム・スミス 著(大内 兵衛・松川 七郎 共訳)『諸国民の富』(四)岩波文庫 1992年4月
- 増田 史郎 著『ヨーロッパとは何か』岩波新書 1967年7月
- ヨーハン・ホイジンガ(堀越 孝一 訳)『中世の秋(上)(下)』中公文庫 1984年4月
- エドゥイン・ミュア 著(橋本 楨矩 訳)『スコットランド紀行』岩波文庫 2007年
- A. L. モートン(鈴木 亮・荒川 邦彦・浜林 政夫 訳)『イングランド人民の歴史』未来社 1976年
- 森 護 著『スコットランド王国史話』大修館書店 1996年12月
- 森 護 著『英国王室史話』大修館書店 1988年7月
- ジェフロード・デランティ 著(山之内 靖・伊藤 茂 共訳)『コミュニティ』NNT出版 2007年4月
- ジグムント・バウマン 著(奥井 智之 訳)『コミュニティ』筑摩書房 2008年1月
- David Ross, *Scotland: History of A Nation*, Lomond Books 1998年
- ジョン・ロック 著(鶴飼 信成 訳)『市民政府論』岩波文庫 1971年1月
- (くぼた よしひろ マクロ経済学と金融論専攻)